

F D活動報告書

第 10 号 (2014 年度)

関西大学大学院会計研究科
(会計専門職大学院)



関西大学大学院会計研究科

教務・F D委員会

平成 27 年 3 月

目 次

はじめに	1
I 授業評価アンケートの実施及びフィードバック方法	
(1) 対象科目	2
(2) 実施方法	2
(3) 分析方法	2
(4) フィードバック方法.....	2
(5) 対象科目リスト.....	3
II 平成 26 年度授業評価アンケート結果概要	
(1) 平成 26 年度授業評価アンケート（春学期）結果概要.....	7
(2) 平成 26 年度授業評価アンケート（秋学期）結果概要.....	43
(3) 平成 26 年度授業評価アンケート（系平均）結果概要.....	73
III 26 年度授業評価アンケートフォーム.....	87
IV 講演会	91

はじめに

関西大学大学院会計研究科は、「世界水準で通用する、理論と実務に習熟した会計専門職業人」を養成することを目的としており、この目的を達成するためには、教員が独自で教育に最善を尽くすことはもちろんのこと、本研究科として組織的に教育方法・内容を見直し、改善する取組みが必要になる。教員の教育能力を高め、質を向上させる実践的な組織的取組みが FD(Faculty Development) 活動である。本研究科における FD 活動に関する恒常的組織として、教務・FD 委員会が組織され、さらに教務・FD 委員会の下部組織として、系列ごとに専攻分野別教務・FD 委員会が組織されている。このように本研究科においては、研究科全体として組織的な FD 活動を常時行っている。

本研究科では、この FD 活動によって、教員の教育能力及び教育の質を高め、教育効果を向上せしめべく、不断の努力を行っている。教育効果は、単に教員がよりよいと思う教育内容を、教員がよりよいと思う方法で提供するように策を講じるだけでは、改善されない。すなわち、提供される教育への学生の反応を認識しつつ、教育内容やその方法を調整していくことで、より効果的な教育が提供できるようになると考えられる。そのため、本研究科では、設立当初より、学生による授業評価アンケートを実施してきており、この授業評価アンケートの結果は、FD 活動の大きな柱の一つとなっている。

本研究科の授業評価の特徴は、①学生自身による自己評価と学生による担当者の授業評価という一般的事項はもれなく含んでいること、②学生による授業評価の結果に対しては担当教員による分析と授業改善の試みを記述させること、③科目系列の取りまとめ役が、②による複数科目を比較可能な形で自己評価していること、④以上の結果を、教授会及び FD 委員会での議論の材料としていること、⑤そして授業評価の結果と分析等を本研究科のホームページにて公開していること、が挙げられる。

FD 活動報告書は、上記の学生による授業評価アンケートの結果とそれに対する教員の認識と今後の改善案を中心にして、本研究科が行った FD 活動をまとめたものである。FD 活動報告書は、これまで第 1 号から第 9 号まで作成され、本書は平成 26 年度の FD 活動をまとめた第 10 号である。本研究科は平成 26 年度に 2 度目の分野別認証評価を受けた。認証評価を受けるにあたって、これまでの FD 活動報告書は、本研究科の自己点検・評価報告書と合わせて、その資料として提出された。平成 26 年度に受けた認証評価の結果は、1 度目に受けた認証評価と同様、評価基準のすべてを満たしていると評価され、本研究科は、「認定会計大学院」称号を得た。

これまでの FD 活動の結果を受け、コース制の導入や導入科目群の設置などの教育体制・カリキュラムの見直しを行ってきた。このコース制導入などの改革が機能しているかどうかもまた FD 活動において検証していかなければならない。すべての教職員が本研究科の設立の趣旨を確認し、必要な教育改善は絶え間なく行うこととしているが、この FD 活動報告書の作成を通じてあらためて問題を真摯に分析する機会としている。

今後も、FD 活動を継続して行い、FD 報告書として公表していくことによって、本研究科の教育が向上していくであろうと確信している。

平成 27 年 3 月

会計研究科長 三島 徹也

I. 授業評価アンケートの実施及びフィードバック方法

(1) 対象科目

本報告書に掲載した授業評価アンケートは、平成 26 年度の春学期と秋学期に開講された会計研究科専任教員が担当するすべての授業科目を対象としている（次頁参照）。

(2) 実施方法

本研究科では、授業評価アンケートを各講義の終了時に実施している。

通年開講の論文指導・修士論文を除き、すべての科目において、15 回の講義が実施される。最終講義日の前回である第 14 回目の講義で、授業評価アンケートの質問状と回答用紙が授業担当者によって配布され、最終講義日の講義終了時に授業評価アンケートの回答用紙が授業担当者によって回収される。回収された回答用紙は、授業担当者によって事務に提出され、そこで集計される。授業評価アンケートは講義時間に影響を与えぬよう、また受講生の正直な回答を促すため、講義時間外に無記名で記入される。集計された結果は、今後の授業内容および方法の改善のための資料として、各授業担当者に配布される。

授業評価アンケートで使用された質問状は、後ページに掲載している。

(3) 分析方法

専任教員が担当する授業科目及び系別平均については、原則として担当教員が分析している。

(4) フィードバック方法

各担当者が前年度の授業評価アンケートとの比較を行い、授業改善が有効であったか否かを検証した。

(5)対象科目リスト(索引)

類別	授業科目	単位	配当年次	系統	開講学期	頁
基本科目群	中級商業簿記	1	1	財務会計	春・秋	7・43
	中級工業簿記	1	1	管理会計	春・秋	8・44
基本科目群	会計専門職業倫理	1	2	横断科目	春・秋	9・45
	企業法	1	1	法 律	春前・秋	10・46
	上級簿記	1	1	財務会計	春前・秋	11・47
	上級財務会計論	1	1	財務会計	春後・秋	12・48
	上級原価計算論	1	1	管理会計	春前	13
	上級管理会計論	1	1	管理会計	春後・秋	14・49
	監査制度論	1	1	監 査	春後・秋	15・50
	監査基準	1	1	監 査	春・秋	16・51
	会計専門職業数学	2	1	横断科目	春	17
	会計基準論	2	1	財務会計	秋	52
基本科目群	会計制度論	2	1	財務会計	春	18
	財表作成簿記	2	1	財務会計	秋	53
	戦略管理会計論	2	1	管理会計	不開講	
	上級税務会計論	2	2	税務会計	秋	
	租税法会計論	2	1	税務会計	春	19
	公会計理論	2	1	行 政	秋	
	監査実施論	2	1	監 査	秋	
	監査報告論	2	1	監 査	秋	54
	商法	2	1	法 律	春	20
	会社法	2	1	法 律	秋	55
	民法(総則・物権)	2	1	法 律	秋	
	経営学理論	2	1	経 営	春	
	インベストメント論	2	1	ファイナンス	春	21
	コーポレート・ファイナンス論	2	1	ファイナンス	秋	
	ミクロ経済学	2	1	経済・IT	秋	56
	統計学	2	2	経済・IT	秋	
	国際会計基準論	2	2	財務会計	秋	57
	国際会計制度論	2	2	財務会計	春	
	企業分析論	2	2	管理会計	春	22
	コストマネジメント論	2	2	管理会計	秋	58
	上級税務戦略論	2	2	税務会計	秋	
	公監査論	2	2	行 政	春	
	政府・自治体会計論	2	2	行 政	春	23
	国際監査制度論	2	2	監 査	秋	
	金融商品取引法	2	2	法 律	春	
	上級会社法	2	2	法 律	春	24
	租税法理論	2	2	法 律	春	25
	民法(債権)	2	2	法 律	春	
	経営戦略論	2	2	経 営	春	
	経営組織論	2	2	経 営	春	
	資本市場論	2	2	ファイナンス	春	26
	マクロ経済学	2	2	経済・IT	春	27
発展科目群	会計事例研究	2	1	財務会計	春	28
	管理会計事例研究	2	1	管理会計	春	
	監査事例研究	2	1	監 査	秋	59
	基本会計プログラム演習	2	1	経済・IT	秋	60
	基本監査プログラム演習	2	1	経済・IT	秋	61
	BATIC演習	2	1	経済・IT	秋	
	IFRS実務	2	1	財務会計	秋	
	会社経理実務	2	1	財務会計	春	29
	ディスクロージャー実務	2	2	財務会計	春	30
	税務会計事例研究	2	2	税務会計	春	
	企業法判例演習	2	2	法 律	秋	
	起業・株式公開事例研究	2	2	経 営	春	
	実践会計プログラム演習	2	2	経済・IT	秋	
	実践監査プログラム演習	2	2	経済・IT	夏集	
	ソリューション・イン・アカデミック	2	1	個別演習科目	秋	62-64
	ソリューション・イン・プロフェッショナル	2	2	個別演習科目	春	31-32
	ソリューション・イン・エキスパート	2	2	個別演習科目	秋	
	論文指導・修士論文(基礎)	2	1	個別演習科目	秋	65-66
	論文指導・修士論文	4	2	個別演習科目	不開講	

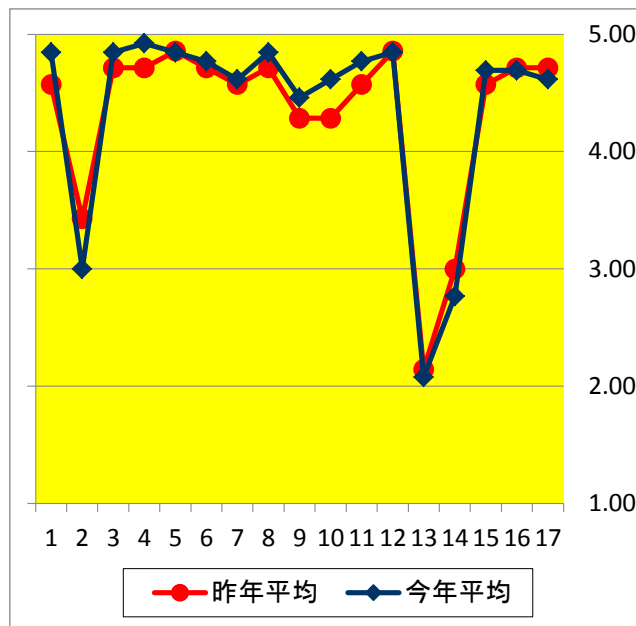
類別	授業科目	単位	配当年次	系統	開講学期	頁
横断科目	特殊講義(企業経営を取り巻く会計の課題と方向)	2	1	横断科目	春	
	特殊講義(経営と会計)	2	1	横断科目	秋	67
横断科目	特殊講義(海外経営事例研究)	2	1	横断科目	秋	68
	特殊講義(証券7リスト協会寄附講座・証券アナリストの基礎)	2	1	横断科目	春	
	特殊講義(ERPと会計)	2	1	横断科目	春	33
	中小企業金融論	2	1	ファイナンス	秋	
	会計検査制度論	2	1	監 査	秋	
	実践コミュニケーション	2	1	経済・IT	秋	
	英文会計論	2	2	財務会計	秋	
	会計戦略論	2	2	財務会計	春	34
	資産会計論	2	2	財務会計	春	35
	負債・資本会計論	2	2	財務会計	春	36
応用科目群	企業結合会計	2	2	財務会計	春	
	企業価値マネジメント論	2	2	管理会計	春	
	マネジメント・コントロール・システム論	2	2	管理会計	秋	
	国際税務戦略論	2	2	税務会計	春	
	非営利会計論	2	2	行 政	春	37
	国際公会計制度論	2	2	行 政	不開講	
	保証業務論	2	2	監 査	春	38
	内部監査論	2	2	監 査	春	
	不正摘発監査論	2	2	監 査	不開講	
	法人税法	2	2	法 律	春	39
	行政法	2	2	行 政	秋	
	プロダクト・マネジメント論	2	2	経 営	春	
	国際経営論	2	2	経 営	不開講	
	リスク分析論	2	2	ファイナンス	春	
	国際財務戦略論	2	2	ファイナンス	春	40
	公共経済学	2	2	経済・IT	秋	69
	XBRL論	2	2	経済・IT	秋	
	国際会計事例研究	2	2	財務会計	秋	
	国際管理会計事例研究	2	2	管理会計	春	
	国際税務会計事例研究	2	2	税務会計	秋	
	公会計・公監査事例研究	2	2	行 政	秋	
実践科目	国際監査事例研究	2	2	監 査	春	
	企業再生事例研究	2	2	経 営	秋	
	リサーチ・メソドロジー	2	2	経済・IT	不開講	
	国際コミュニケーション論	2	2	経済・IT	秋	
会計系科目	財務会計系					73
	管理会計系					74
	税務会計系					75
	監査系					76
非会計系科目	法律系					77
	経営系					
	ファイナンス系					78
	行政系					79
	経済・IT系					80
	個別演習科目(ソリューション・イン・アカデミック)					81
	個別演習科目(ソリューション・イン・プロフェッショナル)					82
	個別演習科目(論文指導・修士論文)					83
系列平均						84

※掲載対象科目は、平成26年度開講の会計研究科専任教員担当科目とする。
(公会計理論、コーポレート・ファイナンス論、統計学、ソリューション・イン・エキスパートについては、諸事情により未実施または未回収)

Ⅱ－(1)．2014 年度授業評価アンケート(春学期)結果概要

科 目	中級商業簿記(A)			
配当年次	1	開講時限	春金5	
受講者数	14	回答者数	13	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.57	4.85	5	5	4
2	3.43	3.00	3	3	3
3	4.71	4.85	5	5	4
4	4.71	4.92	5	5	4
5	4.86	4.85	5	5	4
6	4.71	4.77	5	5	4
7	4.57	4.62	5	5	4
8	4.71	4.85	5	5	4
9	4.29	4.46	5	5	3
10	4.29	4.62	5	5	3
11	4.57	4.77	5	5	4
12	4.86	4.85	5	5	4
13	2.14	2.08	2	4	1
14	3.00	2.77	2	5	2
15	4.57	4.69	5	5	4
16	4.71	4.69	5	5	4
17	4.71	4.62	5	5	4
回答者数	7	13			



受講生の傾向

受講生の多くは、日商検定2級レベルの理解が不足しているか、またはその理解に自信のない学生である。なかには、簿記の知識がほとんどない受講生もいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

簿記一巡の流れを明確に意識して学習してもらうようにした。とくに仕訳、転記、決算の流れを繰り返してトレーニングした。仕訳のレベルは、日商検定4級から2級までを幅広く取り上げた。講義中は説明よりも問題演習に重点をおいて、一人ずつ個別に質問に応じ、全員の理解を確認して回った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

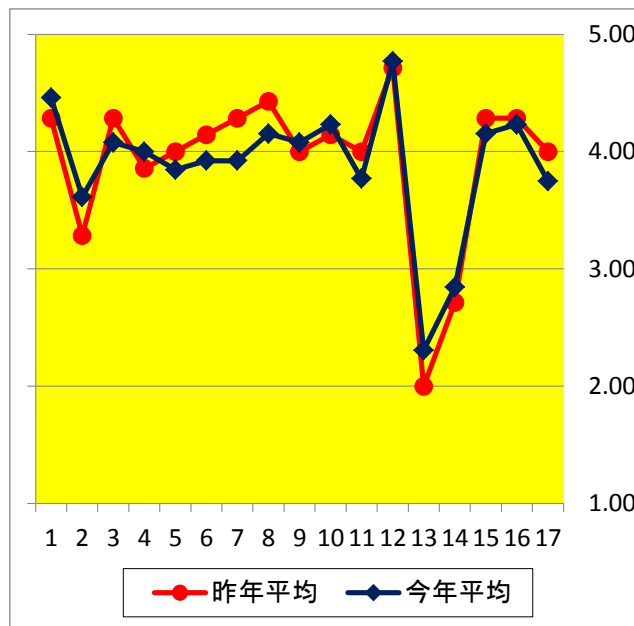
今年度の講義展開は、全体的に良い感触を得たようである。次年度も継続することにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

科 目	中級工業簿記(A)			
配当年次	1	開講時限	春月5	
受講者数	14	回答者数	13	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.29	4.46	4	5	4
2	3.29	3.62	3	5	3
3	4.29	4.08	4	5	3
4	3.86	4.00	4	5	2
5	4.00	3.85	3・4	5	3
6	4.14	3.92	4	5	2
7	4.29	3.92	4	5	2
8	4.43	4.15	4	5	3
9	4.00	4.08	4	5	3
10	4.14	4.23	4	5	3
11	4.00	3.77	4	5	1
12	4.71	4.77	5	5	3
13	2.00	2.31	2	4	1
14	2.71	2.85	3	5	2
15	4.29	4.15	5	5	1
16	4.29	4.23	4	5	2
17	4.00	3.75	4	5	1
回答者数	7	13			



受講生の傾向

本講義の受講者数は、前年度と比較して2倍近くに増加していることから、授業における1人当たりの個別指導の時間はかなり減少している。また、受講生の出席率は比較的高いと考えられる。その一方で受講者のレベルには大きなばらつきがあった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度における授業評価アンケートの評価結果が比較的高かったため、講義内容についての大きな変更は行っていない。ただし、演習時間において、各学生に丁寧に声を掛けることに留意した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

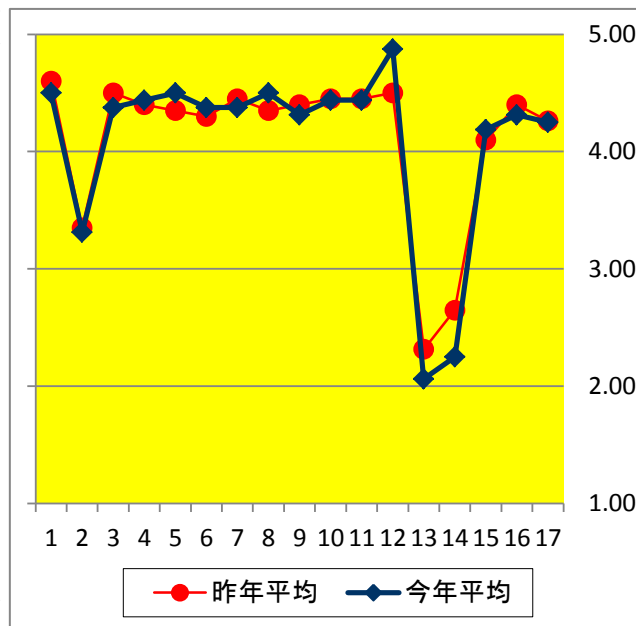
評点はいずれも比較的高かったため、継続して高い評価を得られるように留意する。
また、受講者の予習および復習の時間が比較的に少ないため、今後の意識付けが必要と考えられる。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体的に評価結果の数値がやや低下しているが、これが一時的な現象であるのか、あるいは受講者の増加や受講者のレベルの低下といった構造的な問題であるのかが明らかでないため、慎重に原因の検討を行う必要があると考えられる。また、予習および復習の数値が低いため、今後も予習および復習の時間をかけるように声を掛ける必要があると考えられる。

科 目	会計専門職業倫理(A)			
配当年次	2	開講時限	春水2	
受講者数	17	回答者数	16	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.60	4.50	5	5	3
2	3.35	3.31	3	5	3
3	4.50	4.38	4	5	3
4	4.40	4.44	5	5	3
5	4.35	4.50	4・5	5	4
6	4.30	4.38	4	5	3
7	4.45	4.38	4	5	3
8	4.35	4.50	5	5	3
9	4.40	4.31	4・5	5	3
10	4.45	4.44	4	5	4
11	4.45	4.44	5	5	2
12	4.50	4.88	5	5	4
13	2.32	2.06	1	5	1
14	2.65	2.25	2	4	1
15	4.10	4.19	4・5	5	1
16	4.40	4.31	5	5	2
17	4.26	4.25	4	5	3
回答者数	20	16			



受講生の傾向

回答については、昨年度までの回答とほぼ同じ傾向が見られた。全般的に満足度は高いものの、予習・復習に掛ける時間はあまりなかったとのことであった。しかし、下記のとおり、受講生の減少とともにプレゼンテーションの回数を増やしており、従来よりもそのための準備時間は増えているものと推定される。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生数が16人となり、班編成が難しくなったが、今回は、3人を1班とし5班体制で行った。班数が減ったことにより授業で取り上げる事例が少なくなった分、講義の中で実際の倫理抵触事例の紹介を増やした。また、7回目の講義(倫理的意思決定方法)を2回に分け、班で検討する時間を多く採らせるようにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

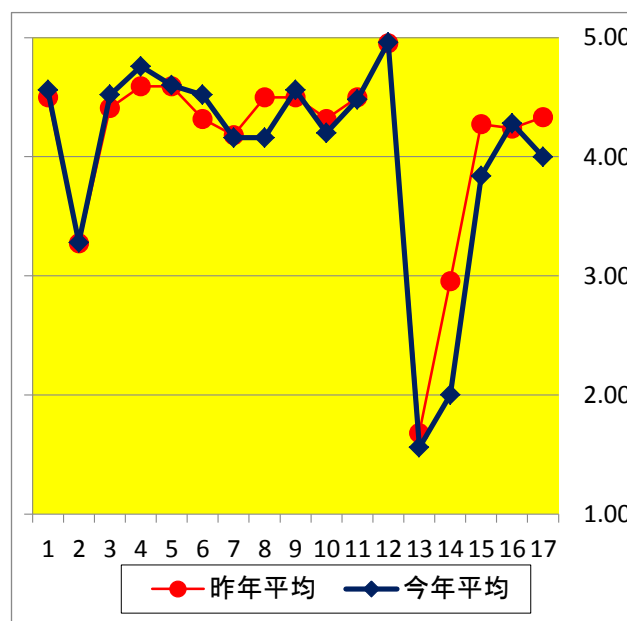
今後は一層受講生が減ると予想される。講義内容の充実とともに、プレゼンテーション及びそれに関連するディスカッションを活性化する等工夫を凝らしていきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

秋学期以降はさらに受講生が減少する。これまでとは異なる教材を使用する、事例紹介を増やす等、一層の工夫を行っていく。

科 目	企業法(A01)			
配当年次	1	開講時限	春前火2・金3	
受講者数	27	回答者数	26	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.56	5	5	4
2	3.27	3.28	3	5	3
3	4.41	4.52	5	5	3
4	4.59	4.76	5	5	4
5	4.59	4.60	5	5	3
6	4.32	4.52	5	5	3
7	4.18	4.16	4・5	5	2
8	4.50	4.16	5	5	3
9	4.50	4.56	5	5	3
10	4.32	4.20	4	5	3
11	4.50	4.48	5	5	3
12	4.95	4.96	5	5	4
13	1.68	1.56	1	4	1
14	2.95	2.00	2	4	1
15	4.27	3.84	4	5	1
16	4.24	4.28	4	5	2
17	4.33	4.00	4	5	2
回答者数	22	26			



受講生の傾向

企業法は基本科目であるから、1年生のうち2名の学生が秋学期に履修することとなったが、それを除く1年生がすべて受講した。受講態度は、ほとんどがまじめに出席し遅刻もなく、熱心に授業に取り組んでいた。授業については、企業法の基本理念などの根幹部分を扱うものであるから、難易度としては高くなく、詳細な知識等を身につけることを目的とはしていないので、比較的理解しやすくまた授業進度も早く感じなかったようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

企業法という授業は、上でも記載したが、企業法の基本理念などの根幹部分を扱うものであるから、特に何のためにそのような法制度があるのかという法制度の趣旨を中心に講義した。その結果として詳細な制度の内容や例外的な取り扱いなどは割愛し、秋学期開講科目である「会社法」などの授業に譲ることとした。また、法学初学者の学生もいることから、企業法の基礎のみならず、その前提となる民法等を含めた法学の基礎についても随時講義の中に取り入れた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

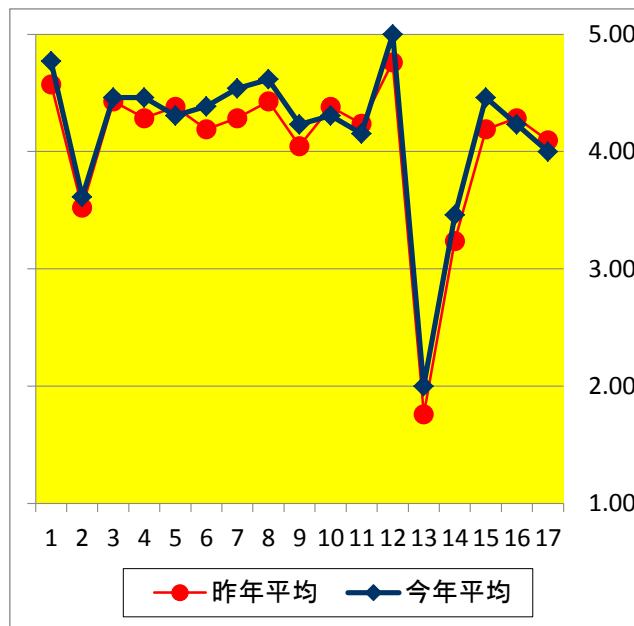
多くの学生に見られることだが、企業法に関する個々の制度については理解できているが、全体として把握できていないように思われる。学生が企業法全体を通して、体系的に理解できるように心がけたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

企業法という科目は、この科目のみで企業法のすべてが完結するという授業ではない。すなわち、企業法は、企業法関係の発展・応用科目(たとえば、会社法、商法、金融商品取引法など)の基礎となる科目であるから、それらの科目を学ぶ上でも前提となる基本的な考え方を身につけることが第一の目的であるから、これについては受講生全員が理解できるよう配慮したい。

科 目	上級簿記(A1)		
配当年次	1	開講時限	春前月2・木3
受講者数	16	回答者数	13

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.57	4.77	5	5	4
2	3.52	3.62	3	5	3
3	4.43	4.46	4	5	4
4	4.29	4.46	4	5	4
5	4.38	4.31	4	5	4
6	4.19	4.38	4	5	4
7	4.29	4.54	5	5	4
8	4.43	4.62	5	5	4
9	4.05	4.23	4	5	3
10	4.38	4.31	4	5	3
11	4.24	4.15	4	5	3
12	4.76	5.00	5	5	5
13	1.76	2.00	1	5	1
14	3.24	3.46	3	5	2
15	4.19	4.46	5	5	3
16	4.29	4.23	4	5	3
17	4.10	4.00	4	5	3
回答者数	22	13			



受講生の傾向

基本問題や定型的なパターンの問題は、よく解けている様子であった。しかし、出題方法を少し工夫すると解けなかったり、財務諸表に科目と金額を適切に区分して計上することができないケースも散見された。なかには、仕訳の意味を考えずに丸覚えするなど、簿記の勉強の仕方の問題がある受講生もいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義中の説明は、テクニカルな解法ではなく、原理・原則に従って考えて解くことを意識してもらうようにした。講義説明と問題演習の時間配分を工夫して、より基本的な事項を優先的に理解してもらうようにした。重要な基本例題は講義中に配布して解いてもらい、その場で個別に質問に応じ、全員の理解を確認して回った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

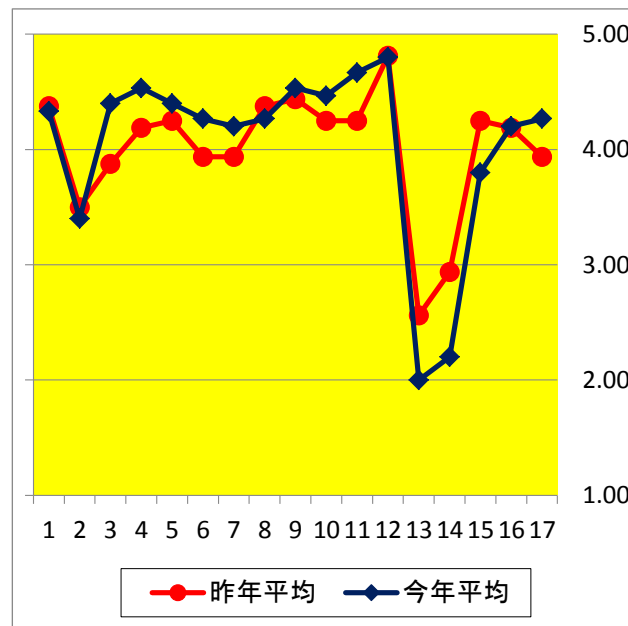
今年度の講義展開は、全体的に良い感触を得たようである。次年度も継続することにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

科 目	上級財務会計論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春後月3・木2
受講者数	15	回答者数	15

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.38	4.33	4・5	5	2
2	3.50	3.40	3	5	3
3	3.88	4.40	5	5	2
4	4.19	4.53	5	5	4
5	4.25	4.40	4	5	4
6	3.94	4.27	5	5	2
7	3.94	4.20	4・5	5	3
8	4.38	4.27	4	5	2
9	4.44	4.53	5	5	3
10	4.25	4.47	4	5	4
11	4.25	4.67	5	5	4
12	4.81	4.80	5	5	3
13	2.56	2.00	2	4	1
14	2.94	2.20	2	4	1
15	4.25	3.80	4	5	1
16	4.19	4.20	4	5	2
17	3.94	4.27	5	5	3
回答者数	16	15			



受講生の傾向

講義時間内での受講態度は概ね真摯であるが、講義時間外での学習は充分ではなさそうである。それは、一部の学生を除いて、予習・復習の時間が短くなっているだけでなく、講義時間内で行う小テストの結果にも表れている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義は、基本的にパワーポイントで資料提示をしつつ行っているが、適宜、ホワイトボードを使用して、追加説明をするようにしている。また、各回の講義内容のポイントを、講義の最後と次回の講義の冒頭で説明し、同時に、次回の講義内容の範囲と注意すべき事項を説明することで、予習・復習に役立つようにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

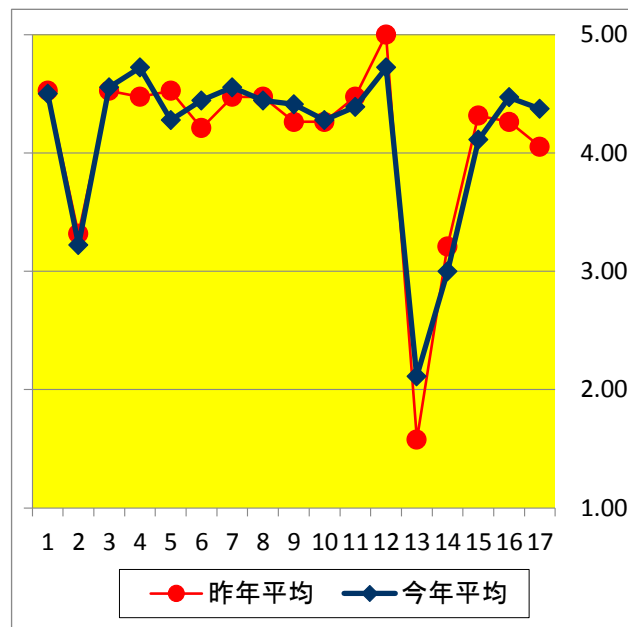
質問No.6「教科書や配付資料の利用」について、質問No.7「ホワイトボード、パソコンの利用」について、昨年度よりポイントが下がっており、講義中のツール使用については、昨年度と同様の方法であるが、秋学期講義での学生の反応を見た上で、さらなる工夫を講じる必要があるかもしれない。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

上記の工夫を講じたためか、昨年度の「教科書や配布資料の利用について」「ホワイトボード、パソコンの利用について」は改善していると思われる。しかし、講義時間外での学習（予習・復習）はポイントが下がっており、再度、受講生が予習・復習を行うような工夫を講じたい。

科 目	上級原価計算論(A1)			
配当年次	1	開講時限	春前月3・木2	
受講者数	20	回答者数	18	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.53	4.50	4・5	5	4
2	3.32	3.22	3	5	3
3	4.53	4.56	5	5	4
4	4.47	4.72	5	5	4
5	4.53	4.28	5	5	2
6	4.21	4.44	5	5	3
7	4.47	4.56	5	5	4
8	4.47	4.44	5	5	3
9	4.26	4.41	5	5	3
10	4.26	4.28	4・5	5	2
11	4.47	4.39	5	5	1
12	5.00	4.72	5	5	2
13	1.58	2.11	1	5	1
14	3.21	3.00	2	5	1
15	4.32	4.11	4	5	3
16	4.26	4.47	4	5	4
17	4.05	4.38	4	5	3
回答者数	19	18			



受講生の傾向

受講生はおおむね熱心であった。また、昨年と同様に、公認会計士論文レベルから2級工業簿記レベルというように、原価計算の基礎的な知識について受講生の間で大きな差が見受けられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

原価計算の基礎的な知識について受講生の間で大きな差が見受けられたため、一つの講義の中で基本的な事項と高度に専門的な事項をまぜて講義を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

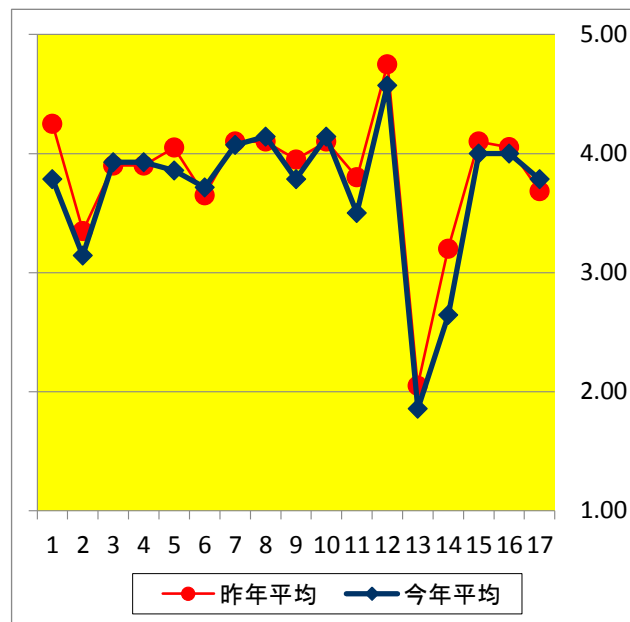
昨年の反省点を踏まえ、学生のニーズに合わせるような形で工夫を行った。その効果は結果に表れていると考えられる。今後もこうした工夫を継続していきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体の傾向は、昨年と同様である。そのため、これまでと同様に、受講生の水準に合わせた方法で講義に取り組んでいきたい。また、科目系を同じくする先生と連絡を密にとっていくことを計画している。

科 目	上級管理会計論(A1)			
配当年次	1	開講時限	春後月2・木3	
受講者数	16	回答者数	14	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.25	3.79	4	5	2
2	3.35	3.14	3	4	2
3	3.90	3.93	4	5	2
4	3.90	3.93	4	5	3
5	4.05	3.86	4	5	1
6	3.65	3.71	4	5	1
7	4.10	4.07	4	5	2
8	4.10	4.14	4	5	3
9	3.95	3.79	3	5	3
10	4.10	4.14	4	5	3
11	3.80	3.50	4	5	2
12	4.75	4.57	5	5	3
13	2.05	1.86	1	4	1
14	3.20	2.64	2	5	1
15	4.10	4.00	4	5	2
16	4.05	4.00	4	5	2
17	3.68	3.79	4	5	2
回答者数	20	14			



受講生の傾向

昨年度よりも受講者は減少している。また、受講者の出席率は比較的高く、講義に対してもまじめな態度で臨んでいたと考えられる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講者層が変化している可能性があるため、説明をできるだけ丁寧に行うように心がけた。また、特に復習を十分に行うことを周知するように心がけた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

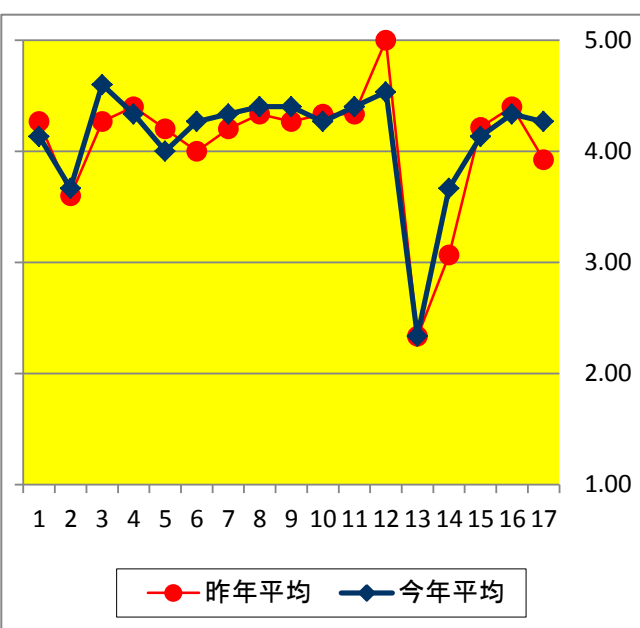
昨年の評価結果と比べて、ほとんどの項目で評価がやや低下しているため、授業内容を改善する必要があると考えている。特に、進度(質問No.2)については昨年よりも適正水準に近づいていることから、受講者層が変化している可能性にも留意する。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義の進度および講義の理解度については向上が見られるが、講義計画に沿った程度、および予習と復習の程度、および講義の満足度の数値が下がっているため、それぞれについて改善を行う必要があると考えている。

科 目	監査制度論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春後火2・金3
受講者数	17	回答者数	15

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.27	4.13	4	5	2
2	3.60	3.67	3	5	3
3	4.27	4.60	5	5	4
4	4.40	4.33	5	5	3
5	4.20	4.00	5	5	2
6	4.00	4.27	5	5	2
7	4.20	4.33	4	5	3
8	4.33	4.40	4・5	5	3
9	4.27	4.40	4	5	4
10	4.33	4.27	4	5	4
11	4.33	4.40	5	5	3
12	5.00	4.53	5	5	3
13	2.33	2.33	1	5	1
14	3.07	3.67	3	5	2
15	4.21	4.13	5	5	1
16	4.40	4.33	4	5	3
17	3.92	4.27	4	5	2
回答者数	15	15			



受講生の傾向

PA/PAIBコースにおける選択必修科目(基本科目)群に属するという関係上、受講生の出席率(項目12)は90%となっており、極めて高い出席率であり勉学に対する意欲が相対的に高まっているようにも解される。

しかし上記アンケート結果より、復習課題に対する対応に伴う授業の復習時間は増えたものの(項目14)、予習時間(項目13)は昨年度と同じである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度に監査基準改訂があったため、改訂箇所に関する重点的な説明を加えたパワーポイントによるスライドを用意し、監査制度に関する重要論点を確実に講義の中で押さえるようにした。スライドの最後には、従来通り受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するための参考文献を列挙した。またこれら配布用の資料は、関西大学インフォメーション・システムに授業当日中にアップロードし、WEB配信を前提とした学生の復習に役立つように配慮した。

授業が2回終了するごとに、前2回分の理解度を確認するためのとともに、復習を動機付けるために小テストを授業時間の最初15分程度で実施し、添削後、返却した。また優秀答案を氏名を伏せて配布するとともに、添削上のポイントを追加し解説を行なった。最終的に、小テスト実施→添削→返却(添削ポイント表・講評)を繰り返すことで、各自にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるように、去年以上に心懸けた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

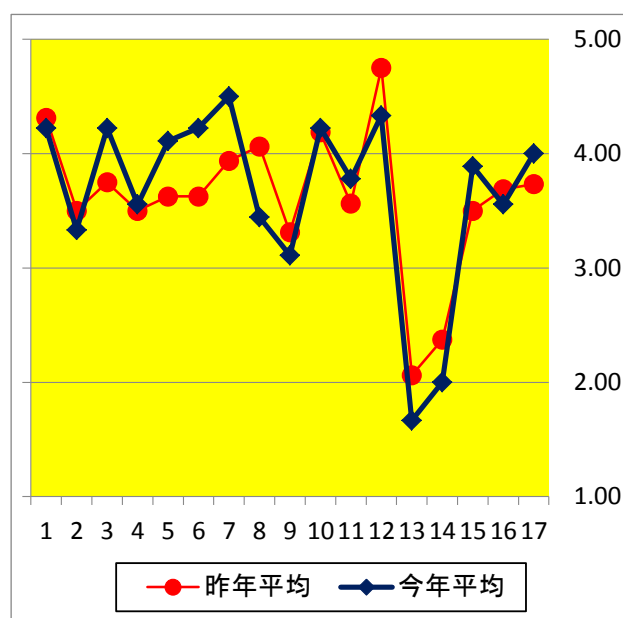
小テストと復習との連携をより強く動機付けるため、講義終了後に必ず復習すべき課題を明示的かつ具体的に示す必要がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回より小テストの添削結果の返却に当たり、成績優秀者の添削済み答案の写しに加えて、添削に際してこちらで用意したポイント表の写しを配布し解説を加えるようにした。この形を次年度も続けることで、学生側での復習課題の作成に流れを与えるようにしたい。

科 目	監査基準(A)			
配当年次	1	開講時限	春水2	
受講者数	11	回答者数	9	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.31	4.22	4	5	3
2	3.50	3.33	3	4	3
3	3.75	4.22	5	5	3
4	3.50	3.56	4	5	2
5	3.63	4.11	4	5	3
6	3.63	4.22	4	5	4
7	3.94	4.50	5	5	3
8	4.06	3.44	3	5	2
9	3.31	3.11	4・5	5	2
10	4.19	4.22	4	5	3
11	3.56	3.78	4	5	3
12	4.75	4.33	5	5	1
13	2.06	1.67	1・2	4	1
14	2.38	2.00	1	5	1
15	3.50	3.89	4	5	2
16	3.69	3.56	4	5	2
17	3.73	4.00	4	5	3
回答者数	16	9			



受講生の傾向

まじめに授業に出席して、授業内容を理解しようと努める者と平気で遅刻してきたり、途中で退席したりする者など受講生の基本的な態度に差が見受けられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

各回で出席の確認と授業内容の理解度を確かめるためのシートを配布して、授業内容の改善を図った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

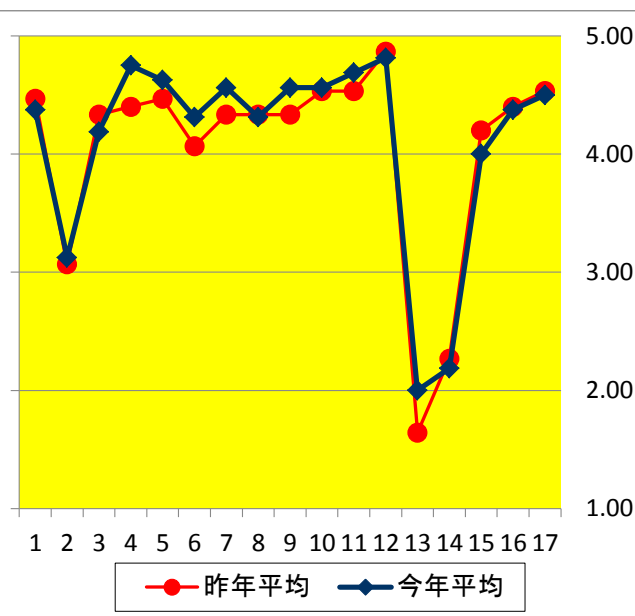
予習・復習の時間が少ないように思うので、予習・復習時間を適切にとり、試験までに十分に自分の知識を整理した上でアウトプットができるように指導する。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

授業の中で大切なところは強調して繰り返し話をするにより、受講生の理解を深めることに努めたい。

科 目	会計専門職業数学			
配当年次	1	開講時限	春土2	
受講者数	17	回答者数	16	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.47	4.38	5	5	3
2	3.07	3.13	3	4	3
3	4.33	4.19	5	5	2
4	4.40	4.75	5	5	4
5	4.47	4.63	5	5	4
6	4.07	4.31	5	5	3
7	4.33	4.56	5	5	4
8	4.33	4.31	5	5	3
9	4.33	4.56	5	5	3
10	4.53	4.56	5	5	4
11	4.53	4.69	5	5	3
12	4.87	4.81	5	5	4
13	1.64	2.00	2	5	1
14	2.27	2.19	2	5	1
15	4.20	4.00	4	5	2
16	4.40	4.38	4	5	3
17	4.53	4.50	4	5	4
回答者数	15	16			



受講生の傾向

今回の受講生の中で、ほとんどこれまで数学に親しんでこなかった学生が多かったので、授業のスタート時には少し苦労した。しかし、初歩的な理解のためにかなり時間を割いたので、終了時にはすべての学生がかなりのレベルに到達した。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

容易に授業について来れる学生と、授業についてくるのが難しい学生が混在したので、最初は非常に苦労したが、何度も小テストを繰り返し、学生の自主的勉強を促した。その結果、最後にはすべての受講生がかなりのレベルに到達したと考えている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

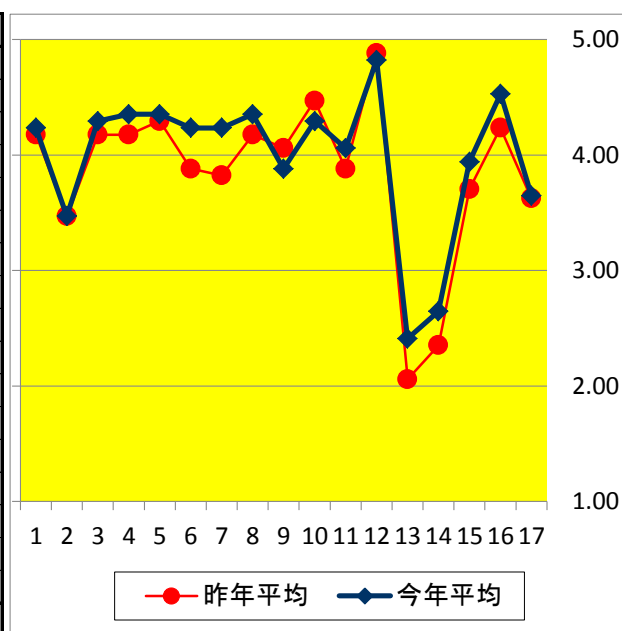
昨年度に行ったように、授業では複雑な数式を省き、わかり易い簡単な数式を用いた授業を今年度も行ったので、最初基礎学力が不足していると感じた受講生も、後半にはかなり学力がレベルアップした。したがって、今後もその方針を維持して行きたいと考えている。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回も難しい数式を省き、簡単な数式を用いて理解しやすいように工夫した。それから、何度も小テストを繰り返し、自主的に努力させたことも成功に繋がっていると考えている。今後も、この方向で授業を進めたいと考えている。

科 目	会計制度論			
配当年次	1	開講時限	春火4	
受講者数	19	回答者数	17	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.18	4.24	4	5	2
2	3.47	3.47	3	5	3
3	4.18	4.29	5	5	3
4	4.18	4.35	5	5	2
5	4.29	4.35	5	5	3
6	3.88	4.24	4	5	3
7	3.82	4.24	4・5	5	3
8	4.18	4.35	5	5	2
9	4.06	3.88	4・5	5	2
10	4.47	4.29	5	5	3
11	3.88	4.06	5	5	2
12	4.88	4.82	5	5	2
13	2.06	2.41	2	5	1
14	2.35	2.65	2	5	1
15	3.71	3.94	5	5	1
16	4.24	4.53	5	5	3
17	3.63	3.65	3	5	1
回答者数	17	17			



受講生の傾向

昨年とほぼ同様の学習状況にあると考えられる。講義の評価も上がっているので、資料を改良するなど昨年からの改善点が通じたように思える。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

記述能力の改善には討論が不可欠なので、授業においても頻繁に質問をし、自由に答させるように工夫している。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

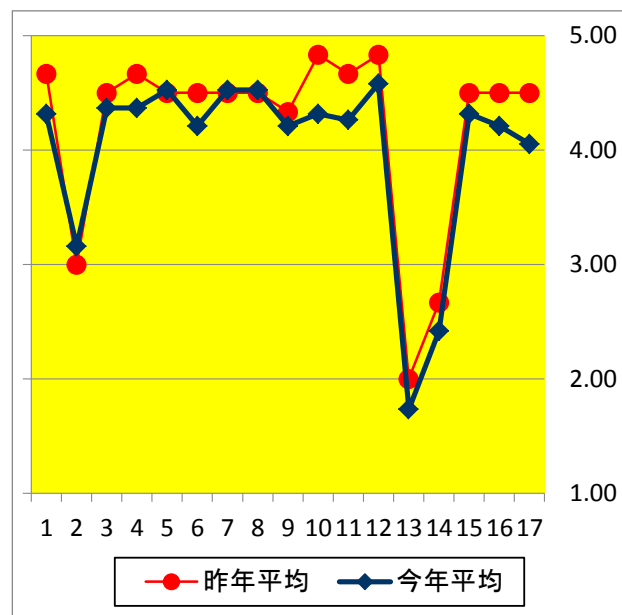
記述試験の結果をみると、もう少し、記述の練習を取り込んだ訓練が必要に思える。次年度はそのような工夫を加えたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

記述能力の改善には討論が不可欠なので、授業においても頻繁に質問をし、自由に答させるように工夫している。これを継続したい。

科 目	租税法会計論			
配当年次	1	開講時限	春木1	
受講者数	22	回答者数	19	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.32	5	5	2
2	3.00	3.16	3	4	3
3	4.50	4.37	5	5	3
4	4.67	4.37	4・5	5	2
5	4.50	4.53	5	5	3
6	4.50	4.21	4	5	1
7	4.50	4.53	5	5	4
8	4.50	4.53	5	5	4
9	4.33	4.21	4	5	3
10	4.83	4.32	4	5	4
11	4.67	4.26	4	5	2
12	4.83	4.58	5	5	1
13	2.00	1.74	1	5	1
14	2.67	2.42	2	5	1
15	4.50	4.32	4	5	2
16	4.50	4.21	4	5	3
17	4.50	4.05	4	5	2
回答者数	6	19			



受講生の傾向

昨年度は6名しか受講していなかったが、今年度は22名が受講した。本講義は木曜1限の開講であったにもかかわらず、出席率は常にほぼ100%であり、受講生の税務会計への強い関心が伺えた。本講義は所得税法会計と消費税法会計から構成されていたため、受講生の多くは初学者であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

小テスト実施の代わりに、講義内で取り扱う過去問を増やし、受講生に税額算出プロセスを目の前で具体的に示すことを意識した。また、受講生への改正税法等の情報提供として、講義時の資料配布に加えて、インフォメーションシステムも利用した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

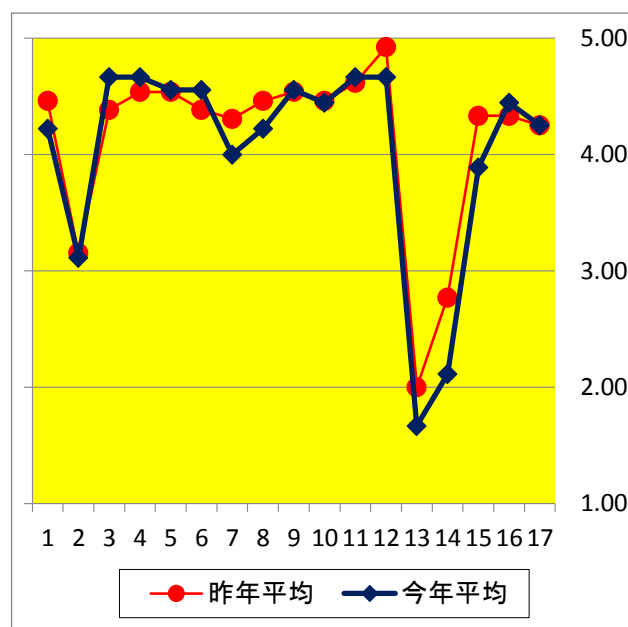
受講生の自宅学習時間をもっと増やす仕組みが必要である。その方法の1つとして、今年度のようにテストを2回実施することに加え、さらに2回、到達度を確認するための小テストを追加実施することを検討したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

過去問を講義内においてできる限り多く扱うためには、租税理論を非常にコンパクトに説明する必要がある。市販のテキストに加えて、講義レジュメや配布資料を組み合わせることによって、講義内における理論と計算の時間配分に留意したい。

科 目	商法			
配当年次	1	開講時限	春金2	
受講者数	15	回答者数	9	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.46	4.22	5	5	2
2	3.15	3.11	3	4	3
3	4.38	4.67	5	5	4
4	4.54	4.67	5	5	4
5	4.54	4.56	5	5	4
6	4.38	4.56	5	5	3
7	4.31	4.00	5	5	2
8	4.46	4.22	5	5	3
9	4.54	4.56	5	5	4
10	4.46	4.44	4	5	4
11	4.62	4.67	5	5	4
12	4.92	4.67	5	5	2
13	2.00	1.67	1	4	1
14	2.77	2.11	2	4	1
15	4.33	3.89	4	5	3
16	4.33	4.44	4	5	4
17	4.25	4.25	4	5	4
回答者数	13	9			



受講生の傾向

商法という科目は、会社法とも異なり特に公認会計士を目指さない学生にとっては、興味が分かれるところであるが、今年度は15人が受講しており、在学者数に比して多かったように思う。受講生の受講態度については、おおむね良好で熱心な学生も多く見られたが、その半面、授業内容・進度についてくるのが難しい学生も見受けられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

商法は、この授業のみで完結させる必要のある授業であって、なおかつ公認会計士試験の短答式試験に確実に出題される範囲とあって、極力バランスよく網羅的な授業となるよう心掛けた。民法の特別法であることから民法についても解説したり(ほとんどの学生が民法を学習したことがない)、どのような取引がなされているかなどのシチュエーションをイメージできるように図や具体例(たとえば最高裁判例の事例など)を示すなどの工夫を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

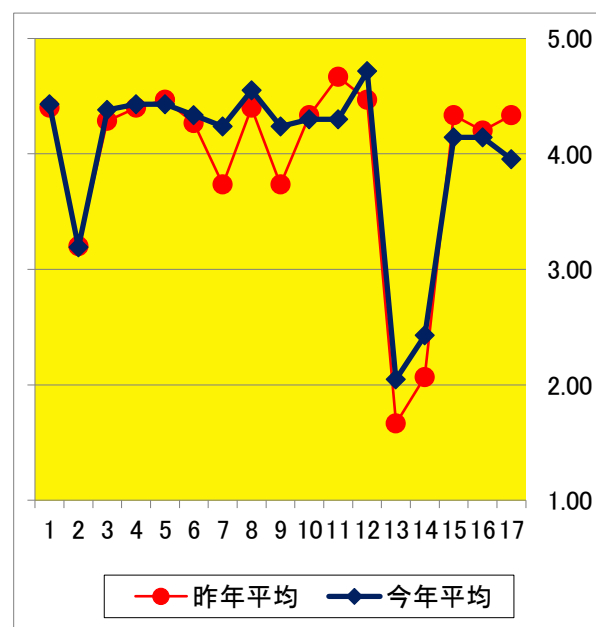
商法という範囲が広く、なおかつ民法の基礎知識を要する科目においては、単に浅く広く網羅的に授業をするということよりも、全体を学習しながらより深い理論も扱い、商法を根本的に理解してもらえるよう心がけたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も今年度と同様にバランスよく網羅的に理解できるように心がけたい。また、より内容をイメージしてもらえるよう、図や具体例を適宜最適・最新なものに入れ替えながら、学生の理解の助けとなるようにしたい。

科 目	インベストメント論			
配当年次	1	開講時限	春水3	
受講者数	22	回答者数	21	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.40	4.43	4・5	5	3
2	3.20	3.19	3	4	3
3	4.29	4.38	4	5	3
4	4.40	4.43	4・5	5	3
5	4.47	4.43	4・5	5	3
6	4.27	4.33	4	5	3
7	3.73	4.24	4	5	3
8	4.40	4.55	5	5	3
9	3.73	4.24	4	5	3
10	4.33	4.30	4	5	2
11	4.67	4.30	4・5	5	3
12	4.47	4.71	5	5	3
13	1.67	2.05	1	5	1
14	2.07	2.43	2	5	1
15	4.33	4.14	4	5	3
16	4.20	4.14	4	5	2
17	4.33	3.95	4	5	2
回答者数	15	21			



受講生の傾向

全体的に、昨年度と似た傾向と感じられた。ただ、アンケート結果をみると、7・9のような技術的な部分での改善がみられるが、17の「理解度」での評価が4を切るところまで下がった。実際に、成績評価のための試験で確認した受講生の知識レベルも、受講生の自己評価と一致していると感じられる。昨年度よりも講義レベルを少し平易にしたつもりだったが、大半の受講生が本科目の勉強に意欲をもっていなかったことは、アンケートの13・14の点数が低いままであること、15の評価が下がったことから明らかである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義レベルを少し下げ、ポイントになる部分の説明を時間的に増やした。また、できるだけ受講生の興味・関心がみられる時事的題材を講義に取り入れるよう、気を配ったつもりである。しかし、受講生の多くは、基礎理論の勉強を避けるために、たまたま知っている程度の時事的題材に興味を示しただけで、受講生の理解度を高める効果は期待できなかった。興味を引き出すだけにとどまったとはいえ、受講生とのコミュニケーションには配慮したつもりである。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

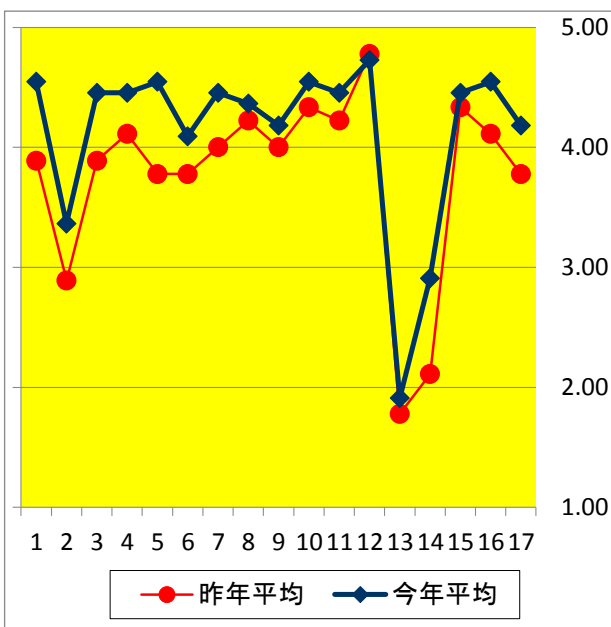
受講生が10名を超えたときでも、受講生に積極的な質問や議論をさせる方法を工夫することが必要だと痛感した。とはいえ、今年度も、受講生から題材のリクエストをもらって解説したうえで議論をさせたのに、低調な議論しかできなかった。次年度は、受講生のモチベーションを高めることにもっと配慮するようにしたい。講義計画については、議論が低調なままなら、時事的な題材での議論の回数を減らすべきかもしれないが、この点はできるだけ変更せずに、積極的な議論を引き出せるように、受講生とのコミュニケーションに留意する方向での改善を目指したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

設定している到達目標のレベルは、会計専門職大学院でのファイナンス系の基礎科目としては、できればこれより下げたくない水準である。しかし、ついてこれない受講生が多数派になっており、他方で、解説をさらに平易にしても効果はないと感じる。問題は、基礎理論の理解が不十分な受講生がほとんど復習をしないことで、これに対処するには、事前に「成績評価を厳しくする」と宣言して、受講生に必要な復習をせよと考える。ただ、この点は講義運用の中での工夫になるので、実際に受講生を相手にしたときに、検討することにした。

科 目	企業分析論			
配当年次	2	開講時限	春木2	
受講者数	13	回答者数	11	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	3.89	4.55	5	5	4
2	2.89	3.36	3	4	3
3	3.89	4.45	4	5	4
4	4.11	4.45	5	5	3
5	3.78	4.55	5	5	4
6	3.78	4.09	4	5	3
7	4.00	4.45	4	5	4
8	4.22	4.36	5	5	2
9	4.00	4.18	5	5	2
10	4.33	4.55	5	5	4
11	4.22	4.45	4	5	4
12	4.78	4.73	5	5	4
13	1.78	1.91	1	4	1
14	2.11	2.91	4	5	1
15	4.33	4.45	5	5	3
16	4.11	4.55	5	5	3
17	3.78	4.18	5	5	2
回答者数	9	11			



受講生の傾向

回答者数は平年よりやや増えた程度である。受講生は比較的まじめに出席しており、高い集中をもって講義に臨んだと考えられる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は、授業速度が若干ではあるものの遅いという評価であったため、今年度の授業では、追加的な説明をおこなうなど、授業の内容を若干増加させた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

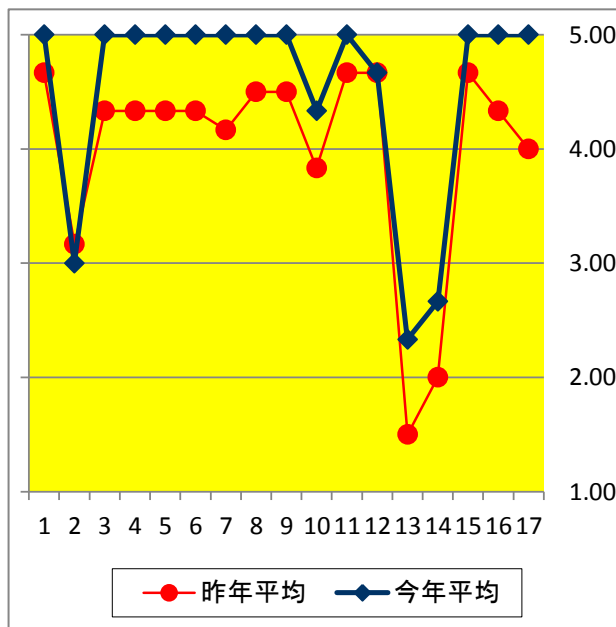
講義の全体的な満足度(質問No.11)および授業の全体的な理解度(質問No.17)をはじめ、複数の項目に対する評価が上昇している一方で、資料の使い方(質問No.1)の評点が低下している。資料については特に大幅な変更は行っていないが、評点が低下した以上は改善の可能性を検討する必要があると考えられる。また、授業進度がやや遅めという評価になっているが、この点は全体的な満足度および理解度との関係を考えて、講義内容の増加を慎重に検討する。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回の講義では、授業速度が速くなったという評価を除けば、多くの項目において前年度よりも高い評価結果となった。そのため、今回の講義内容について、細かな改善は必要と考えられるが、全体的にはこの内容で継続するつもりである。

科 目	政府・自治体会計論			
配当年次	2	開講時限	春火2	
受講者数	3	回答者数	3	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	5.00	5	5	5
2	3.17	3.00	3	3	3
3	4.33	5.00	5	5	5
4	4.33	5.00	5	5	5
5	4.33	5.00	5	5	5
6	4.33	5.00	5	5	5
7	4.17	5.00	5	5	5
8	4.50	5.00	5	5	5
9	4.50	5.00	5	5	5
10	3.83	4.33	5	5	3
11	4.67	5.00	5	5	5
12	4.67	4.67	5	5	4
13	1.50	2.33	3	3	1
14	2.00	2.67	3	3	2
15	4.67	5.00	5	5	5
16	4.33	5.00	5	5	5
17	4.00	5.00	5	5	5
回答者数	6	3			



受講生の傾向

受講生は3名であったが、授業内容に真剣に取り組む姿勢が感じられた。質問等も活発に行っていた。また毎回、次のための課題を割り当てたが、これについても前向きに取り組んでいた(その結果、No13, 14の率が上がったものと思われる)。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生の人数は減少しているが、講義内容に真摯に取り組む姿勢が見られたため、講義内容も深掘りすることができた。毎回課題を与えて受講生が自ら調べることでさらに理解度を深める工夫、授業中も双方向の議論を通じてさらに理解を深めさせる工夫を行う等、一層受講生の満足度が上がるよう努力を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

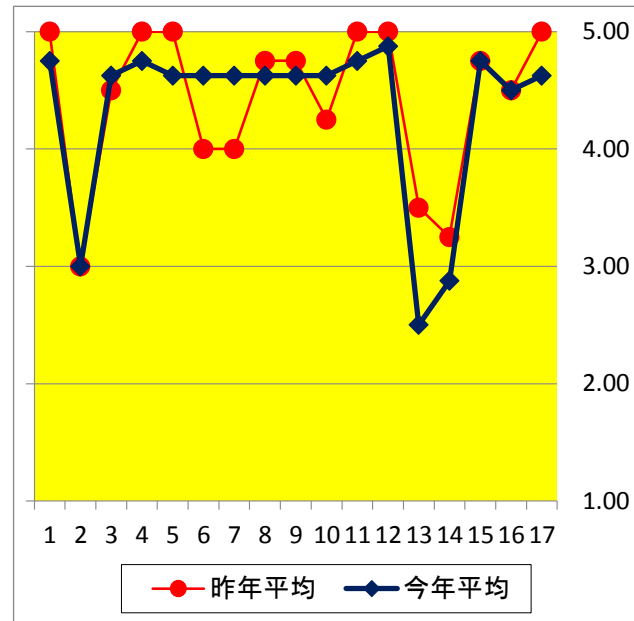
受講者の受講態度、アンケート結果から、概ね内容には満足していると思われる。内容については、引き続きブラッシュアップしていきたい。また、予復習の時間が少ないのは、ある程度やむを得ないと思われるが、適宜、自治体会計に関する新聞記事等を調査する等の課題を設けていきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生が減少する傾向にあるが、引き続き公会計分野への興味を増進させるよう、タイムリーな話題等を提供し前向きに授業に取り組むよう工夫を重ねていきたい。

科 目	上級会社法			
配当年次	2	開講時限	春火4	
受講者数	8	回答者数	8	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.75	5	5	4
2	3.00	3.00	3	4	3
3	4.50	4.63	5	5	4
4	5.00	4.75	5	5	4
5	5.00	4.63	5	5	4
6	4.00	4.63	5	5	4
7	4.00	4.63	5	5	4
8	4.75	4.63	5	5	4
9	4.75	4.63	5	5	4
10	4.25	4.63	5	5	4
11	5.00	4.75	5	5	4
12	5.00	4.88	5	5	4
13	3.50	2.50	3	4	1
14	3.25	2.88	2・3	4	2
15	4.75	4.75	5	5	4
16	4.50	4.50	4・5	5	4
17	5.00	4.63	5	5	4
回答者数	4	8			



受講生の傾向

上級会社法という科目の性質上、会社法については一通り全体的な理解を済ませた学生が受講していた。その中にも学生間に若干のレベル差はあったように思う。ただ、学生の受講態度は総じて熱心で、積極性がみられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度の授業においても、昨年度と同様に、レクチャーと対話、文章作成の3つをバランスよく行うように心掛けた。また、対話においては、昨年度以上に、論理的に述べられるよう、理論構成や全体の流れをふまえて、話すことができる能力を身につけてもらうことを目標とした。また、それをふまえた文章作成もまた、理論構成等に注意を払って行うよう配慮し、その前提となるレクチャーも単なる知識の提供となるのではなく、その体系や理論の組み立てなどを重視するよう心掛けた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

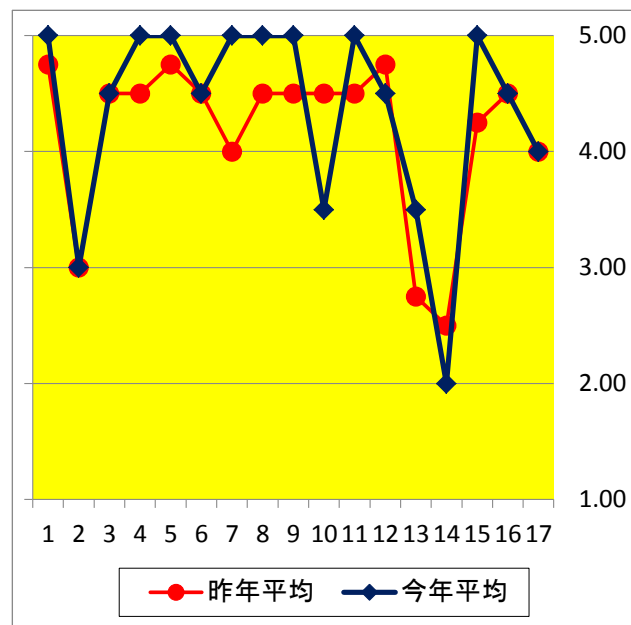
受講生の人数にもよるが、少人数であれば個人個人に応じた授業をしたい。そのためにもレクチャーよりも対話重視の授業にシフトし、一人ひとりの学生の苦手部分や欠点を認識し改めさせ、長所を生かすような授業にしていきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生には、上級会社法という法学の特性から、論理的な思考能力や理論の組み立てなどをしっかりと身につけてもらいたいと思う。そこで、特に、対話や文章作成における説得力のある論理的な説明などが行えるよう、授業の中では配慮したい。特に上記能力は個人によってもかなりばらつきがみられるものなので、一人一人を丁寧に指導していくつもりである。

科 目	租税法理論			
配当年次	2	開講時限	春月4	
受講者数	3	回答者数	2	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.75	5.00	5	5	5
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.50	4.50	4・5	5	4
4	4.50	5.00	5	5	5
5	4.75	5.00	5	5	5
6	4.50	4.50	4・5	5	4
7	4.00	5.00	5	5	5
8	4.50	5.00	5	5	5
9	4.50	5.00	5	5	5
10	4.50	3.50	3・4	4	3
11	4.50	5.00	5	5	5
12	4.75	4.50	4・5	5	4
13	2.75	3.50	3・4	4	3
14	2.50	2.00	1・3	3	1
15	4.25	5.00	5	5	5
16	4.50	4.50	4・5	5	4
17	4.00	4.00	4	4	4
回答者数	4	2			



受講生の傾向

受講生は2名で、一人は会計士試験、もう一人は公務員試験を目指す院生であった。しかし、両名とも法人税法も併せて受講しており、両名は租税法の領域に強い関心を持っていた。それは、予習時間(質問No.13)の結果が昨年度よりも良好であることにも表れている。また、講義時においても、両名は積極的に発言を行い、租税法理論の習得に努めていた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生が2名だったため、講義スタイルをゼミ形式に近い形で行い、質疑応答の時間を増やすことに留意した。その分だけ取り上げる租税判例を増やすことはできなかったが、期末テスト以外に小テスト(但し、租税法総論のみ)を実施することができた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

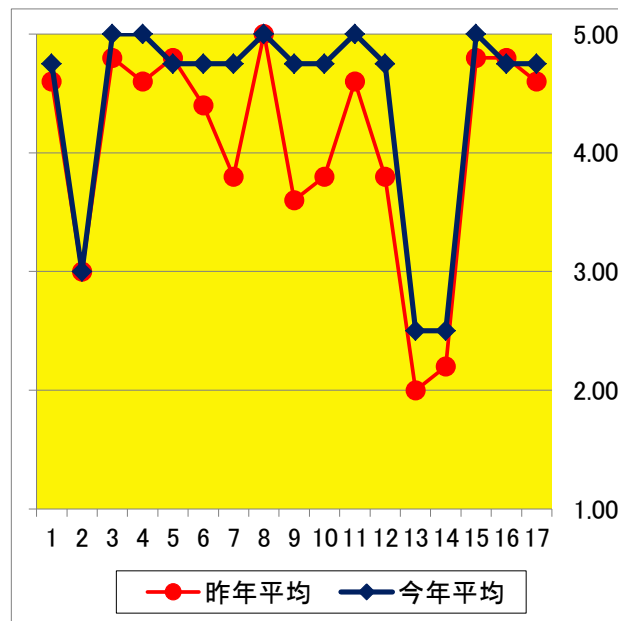
受講生の予習時間を増やすため、取り上げる租税判例の数を増やしてレポートを提出させることにする。また、本講義の内容は大きく、租税法総論、所得税法、消費税法から構成されているので、期末テスト以外に租税法総論と所得税法のパートが終了した段階で、到達度を確認するための小テストを実施する。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

租税訴訟の増加により、講義で取り上げるべき租税判例はどうしても増えていかざるを得ないため、受講生の予習は欠かせない。そこで、課題レポートとして要約すべき租税判例の数を増やす。なお、受講生の負担軽減のため、要約すべき租税判例において要求される条文の内容については、事前に情報提供を行う。また、小テストについては、租税法総論だけでなく、所得税法も行うようにし、受講生の学習インセンティブの向上を図りたい。

科 目	資本市場論		
配当年次	2	開講時限	春水1
受講者数	5	回答者数	4

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.60	4.75	5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.80	5.00	5	5	5
4	4.60	5.00	5	5	5
5	4.80	4.75	5	5	4
6	4.40	4.75	5	5	4
7	3.80	4.75	5	5	4
8	5.00	5.00	5	5	5
9	3.60	4.75	5	5	4
10	3.80	4.75	5	5	4
11	4.60	5.00	5	5	5
12	3.80	4.75	5	5	4
13	2.00	2.50	2・3	3	2
14	2.20	2.50	2・3	3	2
15	4.80	5.00	5	5	5
16	4.80	4.75	5	5	4
17	4.60	4.75	5	5	4
回答者数	5	4			



受講生の傾向

全体にアンケート結果が改善し、高い評価が得られた。これは、単純に、受講生の基礎知識と学習意欲のレベルが昨年度より全体的に高かったからである。講義中での討論にも積極的であり、アンケートの15番の「さらなる学習意欲を触発できたか」に対して、全員が「5」の評価をしてくれた点からも、受講者の学習意欲が高いまま維持されたことがわかる。今年度の受講生に感謝したい。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度のこの書類の中で「今年度の評価を維持することを目標としたいので、講義計画などはあまり変更しないつもりである」と述べた通りにして、結果として望む以上の手応えがあったので、方針は変更しなかった。他方で、「積極的に自分の頭で考えて発言したり、質問したりする受講生の比率をもっと高めたいので、講義中に、受講生に考えさせる時間を意図的に増やしたいと思う」とも述べたように、受講生との議論を増やした。これは受講生の手応えがあったからである。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

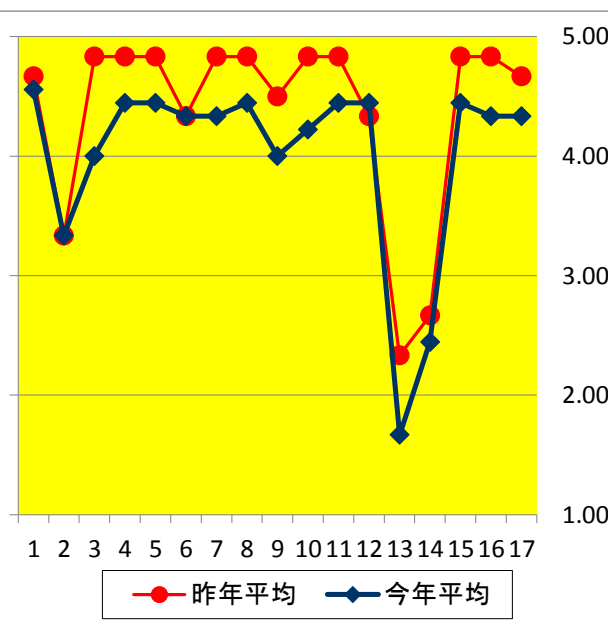
本講義については、全体的に今年度の評価を維持することを目標としたいので、講義計画などはあまり変更しないつもりである。ただし、これ以上を望むのは難しいと承知のうえで、積極的に自分の頭で考えて発言したり、質問したりする受講生の比率をもっと高めたいので、講義中に、受講生に考えさせる時間を意図的に増やしたいと思う。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度と同様、全体的に今年度の評価を維持することを目標としたいので、講義計画などはあまり変更しないつもりである。また、今年度と同程度には、受講生に、積極的に自分の頭で考えて発言したり、質問したりしてほしいので、実際に受講生の様子をみとうえで、講義中に受講生に考えさせる時間を今年度並みに維持できればと思う。

科 目	マクロ経済学			
配当年次	2	開講時限	春土4	
受講者数	11	回答者数	9	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.56	5	5	4
2	3.33	3.33	3	5	3
3	4.83	4.00	4	5	3
4	4.83	4.44	5	5	3
5	4.83	4.44	5	5	3
6	4.33	4.33	4	5	3
7	4.83	4.33	4	5	3
8	4.83	4.44	5	5	3
9	4.50	4.00	3	5	3
10	4.83	4.22	5	5	3
11	4.83	4.44	5	5	3
12	4.33	4.44	5	5	3
13	2.33	1.67	1	3	1
14	2.67	2.44	2	3	2
15	4.83	4.44	5	5	3
16	4.83	4.33	4	5	3
17	4.67	4.33	4	5	3
回答者数	6	9			



受講生の傾向

本授業の受講生は、一応基本的な経済学の基礎知識を理解してきているので、ある程度のレベルの講義内容からスタートができた。その結果、時事的問題やレベルの高い応用問題にも取り組むことができた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回は基礎的な知識とさらに応用問題のあとで、受講生が関心を持つ時事的な日本、世界経済の例を取り上げて講義した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

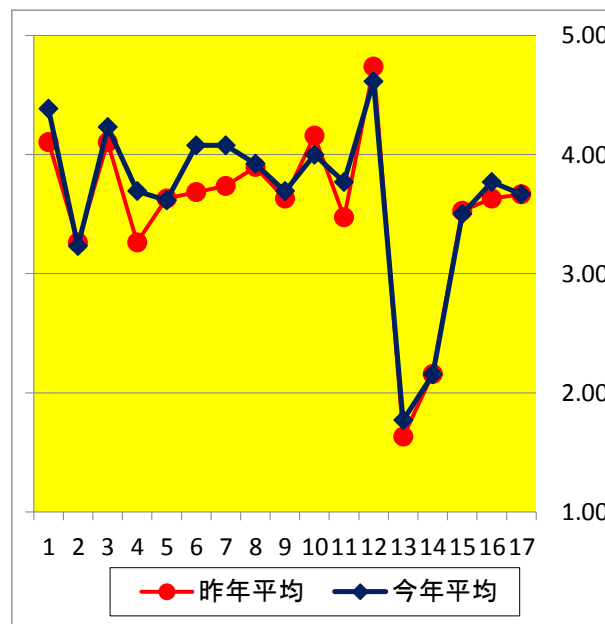
昨年度同様、今年度も日本経済、世界経済の動向と、マクロ経済学の理論を関連付けて講義して、受講生には非常に好評であったので、今後もこの方針を維持していく方針である。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

経済理論を理解したあとで、時事的な日本経済、世界経済の例、例えば為替レートの変化が实体经济に与える影響などを取り上げて講義したが、好評であったので、次回もこの方針で講義を行う予定である。

科 目	会計事例研究			
配当年次	1	開講時限	春水1	
受講者数	14	回答者数	13	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.11	4.38	4	5	4
2	3.26	3.23	3	4	3
3	4.11	4.23	4	5	4
4	3.26	3.69	4	5	2
5	3.63	3.62	4	5	1
6	3.68	4.08	4	5	2
7	3.74	4.08	4・5	5	2
8	3.89	3.92	4	5	2
9	3.63	3.69	4	5	2
10	4.16	4.00	4	5	2
11	3.47	3.77	4	5	2
12	4.74	4.62	5	5	2
13	1.63	1.77	2	4	1
14	2.16	2.15	1	5	1
15	3.53	3.50	4	4	2
16	3.63	3.77	4	4	3
17	3.67	3.67	4	4	2
回答者数	19	13			



受講生の傾向

授業内容を理解しようと努めている受講生が多かったように思う。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

毎回、出席確認と受講生の理解度を確認するためのシートを配布、記入してもらった。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

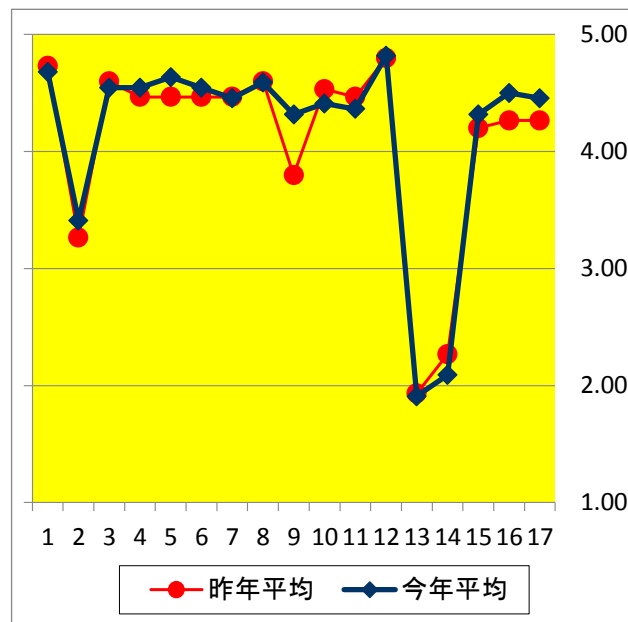
レポートを2回課したが、1回にしたほうがよかったか、試験は条文集があったほうがよかったか、再度検討してみたいと思う。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

試験は条文集を配布したが、想像より出来がかんばしくなかった。出題の意図を試験前に十分に説明するべきだったかもしれない。

科 目	会社経理実務			
配当年次	1	開講時限	春火3	
受講者数	22	回答者数	22	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.73	4.68	5	5	4
2	3.27	3.41	3	5	3
3	4.60	4.55	5	5	3
4	4.47	4.55	5	5	3
5	4.47	4.64	5	5	3
6	4.47	4.55	5	5	2
7	4.47	4.45	5	5	2
8	4.60	4.59	5	5	4
9	3.80	4.32	5	5	3
10	4.53	4.41	5	5	3
11	4.47	4.36	5	5	2
12	4.80	4.82	5	5	3
13	1.93	1.91	2	5	1
14	2.27	2.09	2	5	1
15	4.20	4.32	5	5	2
16	4.27	4.50	5	5	3
17	4.27	4.45	5	5	3
回答者数	15	22			



受講生の傾向

受講生22名中、出席回数は15回14、14回5、13回・12回・11回各1名と良好であった。しかし、受講者が昨年(15名)に比べ増加した影響があったとはいえ、質問回数は1名当たり平均2～3回と低調であり、研究室で懇談の機会を設定したにもかかわらず利用する学生がほとんどいなかったことなど、受講生全般に積極性が欠けるように感じられた。また、レポート作成のために昨年から実施した事前テーマ発表は効果があったと思うが、全体として一昨年より昨年、今年と肝心のレポートの質が低下していることも気になる点であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講者の理解度や問題意識の向上のために、授業のパワーポイント枚数削減によって受講生と双方向の対話時間を増やすように努めた。受講生の質問が低調であった点は気になったが、アンケートの結果(質問15～17)を見る限りでは一定の効果があったように思われる。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

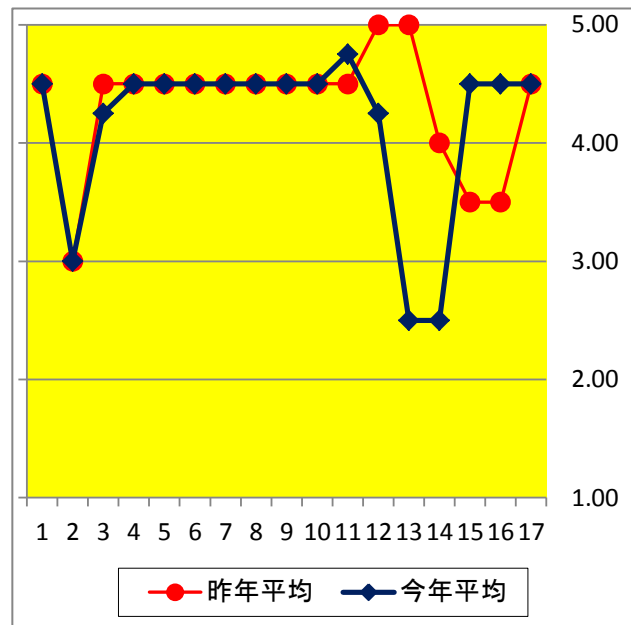
基本は、今年度と同じ方針で進めるが、受講者の理解度や問題意識の向上のために、特に授業における受講者の自発的な質問を喚起し、質問内容の質を高める努力をしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講者全般に積極性が欠け、レポートの質が低下していることについて対策を執りたい。例えば毎回の授業で全員に発言させる方式や、レポートにかかる事前テーマ発表(授業の第14・15回)の充実等を検討したい。

科 目	ディスクロージャー実務			
配当年次	2	開講時限	春木2	
受講者数	4	回答者数	4	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.50	4・5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.50	4.25	4	5	4
4	4.50	4.50	4・5	5	4
5	4.50	4.50	4・5	5	4
6	4.50	4.50	4・5	5	4
7	4.50	4.50	4・5	5	4
8	4.50	4.50	4・5	5	4
9	4.50	4.50	4・5	5	4
10	4.50	4.50	4・5	5	4
11	4.50	4.75	5	5	4
12	5.00	4.25	5	5	3
13	5.00	2.50	2・3	3	2
14	4.00	2.50	2・3	3	2
15	3.50	4.50	4・5	5	4
16	3.50	4.50	4・5	5	4
17	4.50	4.50	4・5	5	4
回答者数	2	4			



受講生の傾向

公認会計士受験生等のレベルの高い学生と、知識量は大したことがないが、的確なディスカッションを行う学生、中国からの留学生等バラエティに富んだメンバーであった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

ディスクロージャーは会計だけの問題ではないことを、医療関係のディスクロージャーを中心に講義するとともに、会計上のディスクロージャーの異同について、基本的な考え方を議論させる等、考える授業を行った。さらに、統合報告について深く突っ込んだ議論を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

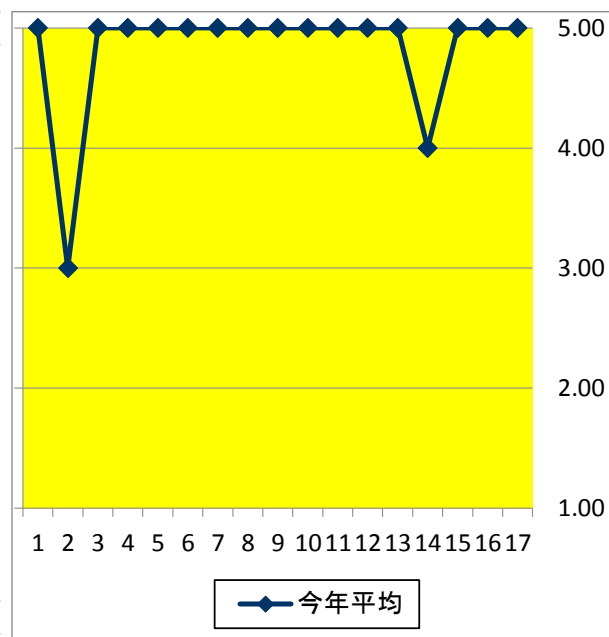
今回の方針（ディスクロージャーは会計だけの問題ではないこと、会計上のディスクロージャーの異同について、基本的な考え方を議論させる等、考える授業）で来年も行いたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回の方針を維持するとともに、統合報告についてより深く突っ込んだ授業とディスカッションを行う

科 目	ソリューション・イン・プロフェッショナル(宮本クラス)		
配当年次	2	開講時限	春土5
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	5	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	4.00	4	5	4
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1			



受講生の傾向

今年度の受講生は1名であったが、非常に熱心な学生で、良く勉強した。その結果、本人が目標とした職業の試験に合格した。このように明白な目標を持った学生は指導に熱が入り、勉強が進むので、今後は明確な目標を持った学生を育てることが、大切である。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度のプロフェッショナル・ソリューションの授業アンケートでは、まず基本をしっかりと勉強して、それから応用問題に対応し、さらに公認会計士、国税官、公務員などの資格試験の問題に取り組んだことが好評であったので、今年もその方向で本事業を指導した。特に、今年度は多くの資格試験の問題に時間を割いたのが、結果的に良かったと考えている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

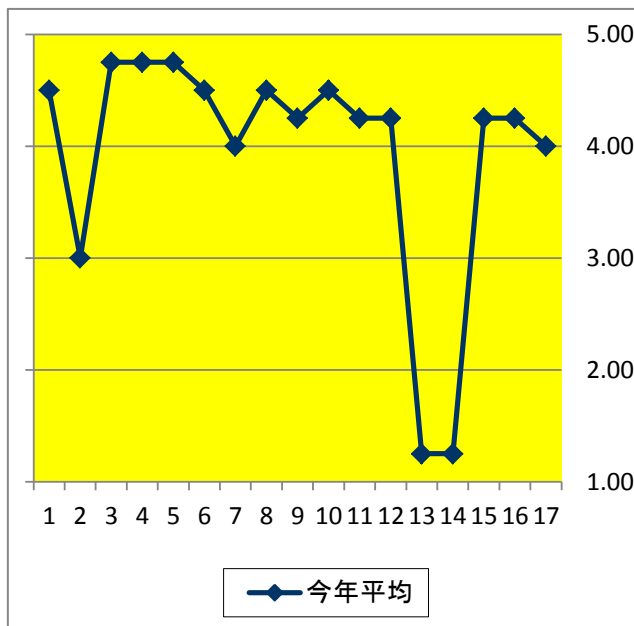
該当なし(今年度新設科目)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度の授業は結果的に成功であったと思っているので、本年度の方針を来年度も踏襲したいと考えている。つまり、まずは基礎をしっかりと勉強し、それから応用問題、資格試験の問題に取り組み、どのような問題でも解けるように対応したいと考えている。

科 目	ソリューション・イン・プロフェッショナル(大西クラス)			
配当年次	2	開講時限	春木5	
受講者数	4	回答者数	4	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.50	4・5	5	4
2	—	3.00	3	3	3
3	—	4.75	5	5	4
4	—	4.75	5	5	4
5	—	4.75	5	5	4
6	—	4.50	4・5	5	4
7	—	4.00	4	5	3
8	—	4.50	4・5	5	4
9	—	4.25	5	5	3
10	—	4.50	4・5	5	4
11	—	4.25	4	5	4
12	—	4.25	4	5	4
13	—	1.25	1	2	1
14	—	1.25	1	2	1
15	—	4.25	4	5	4
16	—	4.25	4	5	4
17	—	4.00	4	5	3
回答者数	—	4			



受講生の傾向

本年度より開講された項目であるため、前年度との比較はできない状況である。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

本年度から開講された講義であるが、管理会計の領域に関連する研究動向や理論的問題の検討、および課題の探索に向けての演習を行った。また、少人数による演習形式であるため、受講生の個別的な状況に対して対応するよう留意した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

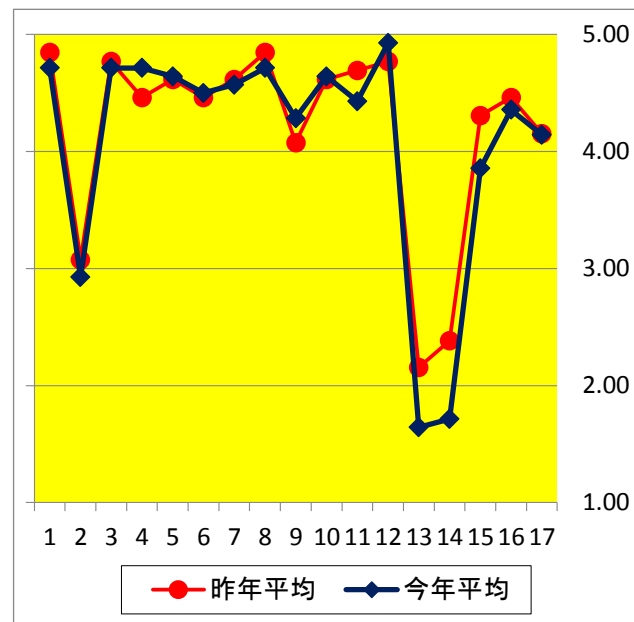
該当なし(今年度新設科目)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

新設科目のため前年度との比較はできないが、評価結果自体は比較的良いものであったと考えられる。そのため、以後も今年度のような評価を獲得できるように、継続して努力することが必要であると考えている。

科 目	特殊講義(ERPと会計)		
配当年次	1	開講時限	春月4
受講者数	14	回答者数	14

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.85	4.71	5	5	4
2	3.08	2.93	3	4	2
3	4.77	4.71	5	5	3
4	4.46	4.71	5	5	4
5	4.62	4.64	5	5	3
6	4.46	4.50	5	5	3
7	4.62	4.57	5	5	3
8	4.85	4.71	5	5	3
9	4.08	4.29	5	5	3
10	4.62	4.64	5	5	4
11	4.69	4.43	5	5	2
12	4.77	4.93	5	5	4
13	2.15	1.64	2	4	1
14	2.38	1.71	2	4	1
15	4.31	3.86	5	5	2
16	4.46	4.36	4	5	3
17	4.15	4.14	5	5	2
回答者数	13	14			



受講生の傾向

受講者14名中、出席回数は15回6、14回6、13回2と良好で、質問回数も平均1名当たり4回とまずまずであった。昨年と同様に授業の当初は理解度に個人差があったように思うが、回を重ねるにつれボトムアップが進み、後半の質問内容や最終のレポートから、ほぼ全員が一定水準の理解に達したと判断できる。ただ、アンケートの結果を見る限りでは、今後の学習意欲(質問15)や理解度(質問17)が私の期待値(目標)を下回っている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講者の理解度と問題意識向上のために、授業のパワーポイント枚数削減によって受講生と双方向の対話時間を増やすように努めた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

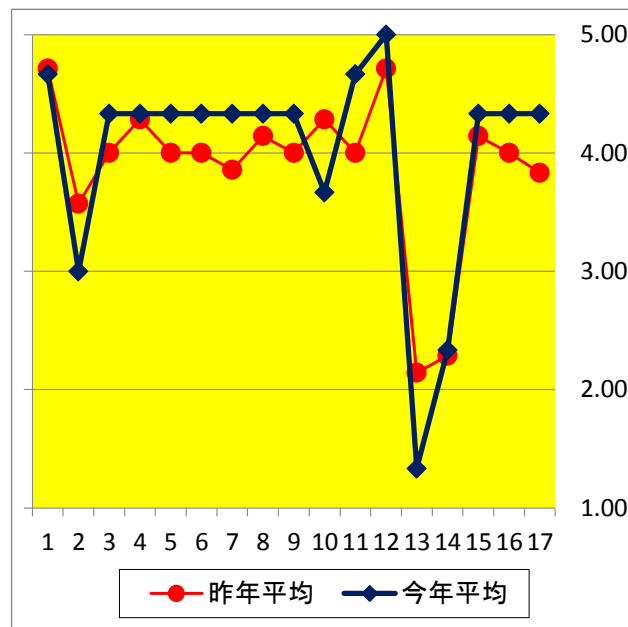
基本は、今年度と同じ方針で進めるが、授業における受講者の自発的な質問喚起、質疑応答による理解度の向上に努めたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講者の今後の学習意欲や理解度について対策を執りたい。例えば、授業でERPを学ぶことの必要性和重要性について実感を持ってもらえるような事例等を検討したい。

科 目	会計戦略論			
配当年次	2	開講時限	春火4	
受講者数	3	回答者数	3	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.71	4.67	5	5	4
2	3.57	3.00	3	4	3
3	4.00	4.33	4	5	4
4	4.29	4.33	4	5	4
5	4.00	4.33	4	5	4
6	4.00	4.33	4	5	4
7	3.86	4.33	4	5	4
8	4.14	4.33	4	5	4
9	4.00	4.33	4	5	4
10	4.29	3.67	3	5	3
11	4.00	4.67	5	5	4
12	4.71	5.00	5	5	5
13	2.14	1.33	1	4	1
14	2.29	2.33	2	4	2
15	4.14	4.33	4	5	4
16	4.00	4.33	4	5	4
17	3.83	4.33	4	5	4
回答者数	7	3			



受講生の傾向

受講生数が少ないためか、適度な緊張感をもって、受講していたと思われる。ただ、予備知識に受講生の間に差がある感じがあり、消極的な反応がごくまれに見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年と同様に、講義のポイントをレジュメとして配布し、パワーポイントの進行に合わせて、内容を確認できるようにした。また、受講生に対し、頻回に簡単な質問を与え、理解を深めやすいようにした。さらに、講義最後には、その回の講義内容のポイントを要約し、同時に、次回のポイントを説明することで、講義全体の流れを理解しやすいようにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

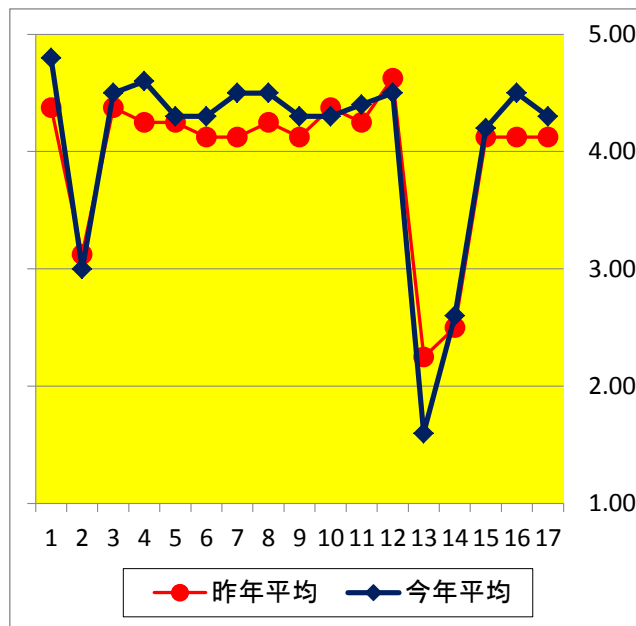
小教室であったため、パワーポイントが見づらい状態にあり、教室配置の要望をする。質問No.5「教員の話し方・声の大きさ・説明の仕方」が昨年度より評価が下がっており、より企業行動がイメージしやすいような例を増やすなどの工夫を講じたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生の反応を引き出すような工夫を講じているが、それを上回って、学生が質問やディスカッションができるような工夫を講じていきたい。

科 目	資産会計論			
配当年次	2	開講時限	春金3	
受講者数	10	回答者数	10	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.38	4.80	5	5	4
2	3.13	3.00	3	4	3
3	4.38	4.50	4・5	5	4
4	4.25	4.60	5	5	4
5	4.25	4.30	4	5	3
6	4.13	4.30	4	5	3
7	4.13	4.50	4・5	5	4
8	4.25	4.50	4・5	5	4
9	4.13	4.30	5	5	2
10	4.38	4.30	4	5	4
11	4.25	4.40	4	5	4
12	4.63	4.50	5	5	3
13	2.25	1.60	1	4	1
14	2.50	2.60	3	4	1
15	4.13	4.20	4・5	5	3
16	4.13	4.50	5	5	3
17	4.13	4.30	4	5	3
回答者数	8	10			



受講生の傾向

講義中は別の作業をすることなく、講義の内容に集中している様子であった。発言を促したときの反応もよく、全体的に講義しやすい雰囲気であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

現行制度上の取扱いだけでなく、発展的な論点も取り上げた。市販のテキストではなく会計基準等の原文を教科書として使用し、「原文を読んで理解する」「原文の表現を学びとる」というスタンスで講義を展開した。また、機会があれば受講生に発言を促し、場合によってはディスカッションを行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

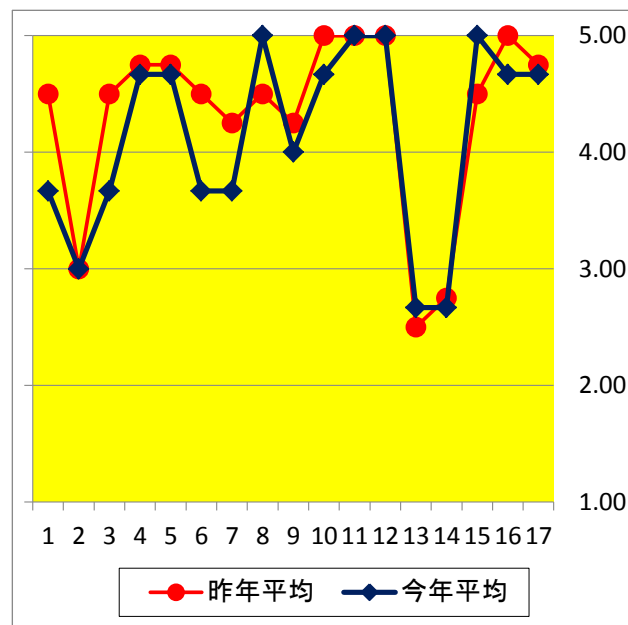
今年度の講義展開は、全体的に良い感触を得たようである。次年度も継続することにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

科 目	負債・資本金論			
配当年次	2	開講時限	春水3	
受講者数	3	回答者数	3	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	3.67	2・4・5	5	2
2	3.00	3.00	3	4	3
3	4.50	3.67	3	5	3
4	4.75	4.67	5	5	4
5	4.75	4.67	5	5	4
6	4.50	3.67	3	5	3
7	4.25	3.67	2・4・5	5	2
8	4.50	5.00	5	5	5
9	4.25	4.00	3・4・5	5	3
10	5.00	4.67	5	5	4
11	5.00	5.00	5	5	5
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.50	2.67	1・3・4	4	1
14	2.75	2.67	1・2・5	5	1
15	4.50	5.00	5	5	5
16	5.00	4.67	5	5	4
17	4.75	4.67	5	5	4
回答者数	4	3			



受講生の傾向

昨年の受講生4名が非常に積極的なものに対して、今年度の3名はやや消極的であった。人数が少ないので、学生の意欲を高める方法がそのつど変わる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年の授業方法(徹底的な質疑方式)が好評だったので、ほぼそれを踏襲したが、今年度の学生にはうまくヒットしなかったように思われる。それが、評価点緒下落に反映されている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

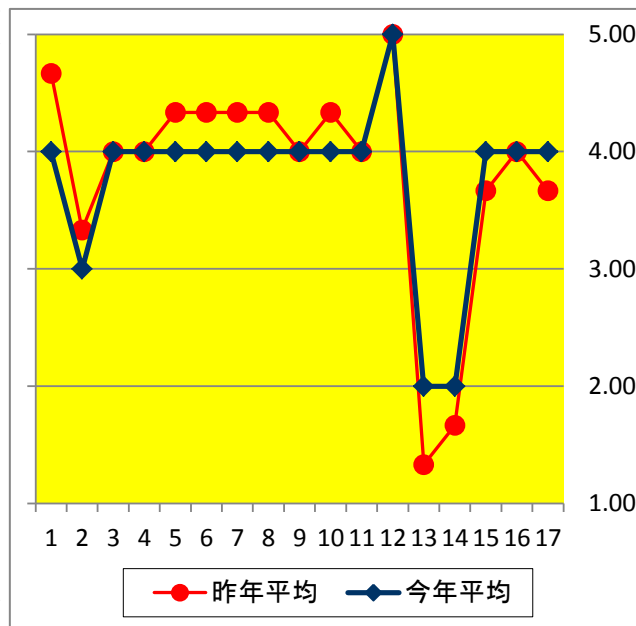
学生の力量にもよるが、少人数であれば、今年度の方式を採用できる。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年記載の「今後の対応」の通りの結果が出た。昨年度の方式では少し負担が大きかったようである。次年度は、同じ方針で行くが、少し学生の力量に合わせて内容を調整したい。

科 目	非営利会計論			
配当年次	2	開講時限	春火3	
受講者数	1	回答者数	1	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.00	4	4	4
2	3.33	3.00	3	3	3
3	4.00	4.00	4	4	4
4	4.00	4.00	4	4	4
5	4.33	4.00	4	4	4
6	4.33	4.00	4	4	4
7	4.33	4.00	4	4	4
8	4.33	4.00	4	4	4
9	4.00	4.00	4	4	4
10	4.33	4.00	4	4	4
11	4.00	4.00	4	4	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.33	2.00	2	2	2
14	1.67	2.00	2	2	2
15	3.67	4.00	4	4	4
16	4.00	4.00	4	4	4
17	3.67	4.00	4	4	4
回答者数	3	1			



受講生の傾向

受講生1名。学校のような教育組織には興味があるとのことであったが、非営利分野の知識は殆どない状態であった。受講態度は真面目に講義内容を理解しようとする姿勢は見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生の理解度に応じた授業を行うよう努めた(通常の日本語が難解である様子であったため、基礎的な語彙の内容から解説した)。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

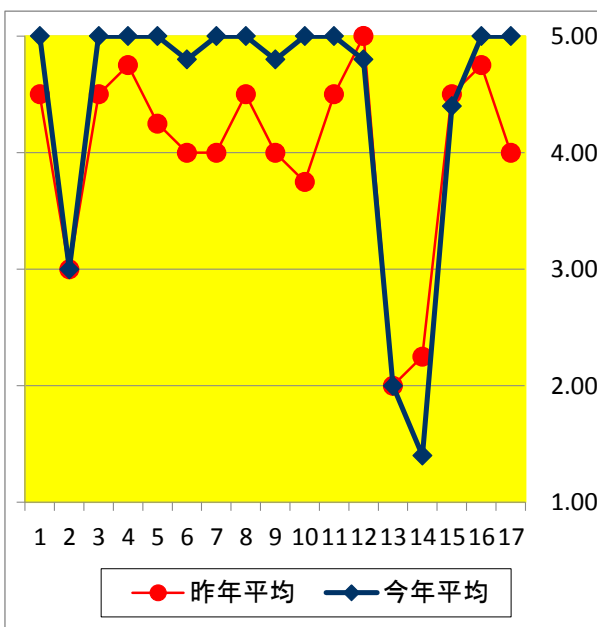
確認テストの結果からは、授業内容が十分理解できていないところも多かったように思われる。現在の社会において非営利組織の役割が重要になってきていることに鑑み、受講者が自ら興味を持って授業内容に積極的に参加するよう工夫していきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

上記のように授業には一定の困難が伴ったが、基礎的な理解は達成できた模様であった(確認テストの結果)。受講生の増加は見込めないが、引き続き、非営利組織の役割を十分に理解できるよう講義に工夫を行いたい。

科 目	保証業務論			
配当年次	2	開講時限	春金2	
受講者数	5	回答者数	5	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	5.00	5	5	5
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.50	5.00	5	5	5
4	4.75	5.00	5	5	5
5	4.25	5.00	5	5	5
6	4.00	4.80	5	5	4
7	4.00	5.00	5	5	5
8	4.50	5.00	5	5	5
9	4.00	4.80	5	5	4
10	3.75	5.00	5	5	5
11	4.50	5.00	5	5	5
12	5.00	4.80	5	5	4
13	2.00	2.00	1	5	1
14	2.25	1.40	1	2	1
15	4.50	4.40	5	5	2
16	4.75	5.00	5	5	5
17	4.00	5.00	5	5	5
回答者数	4	5			



受講生の傾向

本科目は、基本科目の「監査制度論」「監査基準」等のその他の監査系科目を履修した学生を前提に配置された応用科目であり、監査に対するモラルの高い学生が集まっていることから、出席率は去年に引き続き約100%であった(項目12)。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

わが国企業会計審議会による保証業務に関する枠組み・基準の他、アメリカの基準及び国際基準に基づいた保証業務の枠組みや内容を理解することを目的として、前半は座学による講義スタイルを採り、後半は、前半においてなされたはずの保証業務に関する理解度を確認するため、受講生自らが想定する「保証業務の提案」をパワーポイント及び提案書の形で、他の受講生に対してプレゼンテーションをさせ、自らが提案する当該保証業務の魅力を説かせるようにした。他の受講生には、当該受講生が行なったプレゼンテーションと提案書の内容について、5点スケールで幾つかの項目ごとに相互評価させた。

この際の評価方法が直感や単なる印象に終始しないように、予め6つの項目(情報収集の程度や情報分析の程度等)について個別に評価させるとともに、報告者のプレゼンテーションについて修正すべき内容を自由記述させた。報告者には、事後的に当該修正すべき内容のリストを手渡し、将来におけるプレゼンテーション能力の向上を期待した。最終的に当該業務に関する提案書をレポートの形で提出させ、採点し、その点数と相互評価の結果纏めて成績の評価とした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

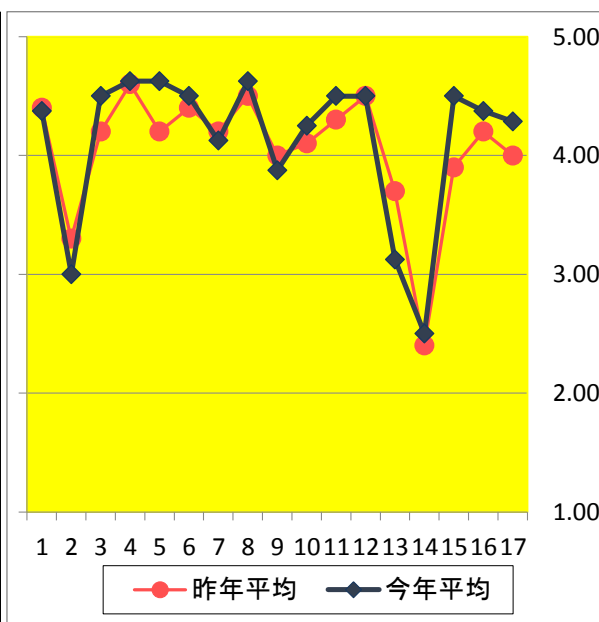
時間割上の配慮がなされたものの、受講生の減少から「保証業務の提案」内容に拡がりがなくなってきた。提案の仕方を多段階にして保証業務としての要件充足を実感させながらの進行に変更した方が良いかもしれない。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

提案される保証業務の拡がりがなくなることを避けるため、過年度における保証業務提案の優秀なものを紹介することにした。

科 目	法人税法			
配当年次	2	開講時限	春火3	
受講者数	8	回答者数	8	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.40	4.38	4	5	4
2	3.30	3.00	3	4	2
3	4.20	4.50	4・5	5	4
4	4.60	4.63	5	5	4
5	4.20	4.63	5	5	4
6	4.40	4.50	4・5	5	4
7	4.20	4.13	4	5	3
8	4.50	4.63	5	5	4
9	4.00	3.88	4	5	2
10	4.10	4.25	4	5	3
11	4.30	4.50	4・5	5	4
12	4.50	4.50	5	5	3
13	3.70	3.13	4	4	2
14	2.40	2.50	3	5	1
15	3.90	4.50	4・5	5	4
16	4.20	4.38	4	5	4
17	4.00	4.29	4	5	4
回答者数	10	8			



受講生の傾向

本講義では、受講生は租税判例を要約するレポートを毎回課される。しかし、本年度の受講生はレポートの提出が遅れることが多いだけでなく、自身が書いたレポートに関する質問に答えられない場面が多く見られた。その原因の1つは、予習時間(質問No.13)の不足にあると思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

租税判例の理解を容易にするため、他の関連する判例情報を講義レジュメに併記するだけでなく、訴訟の対象となった取引をできる限り図示するように留意した。また、受講生の論述力を少しでも向上させるため、講義時間内に法人税法の理論問題を受講生に与え、発表する機会を設けた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

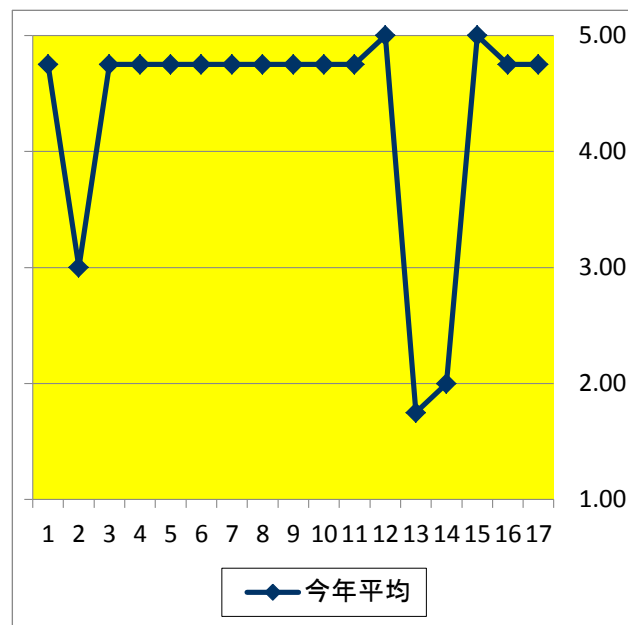
法人税法の理解のためには、判例の理解は不可欠である。今年度と同様、受講生に対して、判例要約を毎講義の課題とする。また、受講生の論述力を向上させるため、理論問題を解く時間を講義内に組み入れる。これにより、法人税法の条文を読まざるを得ない状況を作り出す。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

租税判例を要約する困難さを解決するため、要約する際のポイントとなる条文の内容について、事前に情報提供を行うようにする。

科 目	国際財務戦略論			
配当年次	2	開講時限	春木4	
受講者数	4	回答者数	4	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.75	5	5	4
2	—	3.00	3	3	3
3	—	4.75	5	5	4
4	—	4.75	5	5	4
5	—	4.75	5	5	4
6	—	4.75	5	5	4
7	—	4.75	5	5	4
8	—	4.75	5	5	4
9	—	4.75	5	5	4
10	—	4.75	5	5	4
11	—	4.75	5	5	4
12	—	5.00	5	5	5
13	—	1.75	1	3	1
14	—	2.00	2	3	1
15	—	5.00	5	5	5
16	—	4.75	5	5	4
17	—	4.75	5	5	4
回答者数	—	4			



受講生の傾向

公認会計士短答式合格者もいて、一般的にレベルの高い生徒が多かった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

前年度は受講者が2名で、その受講者が講義の最終回に病気等で休んだため、アンケートを取ることができなかった。ただし、前年度の授業は熱心にディスカッションを行っていたため、今年度もディスカッションを中心に行った。そのために、テーマに沿った雑誌記事等を準備し、事前に配布して、当日の授業の一部は、当該記事の内容を基にディスカッションを行った。これは、一種の反転授業である。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度未実施のため)

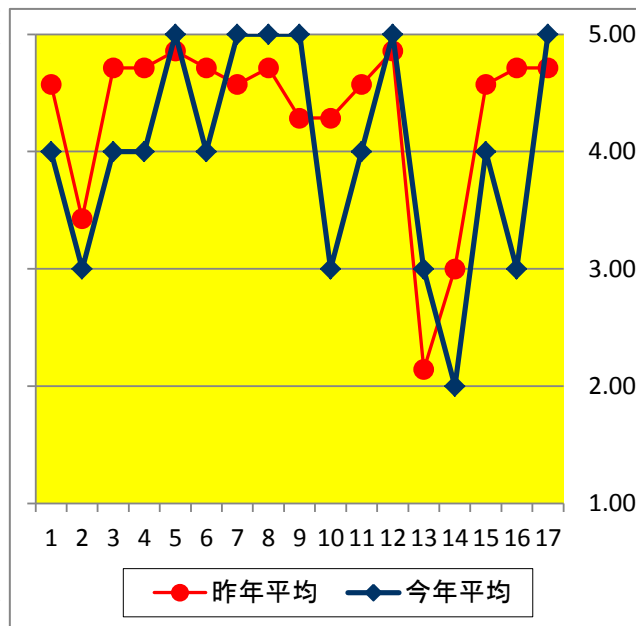
○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

各回のテーマに沿った雑誌記事等を用意し、授業を行った後、その授業内容と雑誌記事の内容を基に、ディスカッションを行うようにしたい。

Ⅱ－(2)．2014 年度授業評価アンケート(秋学期)結果概要

科 目	中級商業簿記(B)			
配当年次	1	開講時限	秋火5	
受講者数	1	回答者数	1	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.57	4.00	4	4	4
2	3.43	3.00	3	3	3
3	4.71	4.00	4	4	4
4	4.71	4.00	4	4	4
5	4.86	5.00	5	5	5
6	4.71	4.00	4	4	4
7	4.57	5.00	5	5	5
8	4.71	5.00	5	5	5
9	4.29	5.00	5	5	5
10	4.29	3.00	3	3	3
11	4.57	4.00	4	4	4
12	4.86	5.00	5	5	5
13	2.14	3.00	3	3	3
14	3.00	2.00	2	2	2
15	4.57	4.00	4	4	4
16	4.71	3.00	3	3	3
17	4.71	5.00	5	5	5
回答者数	7	1			



受講生の傾向

受講生は学部生であった。簿記を初めて学習する段階にあり、取引を借方と貸方に二面的に分解するところから教える必要があった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

簿記一巡の流れを明確に意識して学習してもらうようにした。仕訳の範囲は、日商検定4級から2級までを幅広く取り上げたが、受講生の理解度と希望に合わせて講義計画を変更し、基礎レベルの学習を中心とした。また、個別に質問に応じ、その都度、理解を確認しながら講義を進めた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

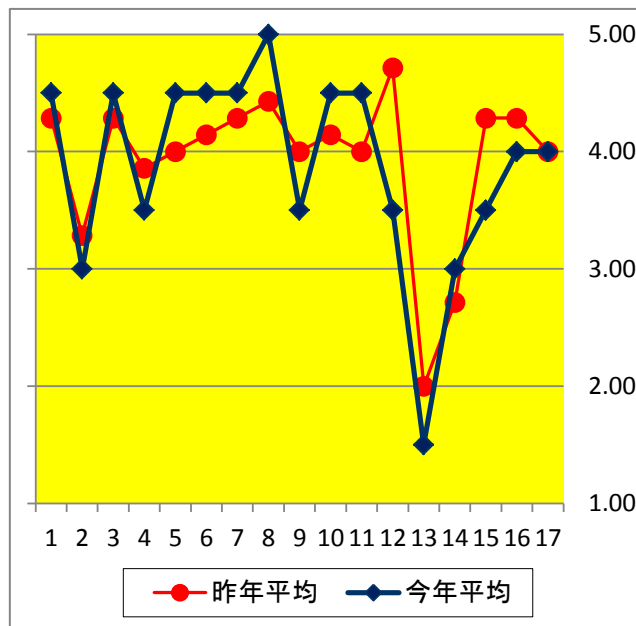
今年度の講義展開は、全体的に良い感触を得たようである。次年度も継続することにした。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回、受講生は学部生のみで、しかも初めて簿記を学習する段階にあった。大学院の講義にとって、これはイレギュラーな状況であり、その都度、対応を考えることにする。

科 目	中級工業簿記(B)			
配当年次	1	開講時限	秋木5	
受講者数	2	回答者数	2	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.29	4.50	4・5	5	4
2	3.29	3.00	3	3	3
3	4.29	4.50	4・5	5	4
4	3.86	3.50	3・4	4	3
5	4.00	4.50	4・5	5	4
6	4.14	4.50	4・5	5	4
7	4.29	4.50	4・5	5	4
8	4.43	5.00	5	5	5
9	4.00	3.50	3・4	4	3
10	4.14	4.50	4・5	5	4
11	4.00	4.50	4・5	5	4
12	4.71	3.50	2・5	5	2
13	2.00	1.50	1・2	2	1
14	2.71	3.00	2・4	4	2
15	4.29	3.50	3・4	4	3
16	4.29	4.00	4	4	4
17	4.00	4.00	4	4	4
回答者数	7	2			



受講生の傾向

本講義は、中級工業簿記の再履修クラスである。そのため、履修人数が前期と比較して大きく減少しており、個別指導形式で進めることができた。履修者は、可能な限りではあるが、この授業に対してまじめに出席していた。また、受講態度も非常にまじめであった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

前回のアンケートの結果が比較的良好であったことと、今回のクラスの性格が再履修クラスであったことから、履修者の個別の状況に合わせて、丁寧に教えるように心がけた。また、ただちに計算演習を行うのではなく、計算を行う背景および説明を行うように留意した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

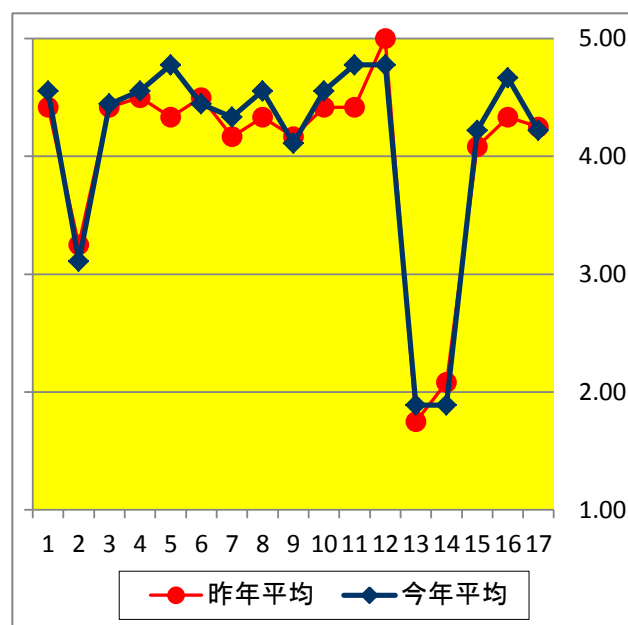
評点はいずれも比較的高かったため、継続して高い評価を得られるように留意する。
また、受講者の予習および復習の時間が比較的小さいため、今後の意識付けが必要と考えられる。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回も、全体としては高い評点であったと考えている。しかしながら、その一方で予習および復習に関する時間があまり取られていなかった点については課題があると考えられる。また、本クラスでは工業簿記を苦手科目とする履修者が多いためであると解釈できるものの、今後の勉強に対する意識付けについては、今後の改善の必要があると考えている。

科目	会計専門職業倫理(B)			
配当年次	2	開講時限	秋火3	
受講者数	10	回答者数	9	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.42	4.56	5	5	4
2	3.25	3.11	3	4	3
3	4.42	4.44	5	5	3
4	4.50	4.56	5	5	3
5	4.33	4.78	5	5	4
6	4.50	4.44	4	5	4
7	4.17	4.33	4・5	5	3
8	4.33	4.56	5	5	3
9	4.17	4.11	5	5	2
10	4.42	4.56	5	5	4
11	4.42	4.78	5	5	4
12	5.00	4.78	5	5	4
13	1.75	1.89	1	4	1
14	2.08	1.89	2	3	1
15	4.08	4.22	4	5	4
16	4.33	4.67	5	5	4
17	4.25	4.22	4	5	3
回答者数	12	9			



受講生の傾向

10人という少人数のクラスでの授業となった。うち3名が合格者であり、それ以外にもCPAに向けて本格的に勉強している受講生もいたことから、講義内容に対する反応、議論等は(春学期に比べても)高いレベルとなった。全般的に出席率も高く、充実した講義が行えたと考えられる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

①少人数クラスに対応して以下の取組を行った。ア) JICPA作成のビデオ等を用いてCPAや監査の社会的意義に関する理解を深める時間を設けた。イ) 事例研究が少ない(3班編成としたので3件のみ)ことに鑑み、最終回に2つ事例を紹介し、議論することとした。②企業に就職する学生が多いことを鑑み、企業内会計専門職に対応した倫理教育の時間を設けた(春学期と同じ内容+ケーススタディ)。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

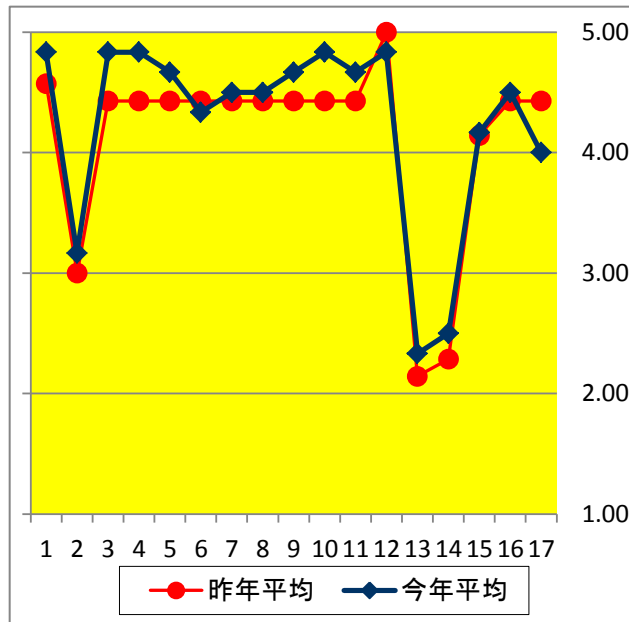
引き続き少人数のクラスが継続することを前提に、授業目的に沿い、より充実した内容にしていきたい。特に修了後は企業内職業会計人となる学生が多いと思われるため、企業内会計士等向けの職業倫理の内容を増やしていく。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

新しく追加した内容(事例の追加、ケーススタディ)は適切なものであったと考えられるが、それを用いて受講生にどのように前向きに考えさせ、議論を進めていくかについては工夫が必要と感じた。事例等をさらに興味を引くように加工して提供する等を検討していく。

科 目	企業法(B)			
配当年次	1	開講時限	秋月2	
受講者数	8	回答者数	6	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.57	4.83	5	5	4
2	3.00	3.17	3	4	3
3	4.43	4.83	5	5	4
4	4.43	4.83	5	5	4
5	4.43	4.67	5	5	4
6	4.43	4.33	4	5	4
7	4.43	4.50	4・5	5	4
8	4.43	4.50	4・5	5	4
9	4.43	4.67	5	5	4
10	4.43	4.83	5	5	4
11	4.43	4.67	5	5	4
12	5.00	4.83	5	5	4
13	2.14	2.33	2	5	1
14	2.29	2.50	2	5	1
15	4.14	4.17	4	5	3
16	4.43	4.50	4・5	5	4
17	4.43	4.00	4	5	3
回答者数	7	6			



受講生の傾向

今回の秋学期開講の企業法は、受講生は8人であった。企業法はほとんどの学生が春学期に受講しており、この秋学期の企業法は、秋学期において初めて企業法を受講する学生(2名)と春学期開講の企業法の再履修として受講する学生(6名)が混在している。授業の参加状況はおおむね良好で、授業態度も大変よかったが、その理解度についてはかなりばらつきがみられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度と同様、講義の中にあって、対話と文章作成のウエイト高めるという授業を心掛けた。特に、春学期に企業法を受講したが、再履修となった学生は、一概に法的な文章の作成能力をしっかりと身につけることが必要であった。論理的な思考能力とそれに結び付けられた説得力を持った文章の作成能力を習得できるように配慮した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

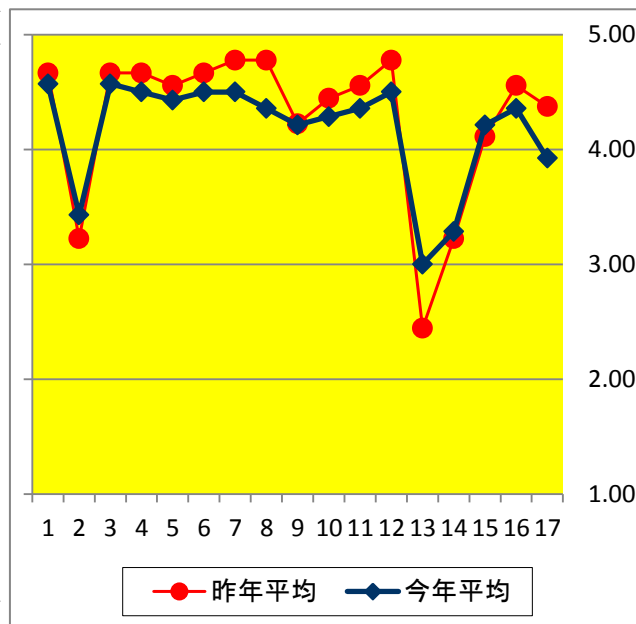
講義という制約はあるが、学生との対話および文章作成の練習はまだまだ十分とはいえないので、より一層このような機会を増やしていきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

企業法の授業の理解ということではできているが、それを自分で口頭で説明したり、文章で書いたりということになると難しくなる学生が多い。このギャップを埋められるような授業、すなわち、レクチャーと対話と文章作成のバランスをうまく考慮した授業を行いたい。

科目	上級簿記(B)			
配当年次	1	開講時限	秋木2	
受講者数	17	回答者数	14	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.57	5	5	4
2	3.22	3.43	3	5	2
3	4.67	4.57	5	5	4
4	4.67	4.50	5	5	3
5	4.56	4.43	5	5	3
6	4.67	4.50	4・5	5	4
7	4.78	4.50	4・5	5	4
8	4.78	4.36	4	5	3
9	4.22	4.21	4	5	3
10	4.44	4.29	4・5	5	3
11	4.56	4.36	4	5	3
12	4.78	4.50	5	5	2
13	2.44	3.00	3	5	1
14	3.22	3.29	3	5	2
15	4.11	4.21	5	5	3
16	4.56	4.36	4	5	4
17	4.38	3.92	4	5	2
回答者数	9	14			



受講生の傾向

受講生の多くは、以前に当該科目の単位が不認定となった学生、もしくは、導入科目群の履修が終わって当該科目を初めて受講できるようになった学生である。いずれにせよ、基礎力に不安のある受講生が多い状況であった。また、受講生の概ね3人に1人が留学生であり、日本語の理解にも不安がある状況であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

春学期の当該科目と同じく、講義中の説明は「覚えて解く」のではなく「考えて解く」ことを意識してもらうようにした。基本的に重要な論点を優先的に取り上げて説明し、問題演習の時間は一人ずつ個別に理解を確認して回った。秋学期は、上述の受講生の傾向からして日商検定2級の理解に問題があることもあるので、そのことに配慮しながら、受講生のレベルに見合った講義展開を心がけた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

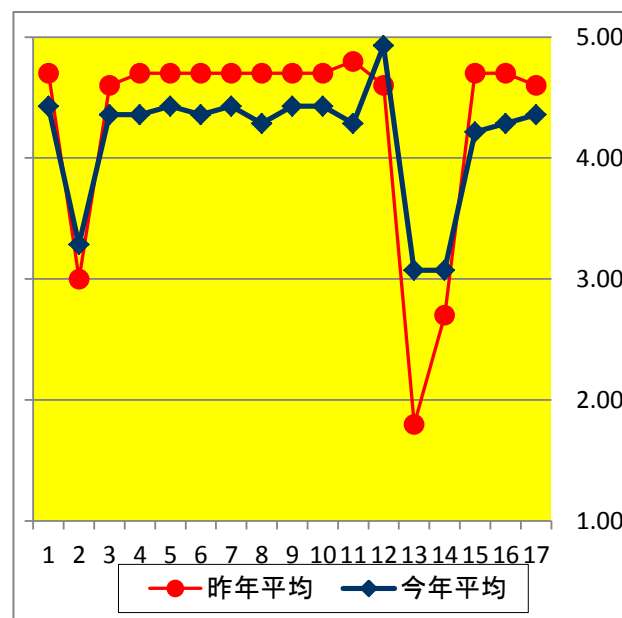
今年度の講義展開は全体的に良い感触を得た。次年度も継続することにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

基礎力に不安を感じることが多かった。まずは夏季休暇中に、日商検定2級までの内容を各自でしっかりとフォローしておいてもらいたい。今後の対応としては、講義終了後に復習と反復練習を促すようにする。

科 目	上級財務会計論(B)			
配当年次	1	開講時限	秋月4	
受講者数	15	回答者数	14	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.70	4.43	4	5	4
2	3.00	3.29	3	4	3
3	4.60	4.36	4	5	3
4	4.70	4.36	4	5	3
5	4.70	4.43	4	5	4
6	4.70	4.36	5	5	3
7	4.70	4.43	4	5	4
8	4.70	4.29	4・5	5	3
9	4.70	4.43	4	5	4
10	4.70	4.43	4	5	4
11	4.80	4.29	4・5	5	3
12	4.60	4.93	5	5	4
13	1.80	3.07	2・5	5	1
14	2.70	3.07	2・5	5	1
15	4.70	4.21	5	5	3
16	4.70	4.29	4・5	5	3
17	4.60	4.36	4	5	3
回答者数	10	14			



受講生の傾向

受講生の欠席はほぼ皆無であった。一方、受講時の姿勢は、積極的な受講生とそうではない受講生に分かれた状態にあると感じる。また、春学期においてもそうであったように、予習・復習の時間が短くなっており、その結果と考えられるが、小テストの正答率が低くなっている。これらは、質問13・14の最頻値が大きく分かれていることから想像できる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義時間中は、受講生の理解度を意識しつつ講義の速度や具体例の数を調整したが、それでも、昨年度より早く感じる受講生がいた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

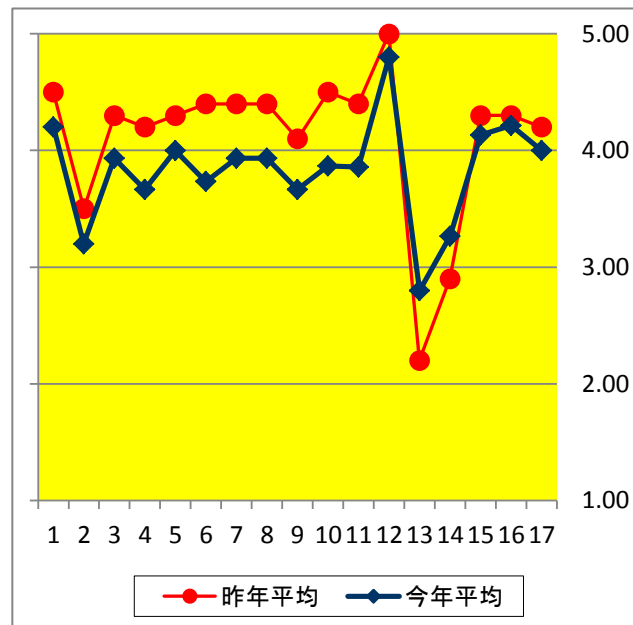
予習すべき箇所の明記を継続し、小テスト予習問題や復習問題については、出題形式を各回で変化させるなどの工夫を加え、予習・復習への動機付けを講じる。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

予習・復習時間や進度への感じ方から、二つのグループが混在していると感じられる。そのため、予習のしやすい資料作成や復習のポイントが明確になるような資料を作成するなどの工夫を講じたい。

科 目	上級管理会計論(B)			
配当年次	1	開講時限	秋木1	
受講者数	19	回答者数	15	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.20	4	5	1
2	3.50	3.20	3	4	1
3	4.30	3.93	4	5	1
4	4.20	3.67	4	5	1
5	4.30	4.00	4	5	1
6	4.40	3.73	4	5	1
7	4.40	3.93	4	5	1
8	4.40	3.93	4	5	1
9	4.10	3.67	4	5	1
10	4.50	3.87	4	5	1
11	4.40	3.86	4	5	1
12	5.00	4.80	5	5	4
13	2.20	2.80	3	5	1
14	2.90	3.27	3	5	1
15	4.30	4.13	4	5	3
16	4.30	4.21	4	5	3
17	4.20	4.00	4	5	3
回答者数	10	15			



受講生の傾向

当該講義は、基本科目である上級管理会計論の再履修クラスである。受講者の理解度にはばらつきが大きくあり、各種資格を受験するために後期の当該講義を選択した履修者だけではなく、前期に中級工業簿記の単位を取得したあとの勉強が不十分であるように見受けられる受講生も存在している。出席状況についても、多くの受講生がまじめに出席する一方で、授業の後半から出席する受講生も一部見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

授業進度を落として、さらに丁寧に背景を説明するように留意した。また、予習および復習の重要性については、折に触れて説明することで、意識付けを行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

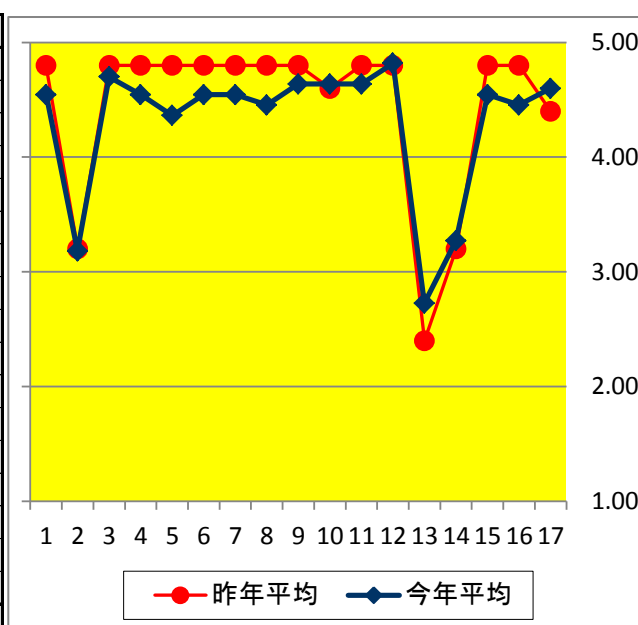
説明を丁寧にを行うようになった点とともに、全体的なアンケート結果が改善したように見受けられる。ただし、授業進度および時間外学習に関するアンケート結果は昨年と同程度であったため、さらに別の観点からの工夫が必要であると考えられる。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

評点のなかで、最高点および最頻値の数値は、比較的良かったと考えられる。しかしながら、最低点では最低値の1が連続している。この状況については、一部の受講生は講義が全く理解できておらず、それが評点の平均値を下げている可能性が予想される。また、授業進度および予復習の点数は改善していることから、授業進度および意識付けについては一定の成果があった可能性もある。授業進度は、既に適正に近い状況にあるため、これ以上遅くすることは問題があると考えられる。そのため、授業進度は現在を維持したまま、指導をさらに丁寧に行う必要があると感じている。

科 目	監査制度論(B)			
配当年次	1	開講時限	秋月3	
受講者数	12	回答者数	11	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.80	4.55	5	5	4
2	3.20	3.18	3	5	2
3	4.80	4.70	5	5	4
4	4.80	4.55	5	5	4
5	4.80	4.36	5	5	3
6	4.80	4.55	5	5	4
7	4.80	4.55	5	5	4
8	4.80	4.45	5	5	3
9	4.80	4.64	5	5	4
10	4.60	4.64	5	5	4
11	4.80	4.64	5	5	4
12	4.80	4.82	5	5	3
13	2.40	2.73	2	5	1
14	3.20	3.27	2	5	2
15	4.80	4.55	5	5	4
16	4.80	4.45	5	5	3
17	4.40	4.60	5	5	4
回答者数	5	11			



受講生の傾向

基本科目(必修科目)群に属するという関係上、受講生の出席率(項目12)は90%となっており、かなり高い出席率であり前期と同様に勉学に対する意欲が相対的に高いように解される。

しかし上記アンケート結果より、授業に対する予習時間(項目13)は昨年度より多少の改善は見られるものの、復習時間(項目14)とともに、必ずしも十分な時間が確保されているとは見受けられない。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

本年度は、企業会計審議会による監査基準改訂があったため、改訂箇所などについて追加的なパワーポイントによるスライドを用意し、監査制度に関する重要論点を確実に講義の中で押さえるようにした。スライドの最後には、従来通り受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するための参考文献を列挙した。これら配布用の資料は、関西大学インフォメーション・システムに授業当日中にアップロードし、授業録画によるWEB配信を前提とした学生の復習に役立つように配慮した。

授業が2回終了するごとに、前2回分の理解度を確認するためのとともに、復習を動機付けるために小テストを授業時間の最初15分程度で実施し、添削後、返却した。また優秀答案を氏名を伏せた上で全員に配布し解説を加えた。最終的に、小テスト実施→添削→返却(講評)を繰り返すことで、各自にエッセイの書き方を習得できるように、去年と前期以上に心懸けた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

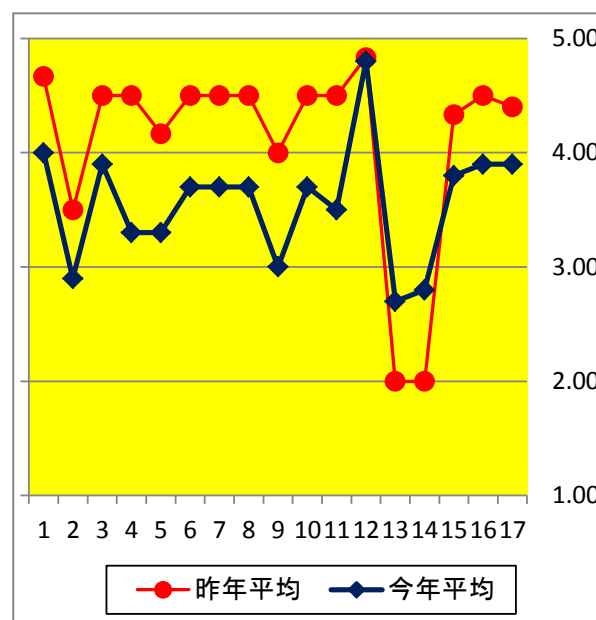
復習課題の任意提出は、今秋学期も全くなかったが、クラスB履修生が極めて少ないため、授業後の質疑応答時間で疑問点を解決するようにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

復習課題の任意提出を促すとともに、授業中に適宜、質問を提起することで出席者から解答を引き出し、参加意欲を高めるよう心懸ける必要がある。それが予習と復習の時間増加に繋がるものと期待される。

科 目	監査基準(B)			
配当年次	1	開講時限	秋水2	
受講者数	12	回答者数	10	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.00	4・5	5	1
2	3.50	2.90	3	4	1
3	4.50	3.90	4	5	1
4	4.50	3.30	4	5	1
5	4.17	3.30	4	5	1
6	4.50	3.70	4	5	1
7	4.50	3.70	4	5	1
8	4.50	3.70	4	5	1
9	4.00	3.00	3	4	1
10	4.50	3.70	4	5	1
11	4.50	3.50	4	5	1
12	4.83	4.80	5	5	4
13	2.00	2.70	2	5	1
14	2.00	2.80	2	5	1
15	4.33	3.80	4	5	2
16	4.50	3.90	4	5	3
17	4.40	3.90	4	5	3
回答者数	6	10			



受講生の傾向

理解がすすんでいる学生とそうでない学生とのレベル差が大きいに感じられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

基本的な考え方、重要なところは繰り返し説明し、理解のポイントを明確にするように努めた。事前の学習ポイントも明示した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

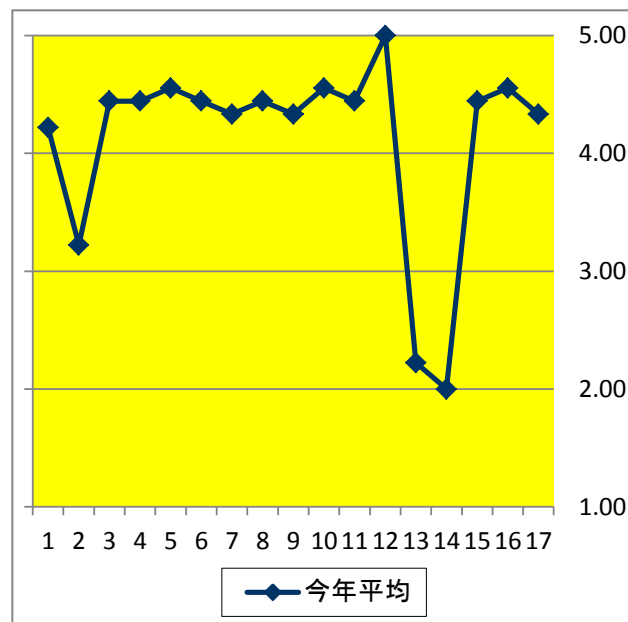
授業内容にメリハリをつけて、最低限押さえてもらいたいポイントを明らかにして、全員がテストで及第点がとれるようにもっていきたい。学習ポイントを事前に示して事前学習を徹底させたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

N/A

科 目	会計基準論			
配当年次	1	開講時限	秋火3	
受講者数	12	回答者数	9	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.22	4	5	4
2	—	3.22	3	5	3
3	—	4.44	4	5	4
4	—	4.44	4	5	4
5	—	4.56	5	5	4
6	—	4.44	4	5	4
7	—	4.33	4・5	5	3
8	—	4.44	4	5	4
9	—	4.33	4	5	4
10	—	4.56	5	5	4
11	—	4.44	4	5	4
12	—	5.00	5	5	5
13	—	2.22	2	3	2
14	—	2.00	2	3	1
15	—	4.44	4	5	4
16	—	4.56	5	5	4
17	—	4.33	4	5	4
回答者数	—	9			



受講生の傾向

2013年度と2012年度は非常勤講師が担当しており比較可能性がない。そこで、「昨年度」は2011年度として説明する。「昨年度」に比べて、予習時間、復習時間ともに短くなっているのが気になるが、授業の満足度も理解度も高く、授業への積極的参加が確認できた。これは2010年度のクラス運営のまずさを改善して2011年度に予習型授業に変更した効果が確認できたので、今年度もそれを踏襲した。授業中の質問に対する回答も積極的であり、意識の高さが感じられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

反転学習の手法とは異なるが、毎回の講義に先立ちその日に扱う内容に関する理解度を簡単なテストで確認した。そのために、講義で扱う基準をあらかじめ予習してくるよう求めた。そこで、確認のための小テストを終了すると、直ちにディスカッションに入れるはずであるが、そこまで訓練されていないので、回答を促す形で基準の文章の逐一の存在理由を確認するように誘導した。客観式試験に対応できるレベルでは、基準に潜む論理や背景理由までは答えられないので、そのことを自覚させ、考えさせるように誘導する方式を採用した。小テストは毎回10問、○×式である。これら10問は講義内容の重要論点でもあり、問題を題材になぜ間違えたのか、あってればいいというわけではなくて正解の理由まで考えさせるようにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

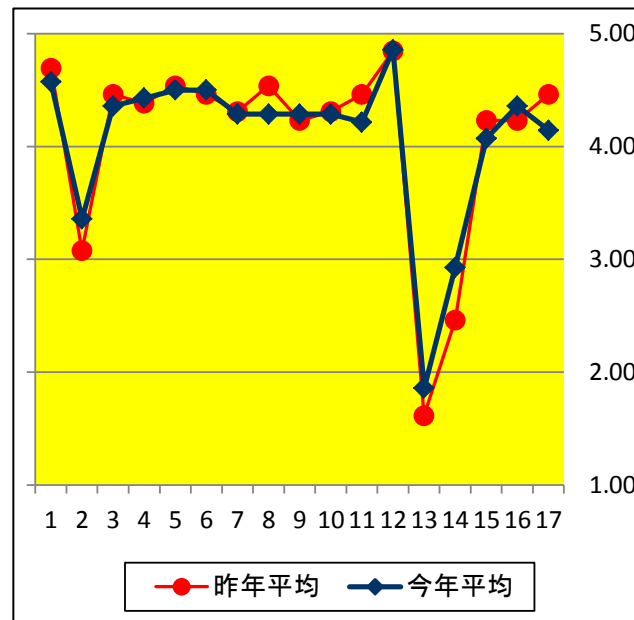
今回の講義で工夫したこと等を「昨年度」導入したのであるが、これを次回も引き継ぐと記載した。すなわち、「2012年度はこの科目を非常勤講師が担当するので「今後の対応」をとれないが、13年度には11年度の方式を踏襲したい」と。しかし、13年度も非常勤の担当であったため、11年度の方式は14年度に踏襲することになった。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

「昨年度」も今年度も学習者の主体的・積極的参加を誘発できたようなので、次年度もこれを引き継ぐこととする。

科 目	財表作成簿記			
配当年次	1	開講時限	秋木3	
受講者数	19	回答者数	14	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.69	4.57	5	5	4
2	3.08	3.36	3	4	3
3	4.46	4.36	4	5	4
4	4.38	4.43	4	5	4
5	4.54	4.50	4・5	5	4
6	4.46	4.50	4・5	5	4
7	4.31	4.29	4	5	3
8	4.54	4.29	4・5	5	3
9	4.23	4.29	5	5	3
10	4.31	4.29	4	5	3
11	4.46	4.21	4	5	3
12	4.85	4.86	5	5	4
13	1.62	1.86	1	5	1
14	2.46	2.93	2	5	1
15	4.23	4.07	4	5	2
16	4.23	4.36	5	5	3
17	4.46	4.14	4	5	3
回答者数	13	14			



受講生の傾向

簿記の習熟度の高い受講生と、そうでない受講生に大きく分かれ、テストの得点に顕著な差が見られる状況であった。後者の受講生は、上級簿記の単位が未修得であり、講義の内容を理解するのが大変そうな様子であった。また、前者の受講生であっても、連結会計は計算問題としては解けるが、仕訳として示すことは難しい様子であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義の全体を通じて、重要な論点を優先的かつ反復的に取り扱うことで、知識の定着が図られるように計画した。講義中の説明は、テクニカルな解法ではなく、簿記一巡の手續や原理・原則に従って説明することを心がけた。問題演習の時間は、一人ずつ個別に理解を確認して回った。確認問題は宿題として、講義内容の理解と復習を促した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

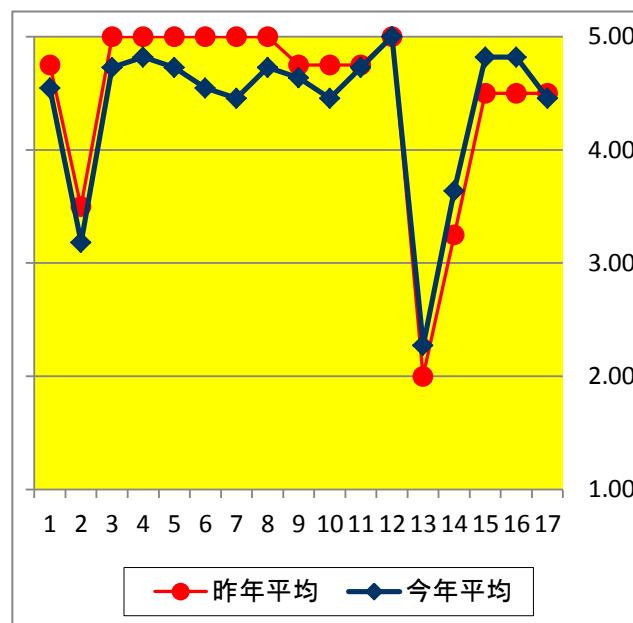
今年度の講義展開は全体的に良い感触を得た。次年度も継続することにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度の講義展開は全体的に良い感触を得た。次年度も継続することにしたい。

科 目	監査報告論			
配当年次	1	開講時限	秋金2	
受講者数	12	回答者数	11	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.75	4.55	5	5	4
2	3.50	3.18	3	4	3
3	5.00	4.73	5	5	4
4	5.00	4.82	5	5	4
5	5.00	4.73	5	5	4
6	5.00	4.55	5	5	4
7	5.00	4.45	5	5	3
8	5.00	4.73	5	5	4
9	4.75	4.64	5	5	4
10	4.75	4.45	4	5	4
11	4.75	4.73	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.00	2.27	2	5	1
14	3.25	3.64	5	5	2
15	4.50	4.82	5	5	4
16	4.50	4.82	5	5	4
17	4.50	4.45	5	5	3
回答者数	4	11			



受講生の傾向

選択科目である本科目について、受講生の出席状況(項目12)は100%を確保しており、去年実績と同様に極めて高い出席率となっており、受講生のモラールも去年と同様に比較的高くなっている。今期は、これらの傾向が受講生増加の下でも見られるため、相対的にモラールの高い受講生となっている。この結果、予習時間(項目13)が去年に比して増加するとともに、復習時間(項目14)も増加していると考えられる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度、監査基準の改訂があったため、毎回、パワーポイントによるスライドを追加的に作成・配布するとともに、必要に応じて監査基準の審議資料等を配布し解説を加えた。またスライドの最後には、受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するために必要となる参考文献を列举した。さらにこれら配布資料の全ては、授業当日中に関西大学インフォメーション・システムにアップロードし、授業録画WEB配信を前提とした復習に役立つよう配慮した。前2回分の理解度を確認するための小テストを、隔週で授業時間の最初に20分程度で実施し、添削して返却すると同時に、成績優秀者数名の答案を氏名と学生番号を伏せた上で、コピーし全員に配布した。さらに返却時に論点の講評を行なうことで、各自にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるよう心懸けた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

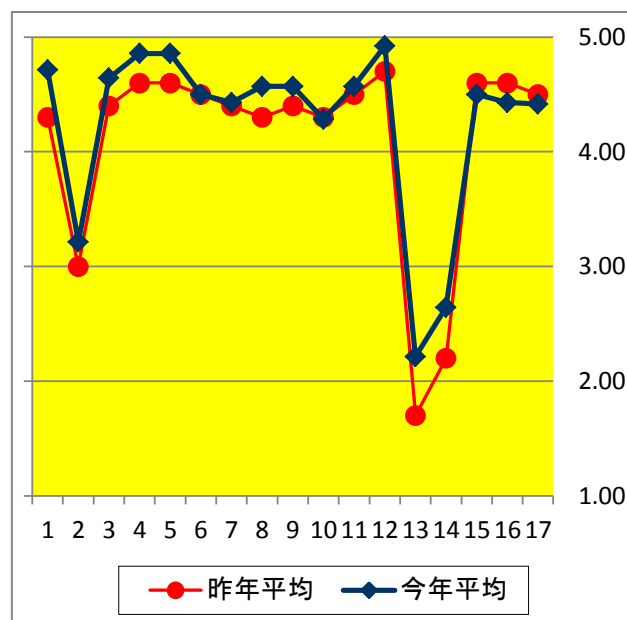
配当時限を2限に変更することで受講しやすさを確保するとともに、小テストの対象範囲を前2回分としたことで、復習課題を適時かつ効果的に実施できるように配慮する必要がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今期は配当時限を2限としたことで受講生の増加に繋がったと考えられるため、次期以降も受講しやすい時間帯での開講を行ない、復習課題の任意提出を促す措置を取る必要がある。

科 目	会社法			
配当年次	1	開講時限	秋金3	
受講者数	19	回答者数	14	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.30	4.71	5	5	4
2	3.00	3.21	3	4	3
3	4.40	4.64	5	5	4
4	4.60	4.86	5	5	4
5	4.60	4.86	5	5	4
6	4.50	4.50	5	5	3
7	4.40	4.43	5	5	3
8	4.30	4.57	5	5	3
9	4.40	4.57	5	5	3
10	4.30	4.29	4・5	5	3
11	4.50	4.57	5	5	3
12	4.70	4.92	5	5	4
13	1.70	2.21	2	5	1
14	2.20	2.64	2	5	1
15	4.60	4.50	4・5	5	4
16	4.60	4.43	4	5	4
17	4.50	4.42	5	5	3
回答者数	10	14			



受講生の傾向

今回の会社法の受講生は、19人と全体の学生数から考えても比較的多いほうであった。公認会計士試験を受験する学生にとっては、必須の科目になるが、必ずしも公認会計士試験を受験しない学生もまた多く受講しているようであった。受講態度はおおむね良好であり、熱心に取り組んでいるようであった。ただ、理解度についてはそもそもの事前勉強量の違いなどからさまざまであったように思う。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度に比べて、内容について深入りするというよりもむしろ、広く全体的な理解ということを中心とした。深い内容については、上級会社法で扱うこととした。さらに、広い内容とはいえお互いの項目がリンクしている部分も多く、これらを結びつけながら授業するという工夫をした。また、学生にとっては、負担であったかもしれないが、企業法で扱った部分については、すでに理解していることとして進め、会社法が単なる企業法の復習科目とならないように意識した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

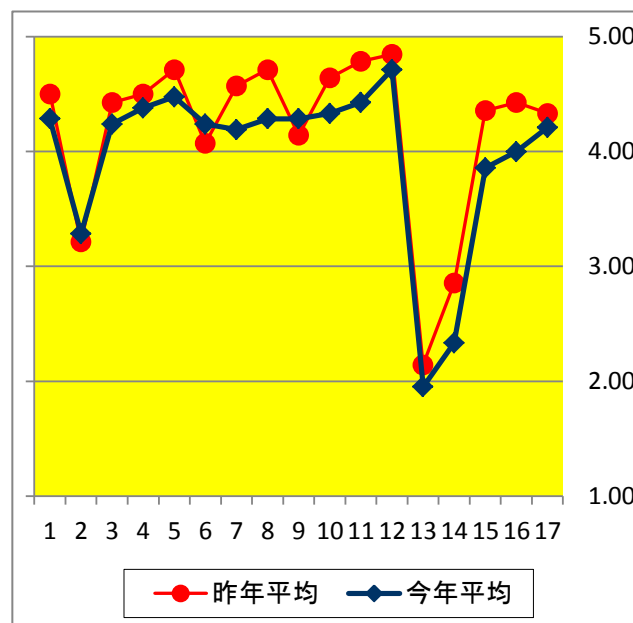
昨年度と同様、会社法を分量的に消化するというよりも、学生の理解度を最優先にして授業を進めていきたい。特に、「企業法」の復習部分は簡略にして、かつじっくりとした時間のかかる部分はむしろ「上級会社法」で扱うこととして、会社法で収まる範囲を十分に学生に理解してもらうことを第一の目標としたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

会社法は、隣接する「企業法」や「上級会社法」よりもより広い内容を扱わなければならない。この広い内容を漫然と授業していたのでは、なかなか学生の理解も深まらないし、興味を抱かせるような授業とはならない。そこで、広い内容を扱う中であって、それらを何らかのトピックスでくくって扱うことで、その広い内容をより効率的かつ興味深いものとした。たとえば、株主総会の手続きというものはそのものは単調な授業になりがちであるが、同じ会議対である取締役会の手続きと比較しながら扱うことで、両者の特徴がよりはっきりと表れ、それぞれの理解の助けにもなり、広い内容の授業を扱うに当たっても時間を短縮できる。

科 目	ミクロ経済学			
配当年次	1	開講時限	秋土2	
受講者数	24	回答者数	21	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.29	4	5	2
2	3.21	3.29	3	4	3
3	4.43	4.24	4・5	5	2
4	4.50	4.38	5	5	2
5	4.71	4.48	5	5	3
6	4.07	4.24	4	5	3
7	4.57	4.19	4	5	3
8	4.71	4.29	4	5	3
9	4.14	4.29	4	5	3
10	4.64	4.33	4	5	3
11	4.79	4.43	4	5	4
12	4.85	4.71	5	5	3
13	2.14	1.95	1	4	1
14	2.86	2.33	2	5	1
15	4.36	3.86	4	5	1
16	4.43	4.00	4	5	3
17	4.33	4.21	4	5	3
回答者数	14	21			



受講生の傾向

ミクロ経済学は、非常に理論的な分析を行う授業であるので、会計専門職業数学などを受講し、数学の基礎的な知識を有していることが必要であったが、受講生全員が春学期開講の「会計専門職業数学」を受講して合格していたので、非常に理解が早く、授業は順調に進むことができた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の授業評価アンケートでは、授業の最初の頃はミクロ経済学の概念に慣れにくいということを感じた受講生も数人いたので、今回は授業の最初は非常にわかり易いように、具体的な例を出して、授業を進めた。その結果、授業が進むにつれて、受講生は良く理解して、授業の進展がスムーズになった。そして、難しいことよりも易しいことを繰り返し説明したので、受講生は難易度が高くなっても良く理解してくれたと考えている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

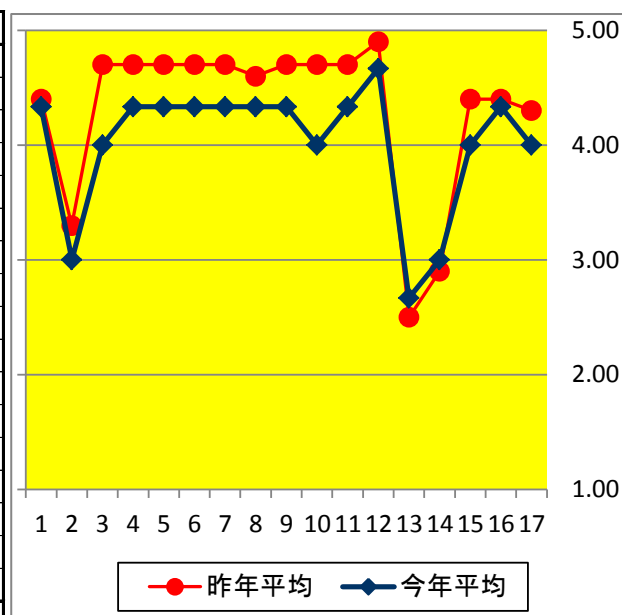
授業では、難易度の高い講義や練習問題を解くよりも、まず基礎学力をつけるために、理解しやすい内容からスタートすることが大切であると考えている。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

難易度の高い内容の講義を説明するよりも、易しいことを繰り返して、完全に理解させてから、次のステップに進む方が理解には効果的であると考えたので、今後もその方針で講義をする計画である。

科 目	国際会計基準論			
配当年次	2	開講時限	秋月2	
受講者数	4	回答者数	3	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.40	4.33	4	5	4
2	3.30	3.00	3	3	3
3	4.70	4.00	3・4・5	5	3
4	4.70	4.33	4	5	4
5	4.70	4.33	4	5	4
6	4.70	4.33	4	5	4
7	4.70	4.33	4	5	4
8	4.60	4.33	4	5	4
9	4.70	4.33	4	5	4
10	4.70	4.00	3・4・5	5	3
11	4.70	4.33	4	5	4
12	4.90	4.67	5	5	4
13	2.50	2.67	1・3・4	4	1
14	2.90	3.00	2・3・4	4	2
15	4.40	4.00	3・4・5	5	3
16	4.40	4.33	4	5	4
17	4.30	4.00	4	4	4
回答者数	10	3			



受講生の傾向

欠席・遅刻が目立つ学生がいたが、他の学生はほぼ全回出席している。受講態度はやや受動的ではあるものの、まじめで熱心であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

資料の事前配布とともに、講義内容の理解を深めるため、適宜追加資料や具体例を提示し、よりわかりやすくなるようつとめた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

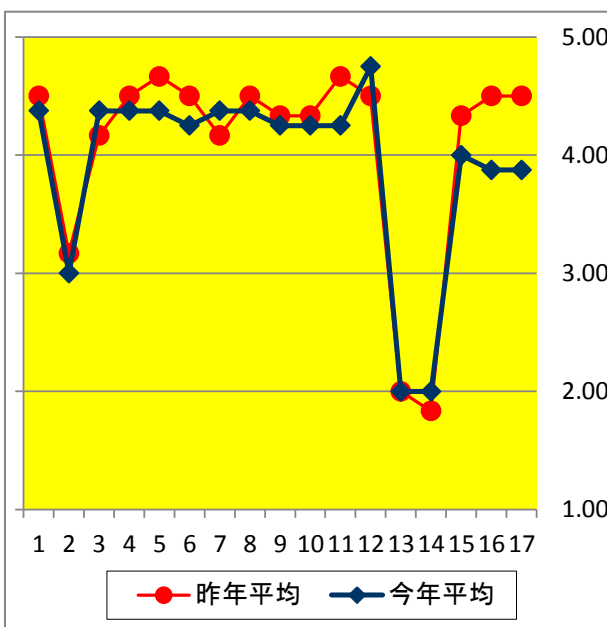
講義資料の事前配付だけでなく、講義内容の理解を深めるため、講義において掲示する資料を、よりわかりやすくし、同時に基準本文への参照を受講生自力行えるような工夫を講じるつもりである。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義で紹介する基準のポイントと基準本文の詳細な理解とを両立できるような資料作りを検討したい。また、資料の事前配布にもかかわらず、予習時間が短いので、小テストに反映するなどの工夫を講じるつもりである。

科 目	コストマネジメント論			
配当年次	2	開講時限	秋金3	
受講者数	10	回答者数	8	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.38	5	5	3
2	3.17	3.00	3	3	3
3	4.17	4.38	5	5	3
4	4.50	4.38	5	5	3
5	4.67	4.38	5	5	3
6	4.50	4.25	4	5	3
7	4.17	4.38	5	5	3
8	4.50	4.38	5	5	3
9	4.33	4.25	4	5	3
10	4.33	4.25	4	5	3
11	4.67	4.25	4	5	3
12	4.50	4.75	5	5	4
13	2.00	2.00	1・3	3	1
14	1.83	2.00	1・3	3	1
15	4.33	4.00	3・5	5	3
16	4.50	3.88	3・4	5	3
17	4.50	3.88	3・4	5	3
回答者数	6	8			



受講生の傾向

本講義は2年生後期に開講される科目であり、ほとんどの受講者は講義中の反応も良く、十分な学習をこなしていると思定される。また、受講者はいずれもほとんど休むことなく、真面目に受講していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年の段階で、十分に高い評価であったと考えられるため、本年度では昨年度の授業の方法を維持するとともに、自宅における課題、およびスライド資料の説明の方法を工夫した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

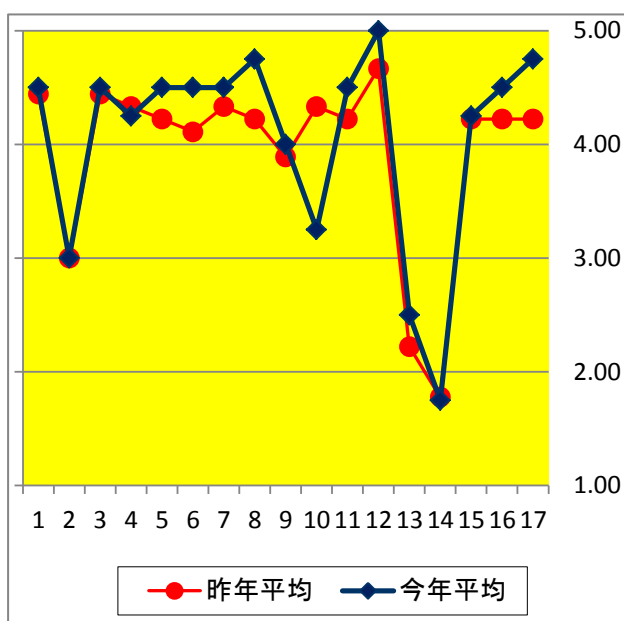
全般的な数字は昨年度と同程度であると認識している。そのため、今後は昨年度からの課題である自宅での学習を増やすための方法を工夫するとともに、スライド資料に伴う講義方法の不備を改善する必要があると考えている。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度からは、大きく講義方法を変えていないため、全般的な評価は昨年度と同程度と認識している。しかしながら、本年度は、設問15、設問16、設問17の評価が下がったため、今後の改善の必要を感じている。また、前述の各設問の評点では、いずれも最頻値が2つ表示されており、受講生の評価が割れていることが予想される。既に十分な能力のある受講生に対しての触発となるような要素と、十分に理解できていない受講生へのフォローという2点を、同時に達成することは困難であろうが、改善できるよう取り組む必要性を感じている。

科 目	監査事例研究			
配当年次	1	開講時限	秋水1	
受講者数	6	回答者数	4	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.44	4.50	4・5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.44	4.50	4・5	5	4
4	4.33	4.25	4	5	4
5	4.22	4.50	4・5	5	4
6	4.11	4.50	4・5	5	4
7	4.33	4.50	4・5	5	4
8	4.22	4.75	5	5	4
9	3.89	4.00	3・5	5	3
10	4.33	3.25	1・3・4・5	5	1
11	4.22	4.50	4・5	5	4
12	4.67	5.00	5	5	5
13	2.22	2.50	3	3	1
14	1.78	1.75	2	2	1
15	4.22	4.25	5	5	3
16	4.22	4.50	4・5	5	4
17	4.22	4.75	5	5	4
回答者数	9	4			



受講生の傾向

各自が自分の意見をしっかりと述べていた。授業を重ねるうちに、問題意識や着眼点に進歩がみられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと
 受講生が意見を出しやすいように、ディスカッションの時間を増やした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

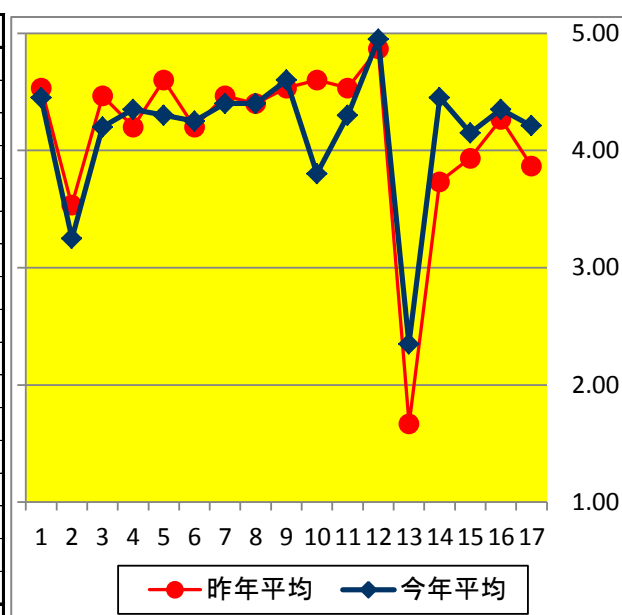
監査基準を勉強したことを前提に、秋学期に授業を開講したのはそれなりに意義があったと感じている。ディスカッションにはみな前向きに取り組んでくれたと思うので、事前にどれだけ学習して自分の考えを深めてもらうかが大切であることを促していきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

N/A

科 目	基本会計プログラム演習			
配当年次	1	開講時限	秋火4	
受講者数	24	回答者数	20	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.53	4.45	5	5	3
2	3.53	3.25	3	4	2
3	4.47	4.20	4	5	3
4	4.20	4.35	4	5	3
5	4.60	4.30	5	5	3
6	4.20	4.25	4	5	3
7	4.47	4.40	5	5	3
8	4.40	4.40	4	5	3
9	4.53	4.60	5	5	3
10	4.60	3.80	3	5	2
11	4.53	4.30	4	5	3
12	4.87	4.95	5	5	4
13	1.67	2.35	1	5	1
14	3.73	4.45	5	5	2
15	3.93	4.15	4	5	3
16	4.27	4.35	4	5	3
17	3.87	4.21	4	5	3
回答者数	15	20			



受講生の傾向

受講生のうち4名が受講生の都合により、かなり早い段階で受講を止めたようであるが、その他については、欠席も少なく、熱心に受講していた。また、昨年度より講義の進度が早めではあったが、昨年度の受講生より早いと感じなかったようである。ただ、受講生の中にコンピュータ処理への苦手意識が強い者も少なくないようである。おそらく、その結果、クラス規模が適切だと感じる学生が昨年度より少なくなったと思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

会計プログラムの理解を深めるため、演習を行った後に基礎的な背景理解のための演習、という順序を修正し、まず、背景理解のための基礎的な演習を行い、ポイントとなる演習へと展開する順序にした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

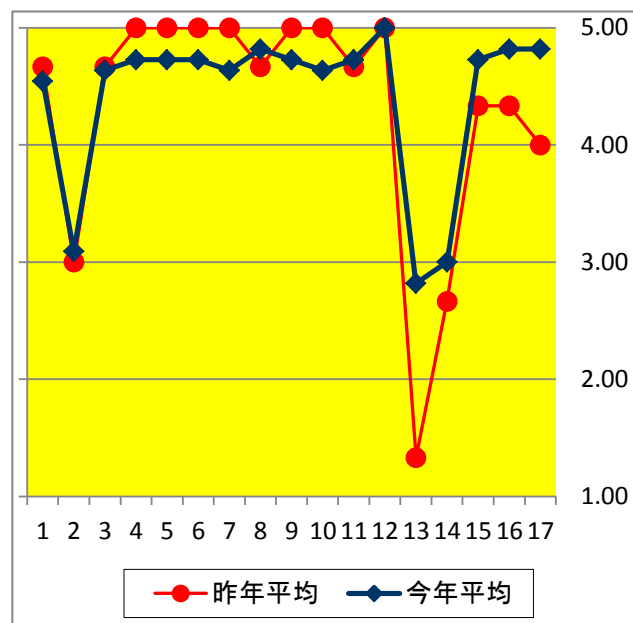
講義内容や速度と学生の理解度とのバランスを考慮したつもりであるが、速度が速く感じたようであるので、講義順序を調整し、同内容・同密度で学生の理解度を維持しつつ、速度の維持も図るつもりである。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

極端にコンピュータ処理・操作を苦手とする受講生に対しては、別途課題を与えとか、処理・操作の質問の時間を別に設けるなどして、予習・復習によるキャッチ・アップを促すよう工夫を講じるつもりである。

科 目	基本監査プログラム演習			
配当年次	1	開講時限	秋金4	
受講者数	12	回答者数	11	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.55	5	5	3
2	3.00	3.09	3	4	3
3	4.67	4.64	5	5	3
4	5.00	4.73	5	5	4
5	5.00	4.73	5	5	4
6	5.00	4.73	5	5	4
7	5.00	4.64	5	5	3
8	4.67	4.82	5	5	4
9	5.00	4.73	5	5	4
10	5.00	4.64	5	5	4
11	4.67	4.73	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.33	2.82	2	5	1
14	2.67	3.00	2	5	1
15	4.33	4.73	5	5	4
16	4.33	4.82	5	5	4
17	4.00	4.82	5	5	4
回答者数	3	11			



受講生の傾向

昨年度比、受講者数も増加するとともに、授業参加度あるいは熱心度を測る出席率(項目12)において、昨年と同様100%を達成しているため、非常に熱心な受講生の傾向が見受けられる。また予習時間(項目13)と復習時間(項目14)も昨年度に比して増加していることから、極めてモラルの高い傾向を見出せる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度は監査報告に関する監査基準改訂があったため、当該改訂を反映したパワーポイントによるスライドと、必要に応じて監査基準や実務指針、意見書等を用意し、配布した上で、監査報告と実施に関する重要論点を確実に講義の前半で押さえるようにした。このように前半においては、監査実施プロセスについてテキストに基づいて授業を行ない、後半に、監査プログラムを用いたコンピュータ監査を実体験させた。これら前半の資料については、授業の都度、関西大学インフォメーション・システムにアップロードし復習のように供した。前半に用いたスライドの最後には、受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するために必要となる参考文献を列挙した。

また前半の講義過程において、学生側の能動的な参加を促すため、質疑応答を頻繁に行ない成績評価に反映させた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

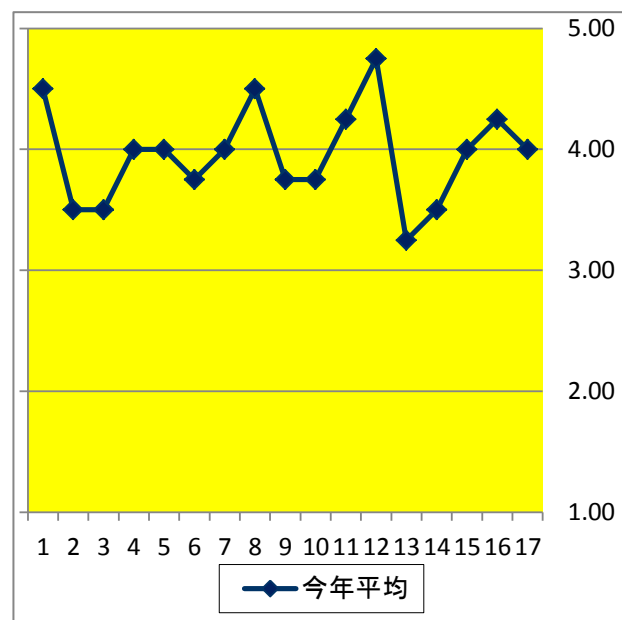
演習時間内での机間巡回指導をヨリ一層徹底したものの、学生の側に受身的な姿勢が目立つため、何故その手続や方法を選択するべきなのかに関する議論を含めた討議時間を増やす必要がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度に引き続き、学生の能動的参加を促す措置として、講義途中における適時かつ頻繁な質問提起を行ない、それらに対する学生からの回答とその根拠を引き出すように心懸けたい。

科 目	ソリューション・イン・アカデミック(富田クラス)			
配当年次	1	開講時限	秋月5	
受講者数	4	回答者数	4	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.50	4・5	5	4
2	—	3.50	3	5	3
3	—	3.50	3・4	4	3
4	—	4.00	4	5	3
5	—	4.00	4	5	3
6	—	3.75	4	4	3
7	—	4.00	4	5	3
8	—	4.50	4・5	5	4
9	—	3.75	4	5	2
10	—	3.75	4	4	3
11	—	4.25	5	5	3
12	—	4.75	5	5	4
13	—	3.25	3	5	2
14	—	3.50	3・4	4	3
15	—	4.00	4	5	3
16	—	4.25	5	5	3
17	—	4.00	4	5	3
回答者数	—	4			



受講生の傾向

すべての受講生がほとんど欠席することなく、積極的に受講していた。また、講義時間中も積極的に課題をこなしつつ、ディスカッションに参加していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は担当していないため、昨年度の授業評価アンケートを踏まえることはできなかったが、共通シラバスどおりに進捗させ、受講生に達成目標を常に明確にすることで、学習モチベーションを維持できるようつとめた。

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

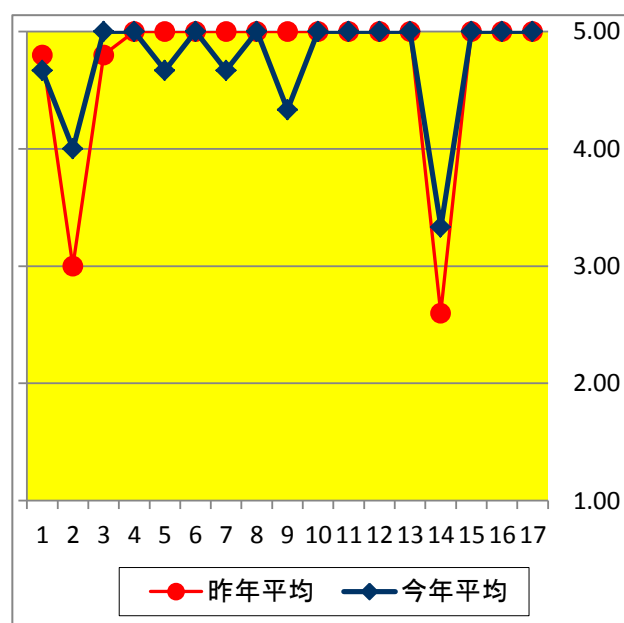
該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

来年度の担当は予定されていないため、「今後の対応」ではないが、再び担当する場合、より理解の深度が深まるような課題の提示やディスカッションへの前振りなどの工夫を講じてみたい。

科 目	ソリューション・イン・アカデミック(松本クラス)			
配当年次	1	開講時限	秋月5	
受講者数	3	回答者数	3	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.80	4.67	5	5	4
2	3.00	4.00	3・4・5	5	3
3	4.80	5.00	5	5	5
4	5.00	5.00	5	5	5
5	5.00	4.67	5	5	4
6	5.00	5.00	5	5	5
7	5.00	4.67	5	5	4
8	5.00	5.00	5	5	5
9	5.00	4.33	5	5	3
10	5.00	5.00	5	5	5
11	5.00	5.00	5	5	5
12	5.00	5.00	5	5	5
13	5.00	5.00	5	5	5
14	2.60	3.33	2・3・5	5	2
15	5.00	5.00	5	5	5
16	5.00	5.00	5	5	5
17	5.00	5.00	5	5	5
回答者数	5	3			



受講生の傾向

受講生の授業参加度あるいは熱心度を測る出席率(項目12)において、100%を達成しており、また演習のための予習(項目13)と復習(項目14)の面でも昨年度よりも向上しているため、今年度は非常に熱心な受講生の傾向が見受けられる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

演習最初の段階で学生からの希望を聴取し、監査論に関する諸論点を自主的に解答する演習とした。このため担当者個々が課題に対する分析・資料作成・プレゼンテーション・ディスカッションを行なえるように、複数の課題を事前に配布した。この結果、受講生も予習時間(項目13)と復習時間(項目14)にかなりの時間を割いていることが判る。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

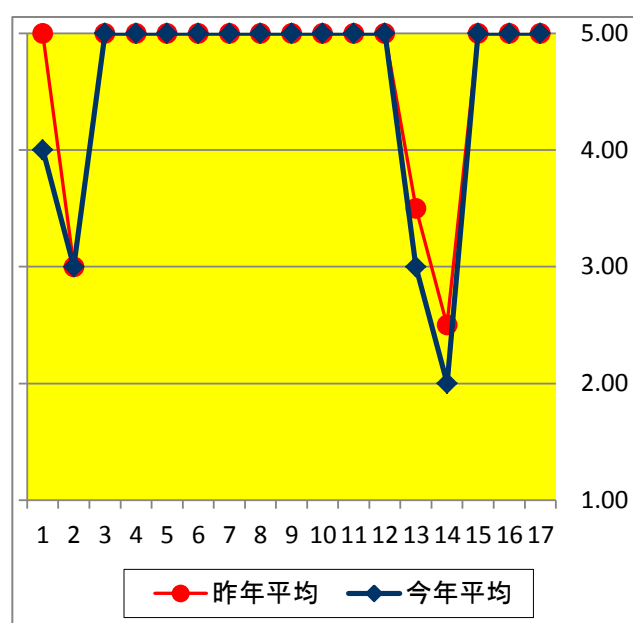
1年次秋学期より個別演習指導として設置した科目であるため、2年次個別演習で応用できるように、基本的なスキル獲得に特化しつつ、同時に専門知識の習得を心懸けねばならない。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

各自にパワーポイントを利用した資料作成・プレゼンテーション・ディスカッションを求めたが、自分以外の報告者による報告に対する議論が比較的乏しいと感じられたため、他者に対する関与度を高めるための方策を採る必要がある。

科 目	ソリューション・イン・アカデミック(三島クラス)			
配当年次	1	開講時限	秋月5	
受講者数	1	回答者数	1	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.00	4	4	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	5.00	5.00	5	5	5
4	5.00	5.00	5	5	5
5	5.00	5.00	5	5	5
6	5.00	5.00	5	5	5
7	5.00	5.00	5	5	5
8	5.00	5.00	5	5	5
9	5.00	5.00	5	5	5
10	5.00	5.00	5	5	5
11	5.00	5.00	5	5	5
12	5.00	5.00	5	5	5
13	3.50	3.00	3	3	3
14	2.50	2.00	2	2	2
15	5.00	5.00	5	5	5
16	5.00	5.00	5	5	5
17	5.00	5.00	5	5	5
回答者数	2	1			



受講生の傾向

今回はこの授業の受講生は1人であった。1人だけということもあって、授業には熱心かつまじめに取り組んでいたし、予習・復習もしっかりと行っていた。また、授業の題材としては、企業法を扱っていたが、企業法について強い興味を持ち、さらに事前学習もできていた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度のコメントとしては、学生間における討論が行えるようにと記載したが、学生が一人ということもあって、教員と学生間における対話とならざるを得なかったが、今回の授業においても対話中心という組立で授業を行った。今回の授業で特に工夫したこととしては、対話の中でもなるべく考えて答えてもらうよう心掛けた。すなわち、対話においても即答が可能なもの、たとえば、知っているか知らないかというものよりもむしろ、本人であれば答えを導き出せるような内容について、じっくり考えてもらって、解答してもらうということを中心とした。さらに、解答が出ない場合であっても、何らかのヒントを与えて、自らが考えて答えを導き出すという習慣を身につけてもらうことを意識した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

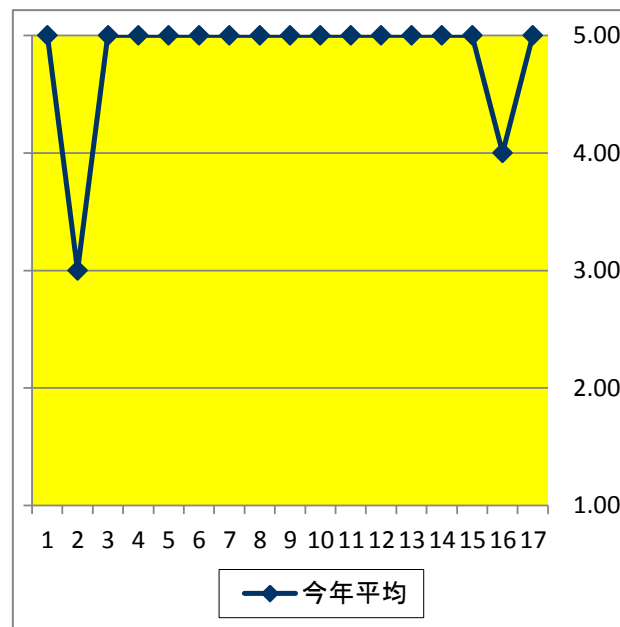
今回の授業に関しては、教員と学生間における対話を中心に組み立てていたが、今後は、そのみならず、学生間における討論も積極的に行われるよう工夫したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回は受講生が一人であったが、一人の場合特有であるが、その学生のレベルや目的に合わせて、完全に学生にマッチした授業を展開することができる。今後は、学生が2人以上となった場合であったとしても、極力学生のレベルや目的に合わせた授業ができるようにしたい。その前提として、今後はもっと多くの受講生に授業に来てもらいたいと思う。

科 目	論文指導・修士論文(基礎)(柴クラス)			
配当年次	1	開講時限	秋火5	
受講者数	1	回答者数	1	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	5.00	5	5	5
15	—	5.00	5	5	5
16	—	4.00	4	4	4
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1			



受講生の傾向

履修者が1名なので、特定の受講者の内容となる。とても熱心で十分に時間をかけて準備をしてくるが、論理的な展開についてはやや弱点もある。そこを毎回指摘しながら、次の報告を誘導していった。これに対して、受講生は真摯に対応している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

論理の展開の弱さが目立つので、そこを気づかせるように、徹底的な質疑を行った。一方、丹念に調べてくるという性格も持ち合わせているので、そこも生かすように毎回課題を与え、漸進的に学習が進むように誘導している。しかし、修士論文を書くために明確な問題意識が必要であるが、そこが足りないので、講義期間一杯までそのことを考え抜くよう指導している。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

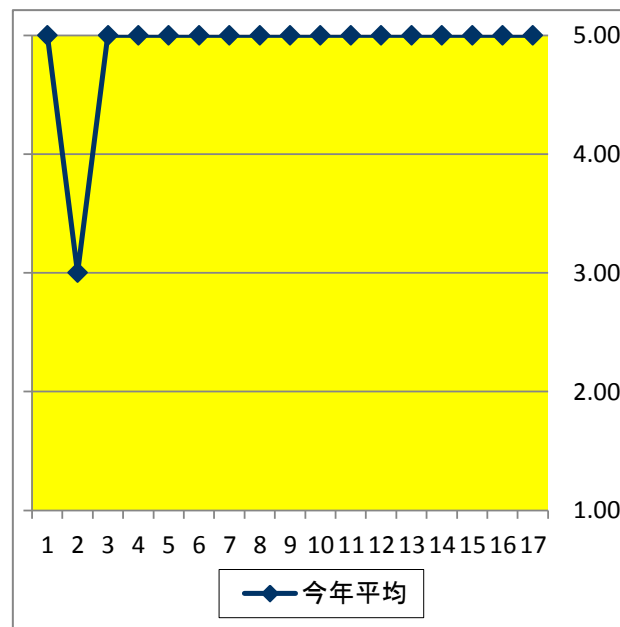
該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

次年度にどのような履修者が来るかわからないが、その人の特性に合わせて、弱点を補強し、論文を本格的に書くための準備をさせたい。

科 目	論文指導・修士論文(基礎)(三島クラス)			
配当年次	1	開講時限	秋金5	
受講者数	1	回答者数	1	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	5.00	5	5	5
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1			



受講生の傾向

もともと「論文指導・修士論文(基礎)」を受講する学生は少ない。今回の授業においても1人が受講しているのみである。授業態度はまじめで、授業に取り組む姿勢も熱心である。また、この授業の最終な目的は修士論文を完成させることにあるため、自らが主体性を持って授業ないし論文作成に取り組む必要があり、そのような授業の趣旨も理解して、受講しているようであった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今回の授業で工夫した点としては、受講生が論文作成をすることが初めてであるということなので、論文作成に関する基本的な事項(資料収集の仕方や執筆の要領など)を丁寧に扱った。そして、早い段階ではあるが、実際に一部を執筆するというのをしてもらった。そうすることで、自らの文章に不完全なところがあることを認識することができるし、それを改めて再度執筆するというのを繰り返すことで、修士論文に耐えうる文章というものはどういうものかということを経験を持って知ってもらうよう心掛けた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

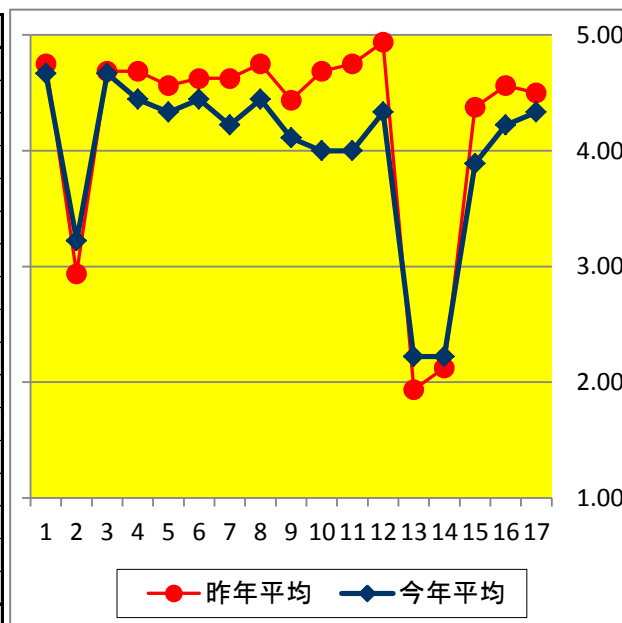
該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

「論文指導・修士論文(基礎)」の授業を終えたが、いまだ基礎にあたる部分のすべてを授業の中で扱えたとは思っていない。もっと文章を書く練習を積み重ねる必要があったし、それらの文章についてもっと細かくチェックできればなおよかったと思う。今後はこれをふまえた指導を行えるようにしたい。

科 目	特殊講義(経営と会計)			
配当年次	1	開講時限	秋月3	
受講者数	10	回答者数	9	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.75	4.67	5	5	3
2	2.94	3.22	3	4	3
3	4.69	4.67	5	5	4
4	4.69	4.44	5	5	3
5	4.56	4.33	4・5	5	3
6	4.63	4.44	4	5	4
7	4.63	4.22	4	5	3
8	4.75	4.44	5	5	2
9	4.44	4.11	5	5	3
10	4.69	4.00	3・4・5	5	3
11	4.75	4.00	4	5	2
12	4.94	4.33	4・5	5	3
13	1.94	2.22	1・3	4	1
14	2.13	2.22	1	4	1
15	4.38	3.89	3	5	3
16	4.56	4.22	4	5	4
17	4.50	4.33	4	5	4
回答者数	16	9			



受講生の傾向

受講生10名中、出席回数15回1名、14回、13回が各3名、12回2名と良好であったが、1名は病気・入院のために出席回数は3回であった。一方、一部の受講者に質問が偏る傾向が見られたことから毎回全員に一言ずつ発言させるように変えた。しかし、問題意識や理解度は数名を除いて不十分であったほか何を質問したらいいか分からないと言う学生もいるなど、授業の質や進度に気を遣わざるを得なかった。また、レポート作成のために昨年から実施した事前テーマ発表はある程度の効果があったと思うが、最終のレポートは一昨年より昨年、今年と年を追うごとに質が低下している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

授業で顕著であった消極性や受身の姿勢、ならびにレポートに見られる理解力・論理性の個人差や努力不足について、全体の底上げの視点から解決を図ることを課題とし、毎回の授業で全員に発言させたり、学生の問題意識や理解度の差に合わせて説明の仕方や進度等を工夫した。また、事前テーマ発表では、質疑応答や私からのコメントに時間をかけて発表者および他の受講者の問題意識の喚起や理解促進を図った。しかしながら、授業評価アンケートの各項目の評価、とりわけ質問15～16に反映しているが、昨年に比べ受講者の興味や理解度を十分に掘り起こすことができなかったことが課題となった。また、最終のレポートについては昨年以上に理解力・論理性の個人差が顕著であり、努力不足も目についた。なお、受講者の半数が特殊講義「海外経営事例研究」を受講しており、両方の授業には共通の傾向が現れている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

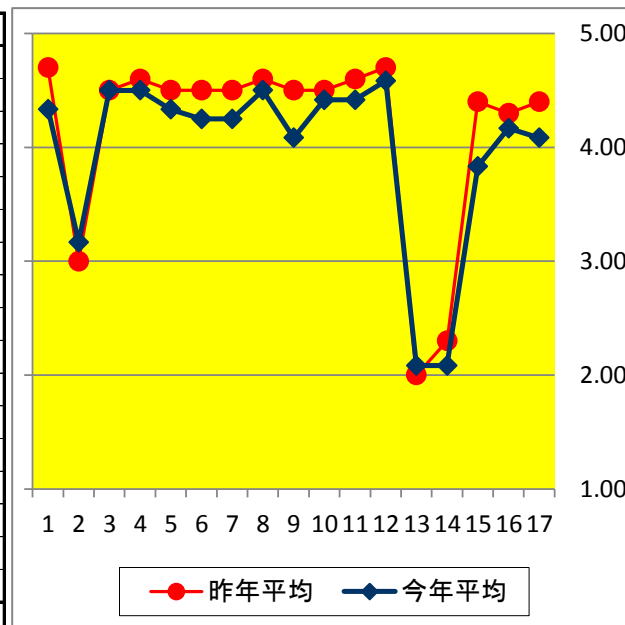
アンケートの結果を見る限りは、進度や授業規模、宿題・小テストや予習に今回の講義で工夫・留意した効果が現れたように思う。一方、授業の質問に見られる消極性や受身の姿勢、ならびにレポートに見られる理解力・論理性の個人差や努力不足について、全体の底上げの視点から解決を図ることを課題としたい。具体的な対応としては、①授業において受講者が質問や意見を述べやすいように、授業内容、進度、質問時間等を工夫すること、②「受講者によるレポートテーマ・構想の発表」の2回の授業内容を充実すること、③授業において比較的早い時期からレポート(自由論題)のテーマ検討を促すこと、などを考えたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

学生の問題意識や理解度の差は今後も変わらないと見込まれることから、授業で取り上げる事例をもう少し絞りこんで、より対話型の授業とし、興味を持たせることで消極性や受身の姿勢を改善し、レポートに現れる理解力・論理性の個人差や努力不足などネガティブな問題点を少しでも克服できるようにしたい。

科 目	特殊講義(海外経営事例研究)		
配当年次	1	開講時限	秋火3
受講者数	13	回答者数	12

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.70	4.33	5	5	3
2	3.00	3.17	3	5	2
3	4.50	4.50	5	5	3
4	4.60	4.50	5	5	3
5	4.50	4.33	5	5	3
6	4.50	4.25	4・5	5	3
7	4.50	4.25	4・5	5	3
8	4.60	4.50	5	5	3
9	4.50	4.08	5	5	2
10	4.50	4.42	5	5	3
11	4.60	4.42	5	5	3
12	4.70	4.58	5	5	2
13	2.00	2.08	1	4	1
14	2.30	2.08	1	4	1
15	4.40	3.83	3・5	5	2
16	4.30	4.17	5	5	3
17	4.40	4.08	5	5	2
回答者数	10	12			



受講生の傾向

受講者1名は途中で受講中止したため、残りの12名中、出席回数は15回、14回、13回が各3名、12回2名、10回1名と全体としては良好であった。一方、一部の受講者に質問が偏る傾向が見られたことから毎回全員に一言ずつ発言させるように変えたが、何を質問したらいいかわからないという学生もいるなど問題意識や理解度には大きな差があり、授業の質や進度に気を遣わざるを得なかった。また、レポート作成のために昨年から実施した事前テーマ発表はある程度の効果があったと思うが、最終のレポートは一昨年より昨年、今年と年を追うごとに質が低下している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

問題意識・理解力・論理性・努力ともに個人差が大きかったことから、授業への興味や意欲を持ってもらうことに注力することで全体の底上げを図ることを課題とし、毎回の授業で全員に発言させたり、学生の問題意識や理解度の差に合わせて説明の仕方や進度等を工夫した。また、事前テーマ発表では、質疑応答や私からのコメントに時間をかけて発表者および他の受講者の問題意識の喚起や理解促進を図った。授業評価アンケートの結果を見る限りある程度の効果はあったように思うが、質問15・17に現れた昨年比の結果は興味や理解度の面で課題を残した。また、最終のレポートでは昨年以上に理解力・論理性の個人差が顕著であり、努力不足も目についた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

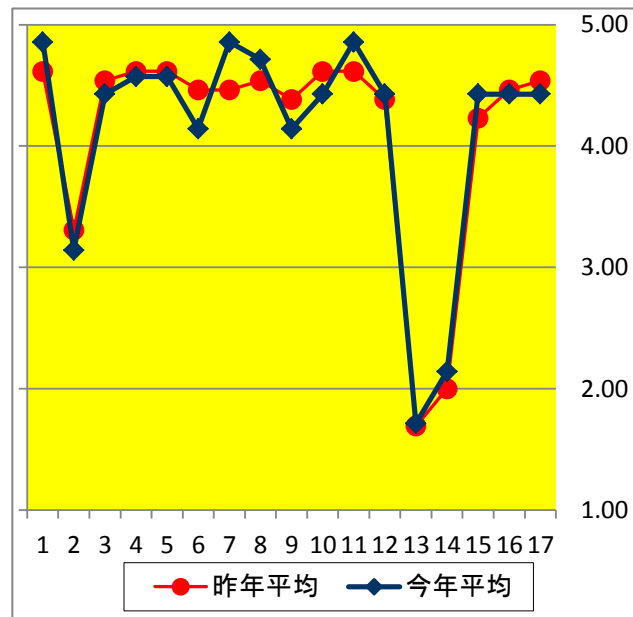
アンケートの結果を見る限りは、進度や授業規模、宿題・小テストに今回の講義で工夫・留意した効果が現れたように思う。一方、レポートに見られるように問題意識・理解力・論理性・努力ともに個人差が大きいことから、授業への興味や意欲を持ってもらうことに注力することで全体の底上げを図りたい。具体的な対応としては、①授業において受講者が質問や意見を述べやすいように、授業内容、進度、質問時間等を工夫すること、②「受講者によるレポートテーマ・構想の発表」の2回の授業内容を充実すること、③授業において比較的早い時期からレポート(自由論題)のテーマ検討を促すこと、などを考えたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

学生の問題意識や理解度の差は今後も変わらないと見込まれる。次年度からは「グローバル化と会計」に本授業の内容の一部が引き継がれるが、より対話型の授業とし、興味を持たせることで消極性や受身の姿勢を改善し、レポートに現れる理解力・論理性の個人差や努力不足などネガティブな問題点を少しでも克服できるようにしたい。

科 目	公共経済学			
配当年次	2	開講時限	秋土4	
受講者数	9	回答者数	7	

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.62	4.86	5	5	4
2	3.31	3.14	3	4	3
3	4.54	4.43	4	5	4
4	4.62	4.57	5	5	4
5	4.62	4.57	5	5	4
6	4.46	4.14	5	5	3
7	4.46	4.86	5	5	4
8	4.54	4.71	5	5	4
9	4.38	4.14	5	5	3
10	4.62	4.43	4	5	4
11	4.62	4.86	5	5	4
12	4.38	4.43	5	5	3
13	1.69	1.71	1	3	1
14	2.00	2.14	2	3	1
15	4.23	4.43	4	5	4
16	4.46	4.43	4	5	4
17	4.54	4.43	4	5	4
回答者数	13	7			



受講生の傾向

受講生はほとんど全員が経済学の基礎知識があり、また経済学に興味を持った学生ばかりであったので、非常に授業は順調であった。また、基礎的な数学の知識も有していたので、図や式を用いて理論的な説明しても良く理解できたと思っている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

前回の授業では、公共経済学の理論的な説明はもちろんのこと、現在の日本や世界で生じている国や地方自治体で発生している事象や問題点を指摘したところ、非常に好評であったので、今回も公共経済学の理論的説明のみならず、日本や世界の国々や地方自治体で生じている問題点を指摘して、その解決方法などについて解説した。特に、税制、社会保障制度の問題は受講生に非常に好評であったと考えている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

公共経済学は、現実的な国や地方自治体の財政問題と、それらの問題を分析する財政学の理論の両方の理解が必要である。従って、今後もその両方の内容の授業を受講生の興味を引き出しながら交互に行う予定である。

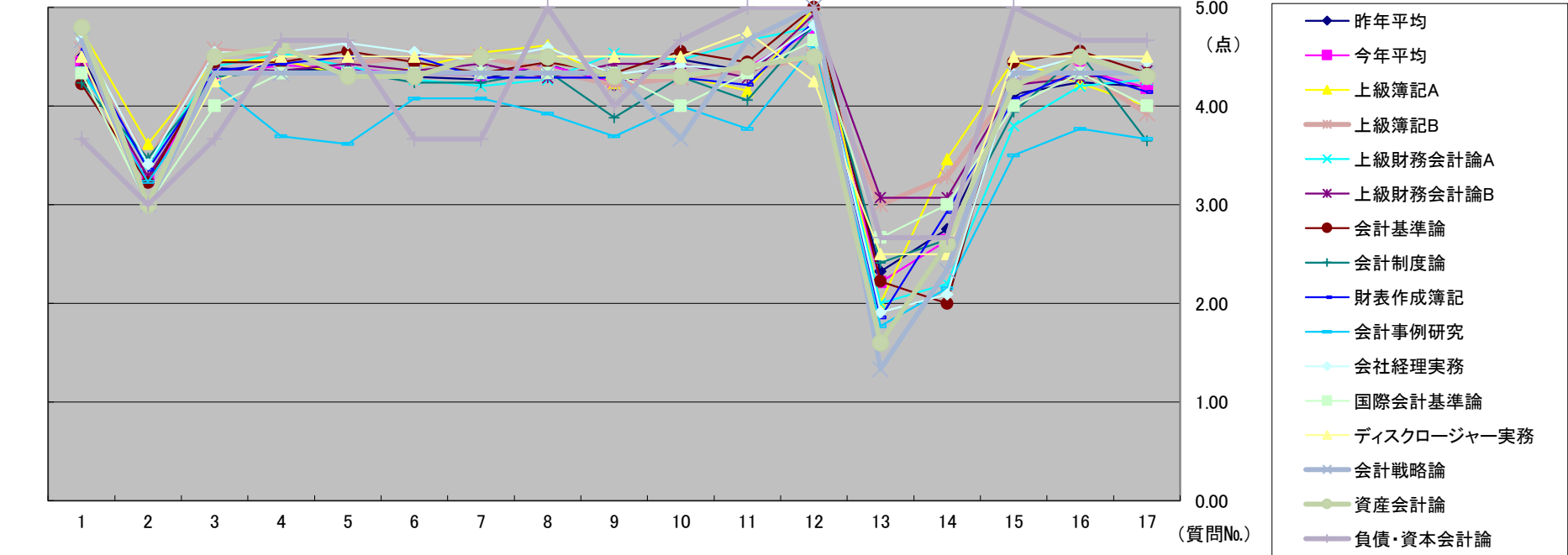
○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度の授業も受講生には好評であったと考えているので、公共経済学の理論的解説とそれと同時に国や地方自治体の問題点を並行して講義して行きたいと思っている。特に消費税の引き上げもあったことから税制についてと、少子高齢化による社会保障制度の問題を今後の授業の一つの柱として講義して行きたいと考えている。

Ⅱ－(3)．2014 年度授業評価アンケート(系平均)結果概要

系： 財務会計
受講者数 173 回答者数 154

質問No.	昨年平均	今年平均	上級簿記A	上級簿記B	上級財務会計論A	上級財務会計論B	会計基準論	会計制度論	財表作成簿記	会計事例研究	会社経理実務	国際会計基準論	ディスクロージャー実務	会計戦略論	資産会計論	負債・資本金論
1	4.50	4.44	4.77	4.57	4.33	4.43	4.22	4.24	4.57	4.38	4.68	4.33	4.50	4.67	4.80	3.67
2	3.26	3.24	3.62	3.43	3.40	3.29	3.22	3.47	3.36	3.23	3.41	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00
3	4.38	4.32	4.46	4.57	4.40	4.36	4.44	4.29	4.36	4.23	4.55	4.00	4.25	4.33	4.50	3.67
4	4.36	4.41	4.46	4.50	4.53	4.36	4.44	4.35	4.43	3.69	4.55	4.33	4.50	4.33	4.60	4.67
5	4.39	4.38	4.31	4.43	4.40	4.43	4.56	4.35	4.50	3.62	4.64	4.33	4.50	4.33	4.30	4.67
6	4.29	4.32	4.38	4.50	4.27	4.36	4.44	4.24	4.50	4.08	4.55	4.33	4.50	4.33	4.30	3.67
7	4.27	4.31	4.54	4.50	4.20	4.43	4.33	4.24	4.29	4.08	4.45	4.33	4.50	4.33	4.50	3.67
8	4.42	4.41	4.62	4.36	4.27	4.29	4.44	4.35	4.29	3.92	4.59	4.33	4.50	4.33	4.50	5.00
9	4.21	4.24	4.23	4.21	4.53	4.43	4.33	3.88	4.29	3.69	4.32	4.33	4.50	4.33	4.30	4.00
10	4.47	4.30	4.31	4.29	4.47	4.43	4.56	4.29	4.29	4.00	4.41	4.00	4.50	3.67	4.30	4.67
11	4.35	4.39	4.15	4.36	4.67	4.29	4.44	4.06	4.21	3.77	4.36	4.33	4.75	4.67	4.40	5.00
12	4.80	4.77	5.00	4.50	4.80	4.93	5.00	4.82	4.86	4.62	4.82	4.67	4.25	5.00	4.50	5.00
13	2.32	2.21	2.00	3.00	2.00	3.07	2.22	2.41	1.86	1.77	1.91	2.67	2.50	1.33	1.60	2.67
14	2.75	2.64	3.46	3.29	2.20	3.07	2.00	2.65	2.93	2.15	2.09	3.00	2.50	2.33	2.60	2.67
15	4.12	4.21	4.46	4.21	3.80	4.21	4.44	3.94	4.07	3.50	4.32	4.00	4.50	4.33	4.20	5.00
16	4.24	4.37	4.23	4.36	4.20	4.29	4.56	4.53	4.36	3.77	4.50	4.33	4.50	4.33	4.50	4.67
17	4.20	4.19	4.00	3.92	4.27	4.36	4.33	3.65	4.14	3.67	4.45	4.00	4.50	4.33	4.30	4.67
回答者数	152	154	13	14	15	14	9	17	14	13	22	3	4	3	10	3



受講生の傾向

系の平均として、学生は授業におおむね満足し(質問No.11の4.35)、80%以上出席(質問No.12の4.81)している反面、予習や復習にはあまり時間をかけていない。しかし、それでも、授業に触発されたといい、職業会計人に必要な知識が高まったといい、授業をおおむね理解しているという(質問No.15～17)。ところが、個々の科目において、授業への取り組みのほぼすべての項目で意欲的でない科目がある(会計事例研究)。受講生の動向は昨年とほとんど変わらない。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年と同様の指摘となる。科目特性があるので、科目の担当者自身による記述を参照されたい。相対的に低評価の基礎的、理論的科目の「今後の対応」を注意されたい。また、今後の対応(工夫や留意した点)が、受講生のニーズに応えているのかや学習効果を向上させるものであるかなどの点も、注意されたい。しかしながら、「授業の評価」のほとんどの項目について最も低い評価が特定の1科目(会計事例研究)に集中しているのが気になる。この科目で工夫されたと書かれた内容の効果が出ていないのが残念である。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

会計事例研究についてはFDにおいて問題の所在と改善の方法を検討された方が良いでしょう。項目によって低い評価が気になる上級簿記A、上級財務会計論A、上級財務会計論B、会計制度論、会計戦略論については、同一担当者の異なる科目で高い評価になっているので、これら科目で低評価になった理由はそれぞれの担当者が考察されれば良いと思われる。一方、相対的に高い評価を得た上級簿記B、上級財務会計論B、ディスクロージャー実務、負債・資本金論はいずれも回答数が10未満であることから、受講者の人数と評価の関係を検討してみる価値がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

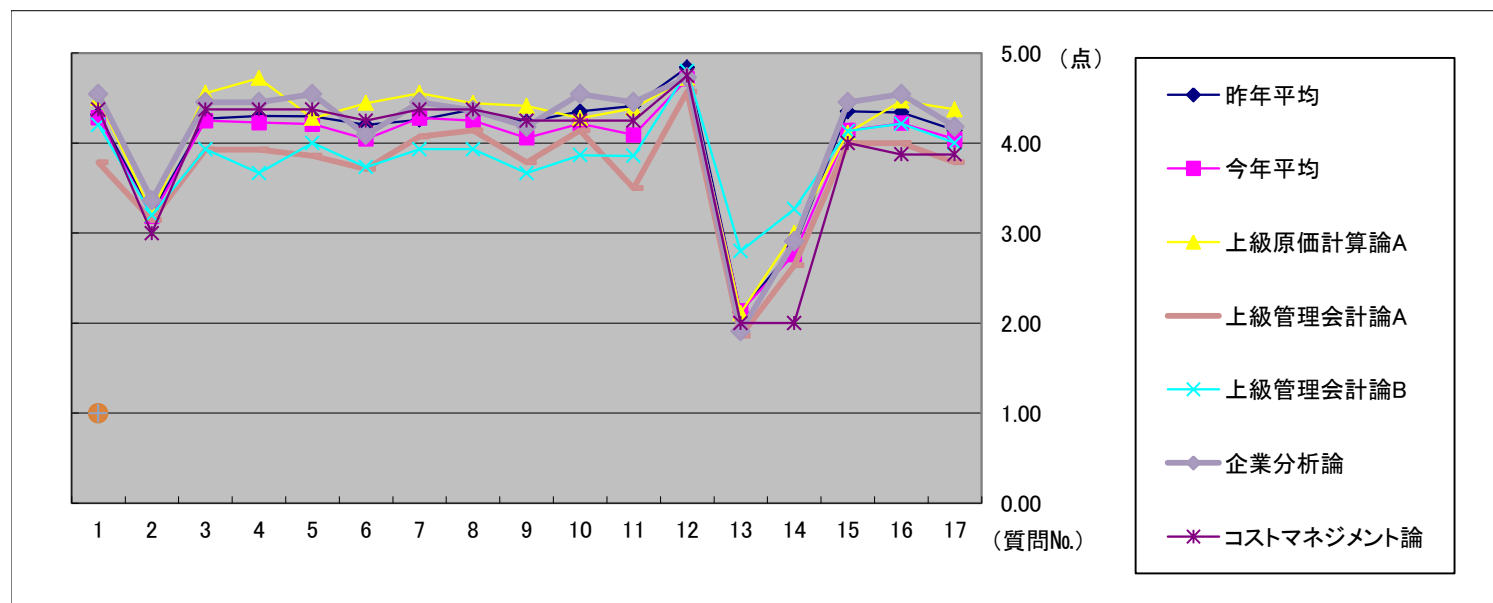
会計事例研究については3年目にやや評価が上がっている。この科目の次年度担当の新規教員に初年度・2年目の対応などをFD委員会から伝える方が良いでしょう。また、項目によって低い評価が気になる上級簿記A、上級財務会計論A、会計制度論、会計経理実務については、同一担当者の異なる科目で高い評価になっているので、これら科目で低評価になった理由はそれぞれの担当者が考察されれば良いと思われる。一方、相対的に高い評価を得た上級簿記B、国際会計基準論、ディスクロージャー実務、会計戦略論、負債・資本金論はいずれも回答数が10未満であることから、受講者の人数と評価の関係を検討してみる価値がある。

系： 管理会計

受講者数： 83

回答者数： 66

質問No.	昨年平均	今年平均	上級原価計算論A	上級管理会計論A	上級管理会計論B	企業分析論	コストマネジメント論
1	4.32	4.28	4.50	3.79	4.20	4.55	4.38
2	3.22	3.19	3.22	3.14	3.20	3.36	3.00
3	4.27	4.25	4.56	3.93	3.93	4.45	4.38
4	4.30	4.23	4.72	3.93	3.67	4.45	4.38
5	4.30	4.21	4.28	3.86	4.00	4.55	4.38
6	4.20	4.05	4.44	3.71	3.73	4.09	4.25
7	4.26	4.28	4.56	4.07	3.93	4.45	4.38
8	4.37	4.25	4.44	4.14	3.93	4.36	4.38
9	4.23	4.06	4.41	3.79	3.67	4.18	4.25
10	4.35	4.22	4.28	4.14	3.87	4.55	4.25
11	4.41	4.09	4.39	3.50	3.86	4.45	4.25
12	4.84	4.71	4.72	4.57	4.80	4.73	4.75
13	2.12	2.14	2.11	1.86	2.80	1.91	2.00
14	2.85	2.76	3.00	2.64	3.27	2.91	2.00
15	4.35	4.14	4.11	4.00	4.13	4.45	4.00
16	4.34	4.22	4.47	4.00	4.21	4.55	3.88
17	4.14	4.04	4.38	3.79	4.00	4.18	3.88
回答者数	85	66	18	14	15	11	8



受講生の傾向

アンケートの結果数値を見る限りでは、昨年度とは大きく変わらないように見える。しかしながら、担当者としての感触としては、受講生の知識水準および受講態度についての2極化が進行していると思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は、全体的には高い評価を得ていたため、今回の講義では、高い評価を得た部分を維持できるように留意した。それとともに、個別の受講者に対して細かな対応を行えるように心がけた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今後も、担当者間での意見交換を行い、科目間の垣根を越えた現状の把握を行っていきたい。また、授業中に利用する問題やテーマについての意見交換も併せて実施していくことを計画している。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

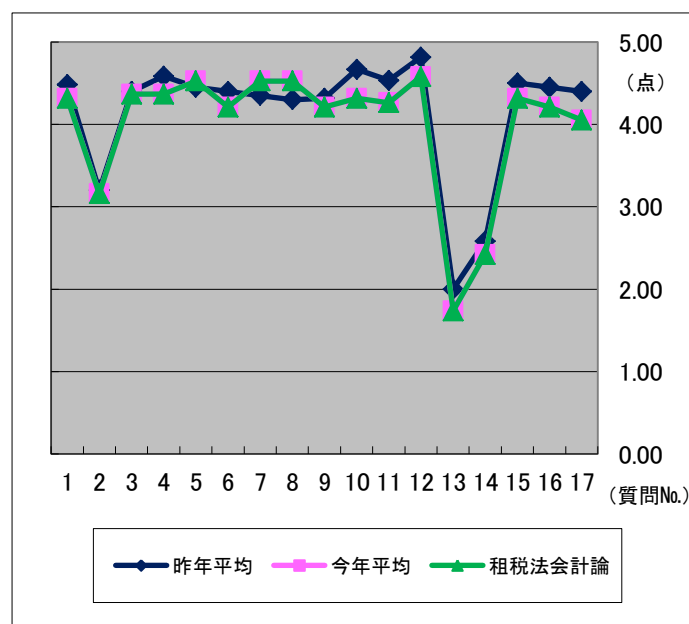
授業中に利用する問題やテーマなどの意見交換については効果があったため、今後も進める予定である。また、受講者の全体像に関する動向の把握を通じて、適切な講義および演習の指導ができるように改善を進めたい。

系： 税務会計

受講者数： 22

回答者数： 19

質問No.	昨年平均	今年平均	租税法会計論
1	4.48	4.32	4.32
2	3.20	3.16	3.16
3	4.40	4.37	4.37
4	4.58	4.37	4.37
5	4.45	4.53	4.53
6	4.40	4.21	4.21
7	4.35	4.53	4.53
8	4.30	4.53	4.53
9	4.32	4.21	4.21
10	4.67	4.32	4.32
11	4.53	4.26	4.26
12	4.82	4.58	4.58
13	2.00	1.74	1.74
14	2.58	2.42	2.42
15	4.50	4.32	4.32
16	4.45	4.21	4.21
17	4.40	4.05	4.05
回答者数	16	19	19



受講生の傾向

今年度は昨年度に比べ受講者数が倍増したが、その大半は昨年度と異なり、税務会計の初学者であった。しかし、質問NO. 13と14のデータから、今年度の受講生は、昨年度に比べて予習と復習にあまり時間をかけていなかった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度に引き続いて、「上級税務会計論」と「租税法会計論」の連動、かつ、役割分担の方法を継続した。中間試験も受講生の学習モチベーションの維持、向上のため継続して実施した。なお、到達度を確認するための小テストは、時間の関係上、実施できなかった。また、受講生への情報提供については、従前は講義内資料配布のみであったが、今年度は新たにインフォメーションシステムによる情報提供を実施した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今年度を実施した「上級税務会計論」と「租税法会計論」の連動、かつ、役割分担の方法を継続する。中間試験も受講生の学習モチベーションの維持、向上のため継続して実施する。また、中間試験以外にも到達度を確認するための小テストを追加実施することも検討したい。

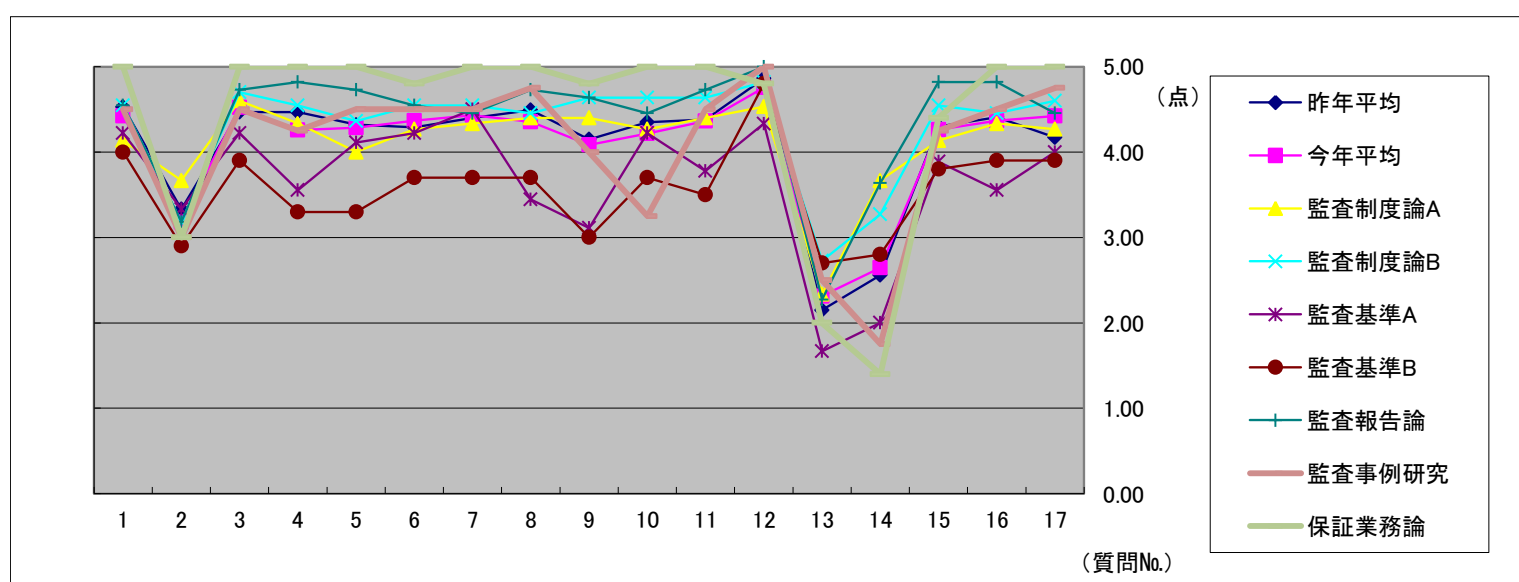
○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

「上級税務会計論」と「租税法会計論」の連動、定期試験と中間試験の併用は一定の効果があり、次年度も継続する。なお、受講生に税務会計の勉強時間を増やすよう誘導すべく、追加の小テストも実施したい。

系： 監査
受講者数：75

回答者数：65

質問No.	昨年平均	今年平均	監査制度論A	監査制度論B	監査基準A	監査基準B	監査報告論	監査事例研究	保証業務論
1	4.53	4.42	4.13	4.55	4.22	4.00	4.55	4.50	5.00
2	3.33	3.18	3.67	3.18	3.33	2.90	3.18	3.00	3.00
3	4.47	4.52	4.60	4.70	4.22	3.90	4.73	4.50	5.00
4	4.47	4.26	4.33	4.55	3.56	3.30	4.82	4.25	5.00
5	4.32	4.29	4.00	4.36	4.11	3.30	4.73	4.50	5.00
6	4.29	4.37	4.27	4.55	4.22	3.70	4.55	4.50	4.80
7	4.40	4.43	4.33	4.55	4.50	3.70	4.45	4.50	5.00
8	4.49	4.35	4.40	4.45	3.44	3.70	4.73	4.75	5.00
9	4.15	4.08	4.40	4.64	3.11	3.00	4.64	4.00	4.80
10	4.35	4.22	4.27	4.64	4.22	3.70	4.45	3.25	5.00
11	4.38	4.36	4.40	4.64	3.78	3.50	4.73	4.50	5.00
12	4.86	4.75	4.53	4.82	4.33	4.80	5.00	5.00	4.80
13	2.15	2.31	2.33	2.73	1.67	2.70	2.27	2.50	2.00
14	2.56	2.65	3.67	3.27	2.00	2.80	3.64	1.75	1.40
15	4.30	4.26	4.13	4.55	3.89	3.80	4.82	4.25	4.40
16	4.41	4.37	4.33	4.45	3.56	3.90	4.82	4.50	5.00
17	4.17	4.42	4.27	4.60	4.00	3.90	4.45	4.75	5.00
回答者数	59	65	15	11	9	10	11	4	5



受講生の傾向

受講生の出席状況(項目12)は、ほぼ80～100%を確保しており、「監査制度」及び「監査基準」という基本科目(必修科目)以外の科目でも、受講生の参加意欲は全体的に高かったと評価できる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義に際して必要な資料を用意・配布するとともに、学生のモラルを向上させるための措置を、全ての科目で講じており、これは2014年度版「出講の手引き」に沿った講義方式といえる。また2つの基本科目以外は発展科目および応用科目であるため、「監査事例研究」をはじめとして学生によるケース・スタディやプレゼンテーションとディスカッションで行なわれている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今年度よりコース制を導入したことから、監査系科目を選択する学生数が減少している。このため昨年度の履修登録者数の減少は続いているため、毎回の発表やディスカッションなどの形態を取り入れることで少ない履修者でも出席率を高める措置を講じる必要がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

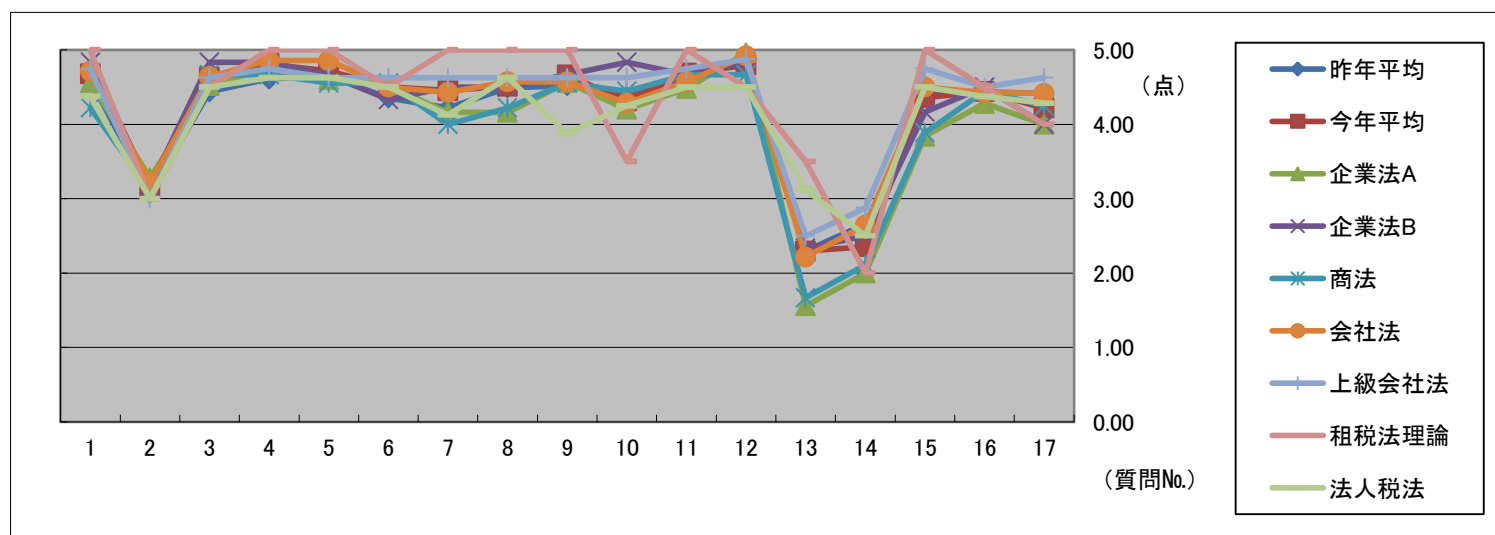
出席率を高める措置として出席確認を取る方法を採用する科目もあるが、形式的な出席確認では学生の参加意欲やモラルを高めることには繋がらないため、小テストや課題の実施・添削・返却といった学生の側にも自らの授業参加によって得られた成果が適時に判るような対応が理論科目・実践科目にかかわらず教員には必要である。

系： 法律

受講者数： 88

回答者数： 73

質問No.	昨年平均	今年平均	企業法A	企業法B	商法	会社法	上級会社法	租税法理論	法人税法
1	4.60	4.68	4.56	4.83	4.22	4.71	4.75	5.00	4.38
2	3.07	3.13	3.28	3.17	3.11	3.21	3.00	3.00	3.00
3	4.44	4.63	4.52	4.83	4.67	4.64	4.63	4.50	4.50
4	4.61	4.81	4.76	4.83	4.67	4.86	4.75	5.00	4.63
5	4.65	4.72	4.60	4.67	4.56	4.86	4.63	5.00	4.63
6	4.36	4.51	4.52	4.33	4.56	4.50	4.63	4.50	4.50
7	4.22	4.45	4.16	4.50	4.00	4.43	4.63	5.00	4.13
8	4.49	4.51	4.16	4.50	4.22	4.57	4.63	5.00	4.63
9	4.52	4.66	4.56	4.67	4.56	4.57	4.63	5.00	3.88
10	4.38	4.31	4.20	4.83	4.44	4.29	4.63	3.50	4.25
11	4.59	4.69	4.48	4.67	4.67	4.57	4.75	5.00	4.50
12	4.89	4.79	4.96	4.83	4.67	4.92	4.88	4.50	4.50
13	2.30	2.30	1.56	2.33	1.67	2.21	2.50	3.50	3.13
14	2.66	2.35	2.00	2.50	2.11	2.64	2.88	2.00	2.50
15	4.39	4.36	3.84	4.17	3.89	4.50	4.75	5.00	4.50
16	4.43	4.44	4.28	4.50	4.44	4.43	4.50	4.50	4.38
17	4.42	4.22	4.00	4.00	4.25	4.42	4.63	4.00	4.29
回答者数	70	73	26	6	9	14	8	2	8



受講生の傾向

今年度の受講者数は昨年度に比べ、若干ではあるが増加した。入学者も特に増加したわけではないが、法律系の科目が公認会計士試験等に必要であったり、また、学問的興味の対象になったのではないかと推測される。しかしながら、法律系の科目はアンケート対象となっている科目はすべてにおいて公認会計士試験の対象科目となっており、また会計自身も法的制度の上に成り立っていることからするならば、もう少し履修者が増えてもよいと考える。なお、これら法律系科目を受講している学生はおおむねまじめに学習に取り組んでいる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度においては特に法律系科目間の相互の連携を考慮した。それぞれの法律系の科目は密接につながっている。たとえば、「企業法」と「会社法」と「上級会社法」や「租税法理論」と「法人税法」はそれぞれが範囲やレベルをそれぞれに委ねるといった形で密接につながっている。これらを連携させて授業を行い、かつ学生に対して相互に関連させて理解させることによって、法律系科目全体を把握することができるし、そのような学習方法の方がより効率よく体系的に学習することができる。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

法律系の理論科目は、公認会計士試験を目指す学生以外はあまり履修しない傾向にあるが、たとえ、一般企業への就職等を考えている学生にとっても、会社法や税法などを学ぶことそのものが企業等で役立つのみならず、法的な思考能力（リーガルマインド）を養うことは、どのようなシチュエーションで社会生活を営む場合でも有益である。このことから、早い段階（企業法等）で、学生に法学に苦手意識を持たせず、かつ興味を持ってもらい、2年次においても引き続き法律科目を履修するような授業を行う必要がある。

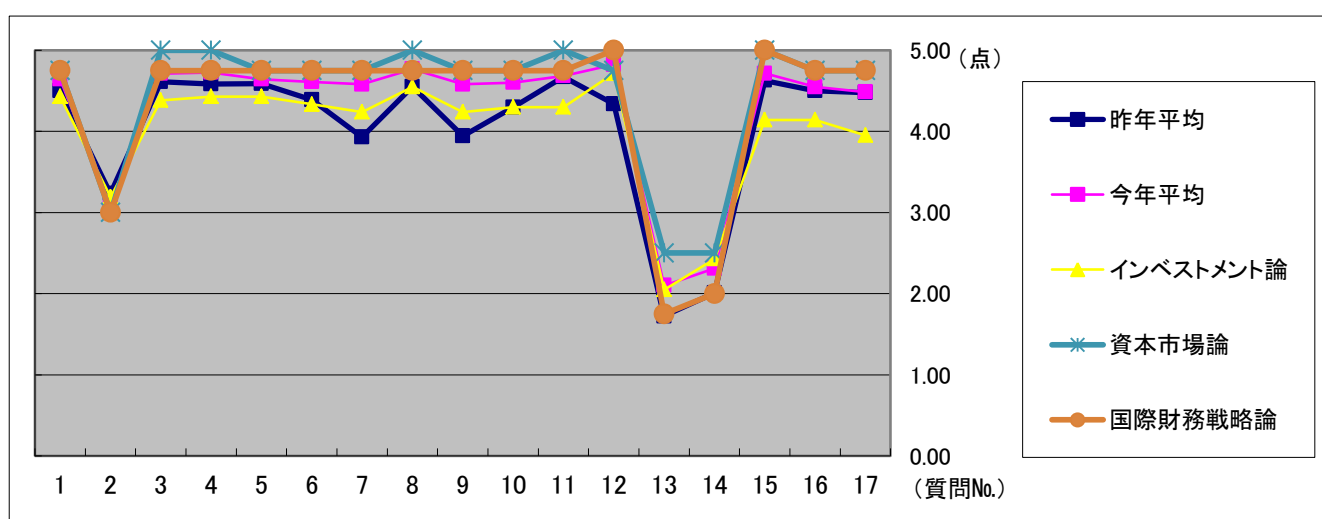
○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

法律系科目全体として、学生から受ける印象の一つに、法律系科目を暗記科目としてとらえる側面があるように思う。むしろ法律系科目には論理的な思考能力を養成するという目的の方が強くあり、論理的に物事を考えることができ、かつそこから得られる知識であるからこそ、結果として得た知識を忘れたくないものとするのであり、そこで、今後は法律系科目の論理的な思考能力の養成をより強調して、教育を行えるよう工夫していきたい。

系： ファイナンス
 受講者数：31 回答者数：29

質問No.	昨年平均	今年平均	インベストメント論	コーポレート・ファイナンス論	資本市場論	国際財務戦略論
1	4.50	4.64	4.43	—	4.75	4.75
2	3.23	3.06	3.19	—	3.00	3.00
3	4.61	4.71	4.38	—	5.00	4.75
4	4.58	4.73	4.43	—	5.00	4.75
5	4.59	4.64	4.43	—	4.75	4.75
6	4.39	4.61	4.33	—	4.75	4.75
7	3.93	4.58	4.24	—	4.75	4.75
8	4.55	4.77	4.55	—	5.00	4.75
9	3.94	4.58	4.24	—	4.75	4.75
10	4.29	4.60	4.30	—	4.75	4.75
11	4.67	4.68	4.30	—	5.00	4.75
12	4.34	4.82	4.71	—	4.75	5.00
13	1.72	2.10	2.05	—	2.50	1.75
14	2.01	2.31	2.43	—	2.50	2.00
15	4.63	4.71	4.14	—	5.00	5.00
16	4.50	4.55	4.14	—	4.75	4.75
17	4.48	4.48	3.95	—	4.75	4.75
回答者数	24	29	21	—	4	4

※コーポレート・ファイナンス論は、諸事情により未実施



受講生の傾向

受講生は、まじめに取り組む学生が多かった。しかし、一部に意欲の低い学生や登録だけして授業には来なかった学生がいて、両極端に分かれる傾向がある。一般的に、数学を用いたり、経済学的なアプローチを行う等、抽象的な議論について、あまり興味を示さないようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

基本的に、前年度のやり方を踏襲し、時事問題を取り入れる等を行い、抽象的な議論に陥りがちなファイナンスを解りやすく解説した。さらに、一部の授業では、公認会計士論文式試験を意識して講義を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

昨年度と同様、抽象的な議論をできる限り身近な事例で説明する等、学生が興味を持つような授業を行う。さらに、証券アナリストの基礎講座受講を勧めて、成功体験を持たせて、ファイナンスや数学等に対する苦手意識を払拭するようにする。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度と同様、抽象的な議論をできる限り身近な事例で説明する等、学生が興味を持つような授業を行う。ファイナンス自体への高い興味を持つ学生もあり、将来のCFO養成のための授業も取り入れる。

系： 行政

受講者数： 4

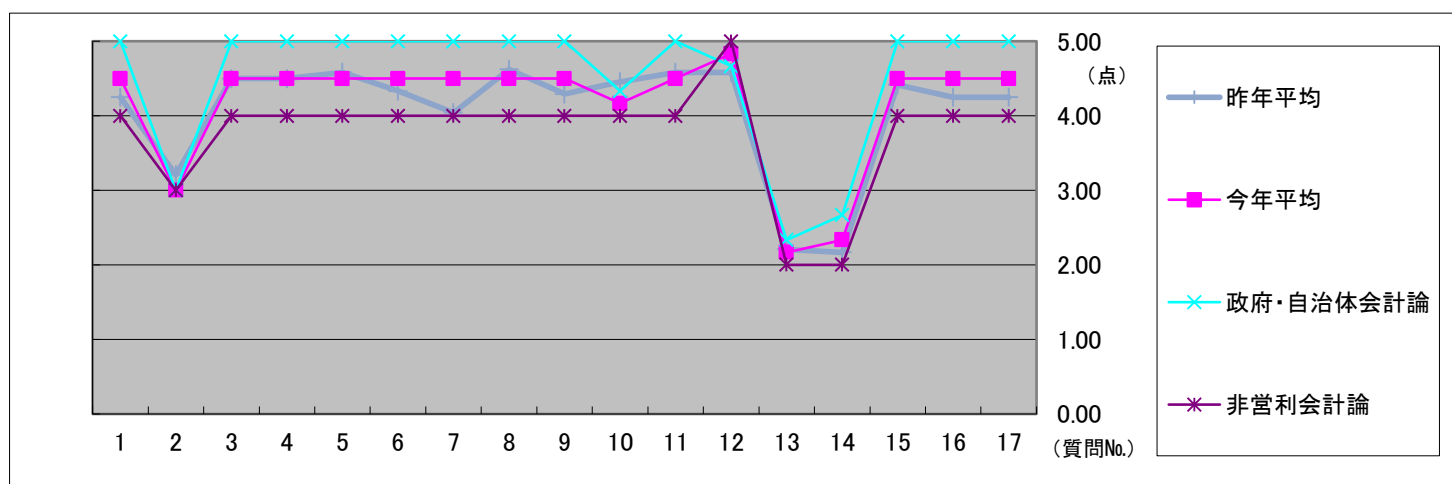
回答者数：

4

質問No.	昨年平均	今年平均	公会計理論	政府・自治体会計論	非営利会計論	国際公会計制度論
1	4.25	4.50	－	5.00	4.00	－
2	3.21	3.00	－	3.00	3.00	－
3	4.50	4.50	－	5.00	4.00	－
4	4.50	4.50	－	5.00	4.00	－
5	4.58	4.50	－	5.00	4.00	－
6	4.33	4.50	－	5.00	4.00	－
7	4.04	4.50	－	5.00	4.00	－
8	4.63	4.50	－	5.00	4.00	－
9	4.29	4.50	－	5.00	4.00	－
10	4.46	4.17	－	4.33	4.00	－
11	4.58	4.50	－	5.00	4.00	－
12	4.58	4.83	－	4.67	5.00	－
13	2.21	2.17	－	2.33	2.00	－
14	2.17	2.33	－	2.67	2.00	－
15	4.42	4.50	－	5.00	4.00	－
16	4.25	4.50	－	5.00	4.00	－
17	4.25	4.50	－	5.00	4.00	－
回答者数	13	4	－	3	1	－

※国際公会計制度論はH26年度は履O不開講

※公会計理論は諸事情により未実施



受講生の傾向

各科目及び系平均としても昨年平均と同様の傾向を示している。授業内容については、概ね満足度が高いものの予習・復習に時間をあまり割いていないという結果になっている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

いずれもごく少人数のクラスであるため、受講生各人に対して、昨年検討した「今後の対応」に従い、予習復習の指導、プレゼン・発表等の機会を充実させた。アンケート結果には顕著な変化は見られなかったが、双方向の講義に近くなったように感じている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

引き続き、受講生の満足度を維持するとともに、積極的に授業に参加させる工夫をする。担当の割り当てによる予習復習の義務付け、プレゼン・発表等の機会を充実させていくよう検討していく。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

行政系に関心のある受講生（公務員志望等）や、公会計に関心のある受講生等、各人の関心に応じて、タイムリーな話題を提供し、考えさせ、発表する機会をより充実させる方針である。また1回で理解できないような複雑な内容については、予習・復習の指導を丁寧に行う予定である。

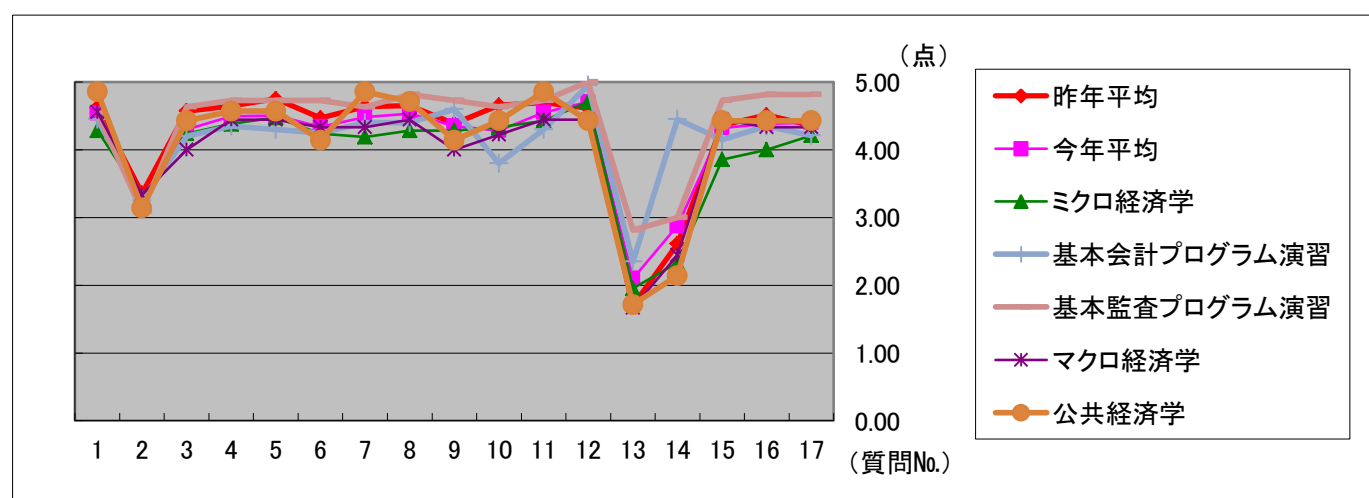
系： 経済・IT

受講者数： 83

回答者数： 72

質問No.	昨年平均	今年平均	ミクロ経済学	基本会計プログラム演習	基本監査プログラム演習	統計学	マクロ経済学	公共経済学
1	4.62	4.54	4.29	4.45	4.55	—	4.56	4.86
2	3.36	3.22	3.29	3.25	3.09	—	3.33	3.14
3	4.57	4.30	4.24	4.20	4.64	—	4.00	4.43
4	4.65	4.49	4.38	4.35	4.73	—	4.44	4.57
5	4.75	4.50	4.48	4.30	4.73	—	4.44	4.57
6	4.47	4.34	4.24	4.25	4.73	—	4.33	4.14
7	4.64	4.48	4.19	4.40	4.64	—	4.33	4.86
8	4.65	4.53	4.29	4.40	4.82	—	4.44	4.71
9	4.39	4.35	4.29	4.60	4.73	—	4.00	4.14
10	4.66	4.28	4.33	3.80	4.64	—	4.22	4.43
11	4.70	4.55	4.43	4.30	4.73	—	4.44	4.86
12	4.61	4.71	4.71	4.95	5.00	—	4.44	4.43
13	1.69	2.10	1.95	2.35	2.82	—	1.67	1.71
14	2.61	2.87	2.33	4.45	3.00	—	2.44	2.14
15	4.36	4.32	3.86	4.15	4.73	—	4.44	4.43
16	4.51	4.39	4.00	4.35	4.82	—	4.33	4.43
17	4.36	4.40	4.21	4.21	4.82	—	4.33	4.43
回答者数	55	72	21	20	11	—	13	7

※統計学は諸事情により未実施



受講生の傾向

出席率を基準にみると、各科目受講生は一部を除き熱心に受講していたようである。経済系の科目においては、積み上げ的学习も踏まえた学生がほとんどのようで、応用への展開も問題なさそうである。一方、IT系については、会計・監査に関する学習意欲に比して、昨年同様にコンピュータ処理への苦手意識が大きい学生に比率が多いようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

各回の講義および講義全体の進捗度をコントロールし、各回の内容の組み立てを工夫することで、非会計系科目（ここでは経済・IT系）での内容理解を深めることに、各科目では工夫されている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

「今回の講義で工夫したこと・留意したこと」で、十分な効果があったものは、そのまま継続することとする。また、十分な効果が得られたとは、必ずしも言い切れない点については、より積極的に受講生が学習できるよう、議論を活性化させる、基礎的な部分の内容に重点を置く、進捗速度と講義内容のバランスをとるなどの工夫を講じたいと考える。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

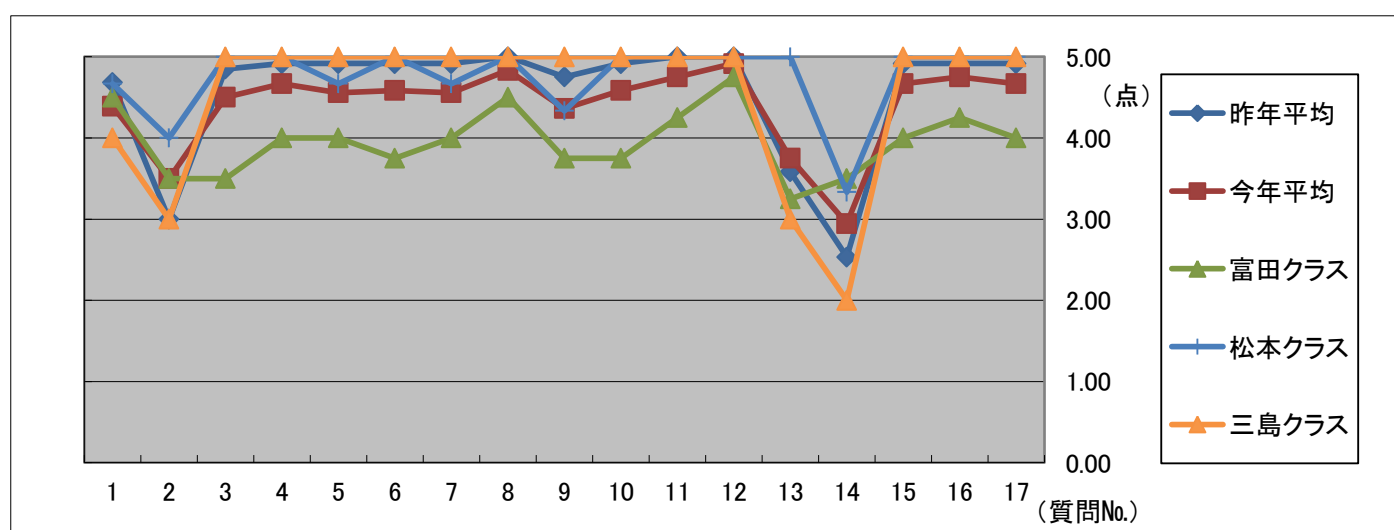
各科目、受講生の緊張感を維持しつつ、関心を高め、ひとつひとつ理解を深めるよう工夫を講じるとされている。また、科目間で意見交換をしつつ、受講生の理解を深める工夫を検討したい。

系:個別演習科目(ソリューション・イン・アカデミック)

受講者数: 8

回答者数: 8

質問No.	昨年平均	今年平均	富田クラス	松本クラス	三島クラス
1	4.68	4.39	4.50	4.67	4.00
2	3.00	3.50	3.50	4.00	3.00
3	4.85	4.50	3.50	5.00	5.00
4	4.92	4.67	4.00	5.00	5.00
5	4.92	4.56	4.00	4.67	5.00
6	4.92	4.58	3.75	5.00	5.00
7	4.92	4.56	4.00	4.67	5.00
8	5.00	4.83	4.50	5.00	5.00
9	4.75	4.36	3.75	4.33	5.00
10	4.92	4.58	3.75	5.00	5.00
11	5.00	4.75	4.25	5.00	5.00
12	5.00	4.92	4.75	5.00	5.00
13	3.58	3.75	3.25	5.00	3.00
14	2.53	2.94	3.50	3.33	2.00
15	4.92	4.67	4.00	5.00	5.00
16	4.92	4.75	4.25	5.00	5.00
17	4.92	4.67	4.00	5.00	5.00
回答者数	11	8	4	3	1



受講生の傾向

全般的に受講生は、出席率もよく、課題への取組、ディスカッション等において積極的な姿勢が見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

項目13、14(予・復習)の評点が少なかったことから、課題の前振り等時間外での取組を求める工夫がなされた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

到達目標は、全てのクラスで同じであるため、昨年度に引き続き学生に当該目標と検討素材との関係を常に意識させる必要がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

少人数であるため、受講生のニーズに合った授業の構成、ディスカッション等を有効に進めていくための課題の出し方等において担当者の工夫を求めている。

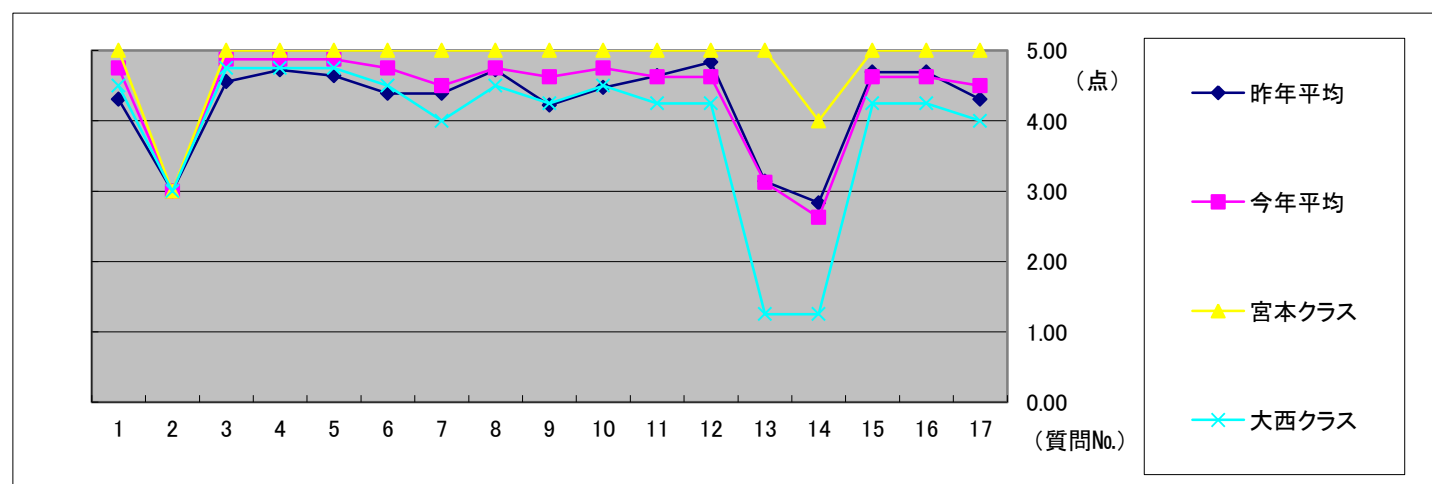
系:個別演習科目(ソリューション・イン・プロフェッショナル)

受講者数: 5

回答者数:

5

質問No.	昨年平均	今年平均	宮本クラス	大西クラス
1	4.31	4.75	5.00	4.50
2	3.00	3.00	3.00	3.00
3	4.56	4.88	5.00	4.75
4	4.72	4.88	5.00	4.75
5	4.64	4.88	5.00	4.75
6	4.39	4.75	5.00	4.50
7	4.39	4.50	5.00	4.00
8	4.72	4.75	5.00	4.50
9	4.22	4.63	5.00	4.25
10	4.47	4.75	5.00	4.50
11	4.64	4.63	5.00	4.25
12	4.83	4.63	5.00	4.25
13	3.14	3.13	5.00	1.25
14	2.83	2.63	4.00	1.25
15	4.69	4.63	5.00	4.25
16	4.69	4.63	5.00	4.25
17	4.31	4.50	5.00	4.00
回答者数	12	5	1	4



受講生の傾向

受講生数は昨年よりさらに減少した。一方評価結果平均はほぼ昨年と同様の点数となっている。窺われることは、全般的に満足度が高いものの、予習復習等時間外の取組が全般的に低く、クラスによっては極端に低いことである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

資格試験対応、受講生各人のレベルに合わせた課題の割り当て等、受講生に前向きに取り組ませる努力が行われた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

当初の想定と異なり、個別演習を履修する受講生の数が極めて少なくなっている。今年度導入したコース制のもとでも、もしこのままの状況が続くのであれば、演習自体の存在意義も損なわれ、授業評価それ自体の信頼性にも影響することから、演習制度の必要性を学生に認識させる措置を講じる必要がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

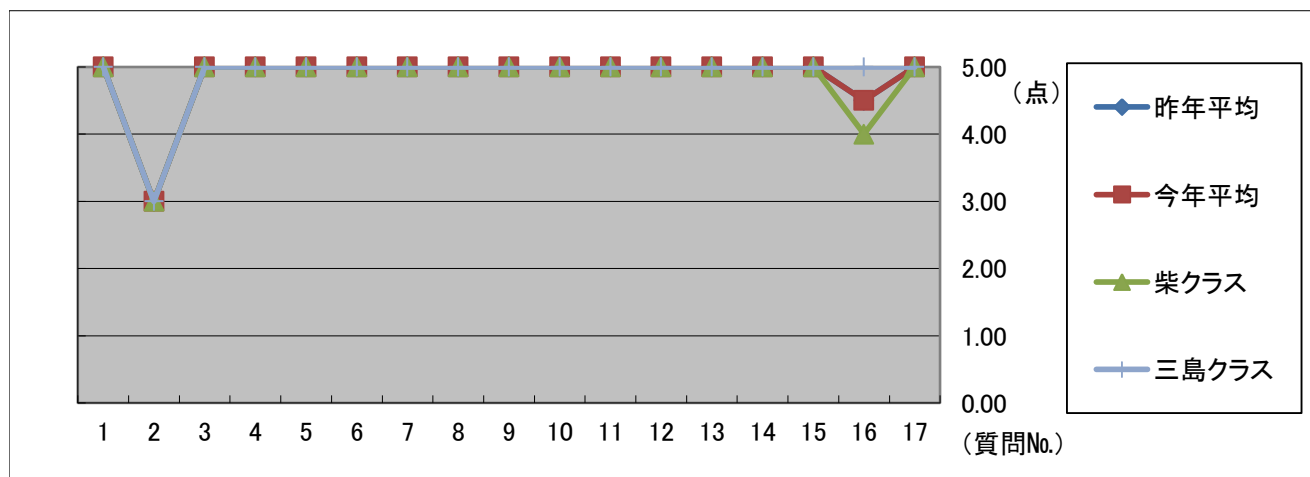
H27時間割編成方針において個別演習科目の設置を増やし受講生の増加を図った。時間外の活動を推進する工夫を行うよう各担当者に働きかける。

系:個別演習科目(論文指導・修士論文)

受講者数: 2

回答者数: 2

質問No.	昨年平均	今年平均	柴クラス	三島クラス
1	5.00	5.00	5.00	5.00
2	3.00	3.00	3.00	3.00
3	5.00	5.00	5.00	5.00
4	5.00	5.00	5.00	5.00
5	5.00	5.00	5.00	5.00
6	5.00	5.00	5.00	5.00
7	5.00	5.00	5.00	5.00
8	5.00	5.00	5.00	5.00
9	5.00	5.00	5.00	5.00
10	5.00	5.00	5.00	5.00
11	5.00	5.00	5.00	5.00
12	5.00	5.00	5.00	5.00
13	5.00	5.00	5.00	5.00
14	5.00	5.00	5.00	5.00
15	5.00	5.00	5.00	5.00
16	4.50	4.50	4.00	5.00
17	5.00	5.00	5.00	5.00
回答者数	2	2	1	1



受講生の傾向

2クラスそれぞれ1名ずつが受講した。受講生に合わせた論文指導が適切に進められた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

理論的展開の訓練、論文作成のための基礎等を習得させるよう1対1で取り組まれた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

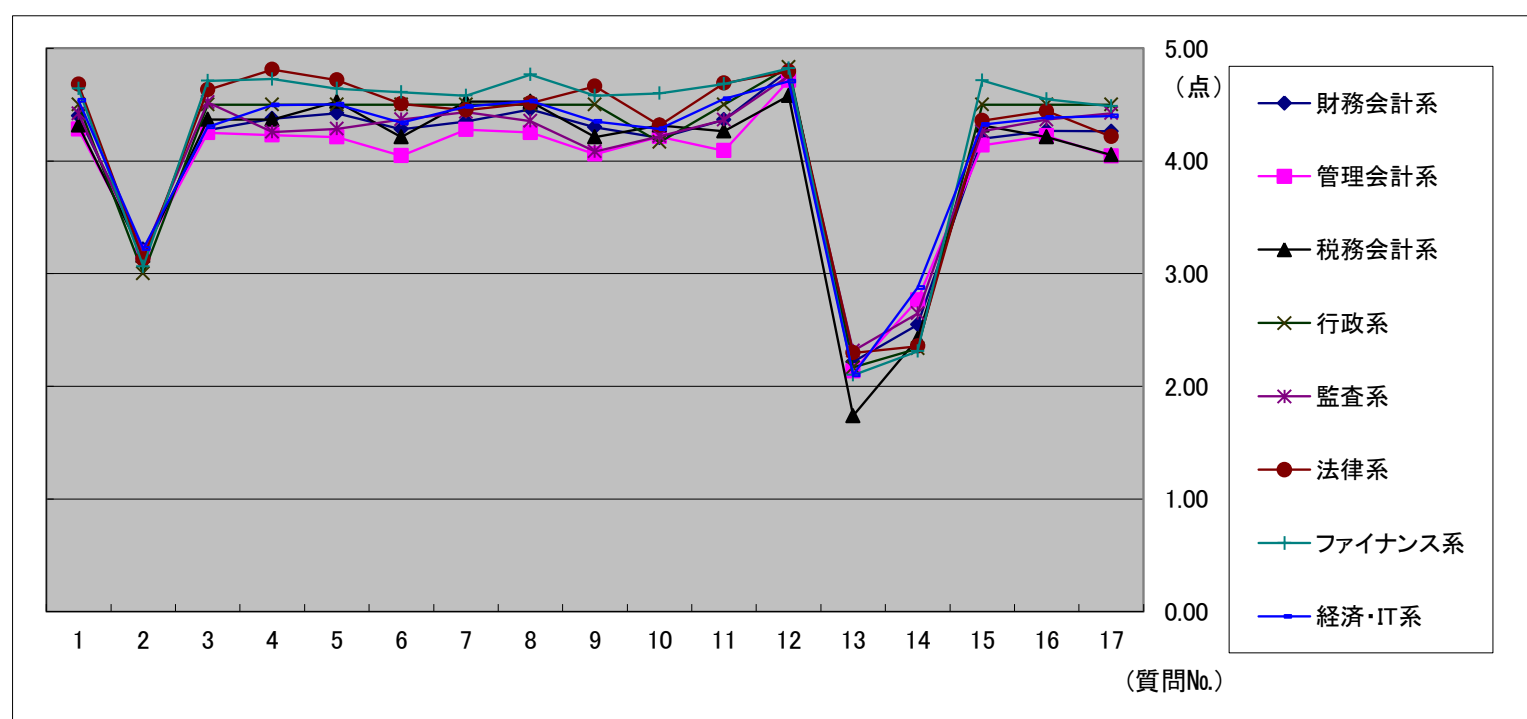
1年間での修士論文作成を、今年度より1年半を掛けての論文作成指導へと変更したため、より効果的な論文作成の指導を行なうことで、途中での脱落を減らすことが重要である。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生の特性・水準に応じた指導が必要である。また論文作成のための基礎的な書く力を身に付けさせるための気長な指導が必要。

系別平均

質問No.	財務会計系	管理会計系	税務会計系	監査系	法律系	経営系	ファイナンス系	行政系	経済・IT系
1	4.40	4.28	4.32	4.42	4.68	—	4.64	4.50	4.54
2	3.21	3.19	3.16	3.18	3.13	—	3.06	3.00	3.22
3	4.27	4.25	4.37	4.52	4.63	—	4.71	4.50	4.30
4	4.37	4.23	4.37	4.26	4.81	—	4.73	4.50	4.49
5	4.42	4.21	4.53	4.29	4.72	—	4.64	4.50	4.50
6	4.28	4.05	4.21	4.37	4.51	—	4.61	4.50	4.34
7	4.35	4.28	4.53	4.43	4.45	—	4.58	4.50	4.48
8	4.46	4.25	4.53	4.35	4.51	—	4.77	4.50	4.53
9	4.30	4.06	4.21	4.08	4.66	—	4.58	4.50	4.35
10	4.21	4.22	4.32	4.22	4.31	—	4.60	4.17	4.28
11	4.36	4.09	4.26	4.36	4.69	—	4.68	4.50	4.55
12	4.80	4.71	4.58	4.75	4.79	—	4.82	4.83	4.71
13	2.21	2.14	1.74	2.31	2.30	—	2.10	2.17	2.10
14	2.55	2.76	2.42	2.65	2.35	—	2.31	2.33	2.87
15	4.20	4.14	4.32	4.26	4.36	—	4.71	4.50	4.32
16	4.27	4.22	4.21	4.37	4.44	—	4.55	4.50	4.39
17	4.26	4.04	4.05	4.42	4.22	—	4.48	4.50	4.40
回答者数	141	66	19	65	73	—	29	4	72



受講生の傾向

全体的な傾向として、受講生はおおむね出席状況はよく、授業への参加意欲は高い。これに反して、授業の予習・復習はあまり実施されていないようである。たとえ熱心に授業に参加していても、授業内容はその場の理解だけではなかなか身に着けることが難しく、予習することでその理解を助け、復習によって自らの実力となるものであり、この点でも授業への参加と予習・復習とは一体として重要な存在である。その他、授業の進め方や教員の授業の準備・学生対応などは、およそ高い評価を得ている。

今後の対応

全体的に見て、学生の状況を把握し、理解度を深めるためには、学生との意思疎通が重要であると認識されている。学生との意思疎通は、授業中での質疑応答や討論のみならず、レポートや小テストの添削等を通じて行うことが可能であり、授業の中で科目の性格や教員に適した学生との意思疎通の方法を工夫し、充実させていかなければならない。また、「受講生の傾向」でも示したことであるが、学生の予習・復習を促すような授業を行うことも必要である。小テストの実施などもその方法の一つであるが、普段から特に指示がなくても予習・復習ができるよう指導する必要がある。これは、近年において見られることであるが、学生の実力が2極化しているという点は授業において注意しなければならず、高い実力を持った学生を満足させるとともに、実力の低い学生の理解をも図るという難しい工夫が必要となる。

Ⅲ. 2014 年度授業評価アンケートフォーム

2014 年度 関西大学「会計専門職大学院学生による授業評価」アンケート

会計専門職大学院 FD 委員会

このアンケートは、授業の改善を目的として実施するものであり、担任者が授業をより一層充実するための資料として利用するものです。したがって、皆さんの成績評価にはまったく関係がありませんので、正直な声をお聞かせください。

- ・アンケートの回答は、マークシートに記入してください。
- ・授業科目、クラス及び担任者を記入してください。
- ・このアンケートは匿名です。あなたの氏名は書く必要はありません。

I. 授業の評価

II. 授業への取組み

I. 授業の評価

1	授業内容は、講義要項、授業計画に示したものに沿った内容でしたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
2	この授業の進度はどうでしたか。
5. かなり早い 4. 早い 3. ちょうどよい 2. 遅い 1. かなり遅い	
3	この授業は教員によってよく準備されていましたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
4	学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
5	この授業での教員の話し方や声の大きさ、説明の仕方は適切でしたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
6	教科書・配布資料の利用は適切でしたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
7	ホワイト・ボードや OHP、パソコン等の機材の使い方は適切でしたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
8	教員は、学生からの質問に的確に対応しましたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
9	宿題および小テストの内容・回数は、講義内容を理解する上で効果的でしたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
10	この授業のクラスの規模は適切でしたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	
11	全体としてこの授業を受講して満足しましたか。
5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全く思わない	

裏面につづく

Ⅱ. 授業への取組み

12	この授業への出席状況はどうでしたか。
----	--------------------

5. 90%以上 4. 70%以上 3. 50%以上 2. 30%以上 1. 30%未満

13	この授業についての予習を、毎回どれくらいしましたか。
----	----------------------------

5. 2時間以上 4. 1時間30分程度 3. 1時間程度 2. 30分程度 1. 0時間

14	この授業についての復習を、毎回どれくらいしましたか。
----	----------------------------

5. 2時間以上 4. 1時間30分程度 3. 1時間程度 2. 30分程度 1. 0時間

15	この授業に触発されてさらに深く学習したいと思いましたか。
----	------------------------------

5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

16	この授業を通じて、職業会計人に必要な知識が深まった、能力が高まったと感じましたか。
----	---

5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

17	あなたは全体としてこの授業を受講して理解できましたか。
----	-----------------------------

5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

—以上—

ご協力ありがとうございました。

IV. 講演会

2014 年度 関西大学会計研究科講演会開催一覧

■客員教授講演会（新入生指導行事）

[平成 26 年 4 月 3 日(木)開催]

◇中央大学大学院戦略経営研究科特任教授／IFRS 財団評議員・副議長

藤沼亜起氏（客員教授）

演題「会計マインドを持った我が国の国際人材の育成」

■招へい研究員講演会

[平成 26 年 7 月 9 日(水)開催]

◇アルカラ大学(スペイン)教授

ゴンサロ・ホセ・アントニオ氏（招へい研究員）

演題「“IFRS :Developments on the way ”」

■客員教授講演会

[平成 26 年 10 月 1 日(水)開催]

◇名古屋経済大学大学院教授／金融庁/企業会計審議会委員・監査部会長

脇田良一氏（客員教授）

演題「公認会計士監査の新展開」

■客員教授講演会（創立 130 周年記念セミナー）

[平成 26 年 10 月 29 日(水)開催]

◇慶応義塾大学教授／元総務大臣

竹中平蔵氏（客員教授）

演題「日本経済：2020 年という大チャンス！」

■客員教授講演会

[平成 26 年 12 月 17 日(水)開催]

◇IFRS 財団アジアオセアニアオフィスアドバイザー／日本公認会計士協会顧問

島崎憲明氏（客員教授）

演題「企業の持続的成長と企業の会計力」

■客員教授講演会（入学前教育指導）

[平成 27 年 3 月 21 日(土)開催]

◇あずさ監査法人代表社員、専務理事・大阪事務所長

吉田享司氏（客員教授）

演題「監査を取り巻く環境変化と求められる人材」

藤沼 亜起 客員教授講演会

中央大学大学院戦略経営研究科特任教授、IFRS財団評議員・副議長

『会計マインドを持った 我が国の国際人材の育成』

会計専門職大学院では、平成 26 年度入学生を対象とした新入生行事の一環として、中央大学大学院戦略経営研究科特任教授、IFRS 財団評議員・副議長の藤沼亜起客員教授をお招きし、講演会を開催します。公認会計士を目指す学部生の聴講も歓迎しますので、多数の方のご来聴をお待ちしています。

■日時：平成 26 年 4 月 3 日（木）

13：00～14：30

■場所：千里山キャンパス第 2 学舎
2 号館 4 階 C401 教室

■演題：会計マインドを持った
我が国の国際人材の育成

■対象：会計研究科新入生・在学生
公認会計士を目指す学部生

■事前申込は不要です。

<会場案内図>



講師 藤沼亜起 氏

関西大学会計専門職大学院
客員教授

<お問合せ先>

会計専門職大学院

電話 06-6368-1121（代表）

E-Mail kaikai@ml.kandai.jp

ゴンサロ・ホセ・アントニオ 招へい研究員講演会 アルカラ大学（スペイン）教授 『“IFRS : Developments on the way”』

会計専門職大学院では、アルカラ大学のゴンサロ・ホセ・アントニオ教授を招へい研究者として受け入れています。この度、講演会を開催します。公認会計士等、会計・監査をフィールドとしてグローバルに活躍したいと考えている学部生の聴講も歓迎しますので、多数のご来聴をお待ちしています。

- 日時：平成26年7月9日（水）
16：20～17：50
- 場所：千里山キャンパス第2学舎
2号館5階 C506教室
- 演題：“IFRS : Developments on the way”
- 対象：会計専門職大学院生及びテーマに興味のある学生・教員
- 英語での講演です（通訳：柴健次教授）。
- 事前申込は不要**です。



<会場案内図>



第2学舎2号館
5階 C506教室

講師 ゴンサロ・ホセ・アントニオ 氏
アルカラ大学教授

<お問合せ先>

会計専門職大学院

電話 06-6368-1121（代表）

E-Mail kaikei@ml.kandai.jp

脇田良一 客員教授講演会

名古屋経済大学大学院教授、金融庁／企業会計審議会・監査部会長

～公認会計士監査の新展開～

会計専門職大学院では、名古屋経済大学大学院会計学研究科教授、金融庁企業会計審議会委員・監査部会長の脇田良一客員教授をお招きし、講演会を開催します。

学部生、大学院生、教職員及び学外一般、多数の方のご来聴をお待ちしています。

- 日時：平成 26 年 10 月 1 日（水）
14：40～16：10（4 時限目）
- 場所：千里山キャンパス 第 2 学舎
2 号館 3 階 C301 教室
- 演題：公認会計士監査の新展開
- **聴講自由・事前申込は不要**です。



第2学舎2号館
3 階 C301 教室
<14 時 20 分開場予定>



講師 脇田良一 氏

関西大学会計専門職大学院
客員教授

<お問合せ先>

関西大学会計専門職大学院

電話 06-6368-1121（代表）

Mail: kaikei@ml.kandai.jp

竹中平蔵 客員教授講演会

慶応義塾大学教授、元総務大臣

～日本経済：2020年という大チャンス！～

会計専門職大学院では、慶応義塾大学教授、元総務大臣の竹中平蔵客員教授をお招きし、講演会を開催します。

学部生、大学院生、教職員及び学外一般、多数の方のご来聴をお待ちしています。

- 日時：平成 26 年 10 月 29 日（水）
16：20～17：50（5 時限目）
- 場所：千里山キャンパス
第 2 学舎 BIG ホール 100
- 演題：日本経済：2020 年という大チャンス！
- **聴講自由・事前申込は不要**です。

<会場案内図>



第2学舎5号館
BIGホール100
<15時50分開場予定>



講師 竹中平蔵 氏
関西大学客員教授

<お問合せ先>

関西大学会計専門職大学院
電話 06-6368-1121（代表）
Mail : kaikai@ml.kandai.jp

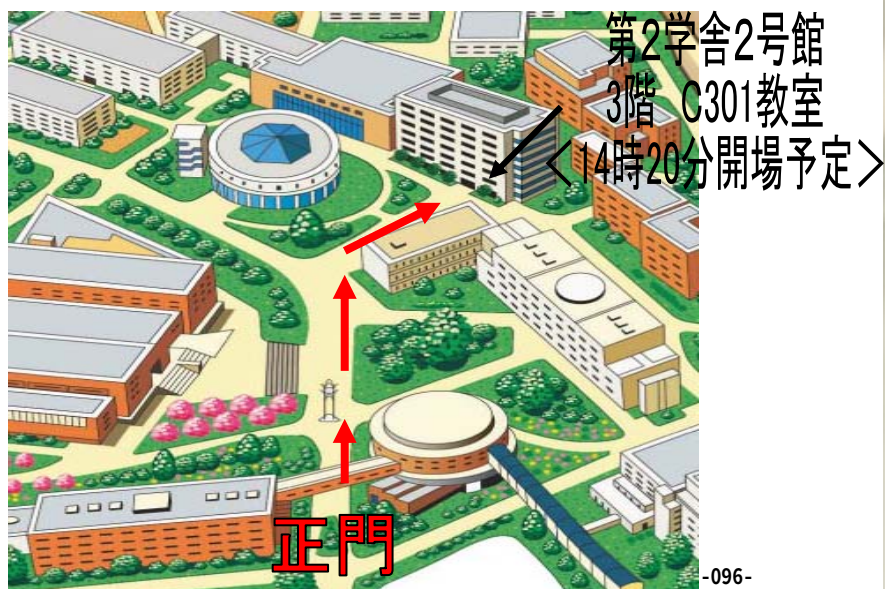
島崎 憲明 客員教授講演会

IFRS財団アジアオセアニアオフィスアドバイザー、日本公認会計士協会顧問

企業の持続的成長と企業の会計力

会計専門職大学院では、IFRS 財団アジアオセアニアオフィスアドバイザー、日本公認会計士協会顧問の島崎憲明客員教授をお招きし、客員教授講演会を開催します。
学部生、大学院生、教職員及び学外一般、多数の方のご来聴をお待ちしています。

- 日時：平成 26 年 12 月 17 日（水）
14：40～16：10（4 時限目）
- 場所：千里山キャンパス第 2 学舎
2 号館 3 階 C301 教室
- 演題：企業の持続的成長と企業の会計力
- **聴講自由・事前申込は不要**です。



講師 島崎憲明 氏

関西大学会計専門職大学院
客員教授

＜お問合せ先＞

関西大学会計専門職大学院

電話 06-6368-1121（代表）

Mail: kaikai@ml.kandai.jp

吉田 享司 客員教授講演会

あずさ監査法人代表社員 専務理事・大阪事務所長（公認会計士・米国公認会計士）

～ 監査を取り巻く環境変化と求められる人材～

会計専門職大学院では、平成 27 年度入学予定者を対象とした入学前指導の一環として、あずさ監査法人代表社員 専務理事・大阪事務所長の吉田享司客員教授をお招きし、講演会を開催します。公認会計士を目指す学部生の聴講も歓迎しますので、多数の方のご来聴をお待ちしています。

■ 日時：平成 27 年 3 月 21 日（土・祝）

11：30～13：00

■ 場所：千里山キャンパス第 2 学舎

2 号館 5 階 C507 教室

■ 演題：監査を取り巻く環境変化と求められる人材

■ 対象：会計研究科入学予定者・在学生

公認会計士を目指す学部生

■ **事前申込は不要**です。



講師 吉田享司 氏

関西大学会計専門職大学院
客員教授

<会場案内図>



<お問合せ先>

会計専門職大学院

電話 06-6368-1121（代表）

E-Mail kaikai@ml.kandai.jp

関西大学大学院会計研究科（会計専門職大学院）

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

電話 (06)6368-1121 (代表)

Fax (06)6368-0248